
岡田直己の神様体験

月的恭樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岡田直己の神様体験

【Nコード】

N6253K

【作者名】

月的恭樹

【あらすじ】

高校二年生の岡田直己は、ある日舞手山という山を登ってる間に登山道から滑落し、転落死してしまう。そのまま成仏し、転生……かと思いきや、山頂の神社から追いかけてきた女に捕まり、半強制的に「神格化」という契約を結ばされる。そして直己は、舞手山の守り神になってしまい……。

舞手神社のプロローグ

槻つき滴てき県ま舞手市まてにある、県内で一番大きい山、舞手山。この山は江戸時代に一回だけ、地元を完膚なまでに壊滅させるほどの大噴火を起こした事があったが、それ以降はぱったりと噴火活動を停止し、火山噴火予知連絡会からもランクC（活動度：最低）と認識された。

また、火山である為に地熱を利用した発電所が建設され、この舞手地熱発電所は県の四割の電力を担っている。舞手山の北部を水源として流れ出す北舞川きたまいかわの途中には舞手ダムも建造され、この舞手水力発電所は県の三割の電力を担い、結果的に舞手山からは県の七割の電力を供給している。

数年前、舞手山のある箇所から温泉が発掘され、舞手温泉と名づけられた。この温泉は皮膚病、アトピー、神経痛、冷え性、汗疹、湿疹、リュウマチ等々、様々な病気に対して有効で、連日大賑わいである。この温泉を中心に、舞手山の一区画は周囲より、もしかするとふもとよりも観光地として発展している。

舞手山には二つの川が流れている。一つは先程申した通りの、北部に水源を持ち途中に舞手ダムも建造されている北舞川。もう一つは南部に水源を持ち、全体の流域面積や長さでは北舞川に劣るものの、その景色の美しさは県内一と噂されている南舞川みなみまいかわ。どちらも一級河川に登録されており、夏になると水遊びをする子供達で一杯だ。

また、舞手山には形武鍾乳洞けいぶという石灰洞がある。この鍾乳洞は恐ろしく深く入り組んでいて、あちこちに安全の為の柵やチェーンが張り巡らされており、手すりもこれでもかというほどd乱立している。それにも関わらず毎年数人が遭難し、数年後に死体あるいは

骨となつて発見されるのだから恐ろしい事極まりない。まあ、最も恐ろしいのは、それでも進入をやめない物珍しがりな観光客達だろ
うが。

舞手山の東には奔努池ほんどという大きな池がある。この池の水はとて
も透明で澄んでいて、数メートル下にあるはずの底が見える位だ。
絶滅危惧種に指定された希少魚類も住んでいて、観光地としても重
要な役割を担っている。川と同じく、夏になると水遊びをする子供
達で絶えない。

その池の近く、といつても数キロ先だが、そこに腕布沼わんぷというこ
れまた大きな沼がある。ここは世にも恐ろしい底なし沼で、年に数
人、しかも鍾乳洞での死亡者数以上の数がこの沼に飲み込まれて死
亡している。それもこれも、腕布沼が自殺の名所だという噂が流れ
たせいだ。バリケードや地元住民の見回りのお陰で名所化は免れて
いるが、それでも自殺する人は耐えない。しかも、死体は数週間、
あるいは数ヶ月間、数年間経った後に沼の表面に浮かんでくる事が
あり、その為に一時期は心霊スポットとしても持てはやされた。最
近は不法投棄場にもなりつつある。周囲からは、「舞手山の影の部
分」とまで言われている。

少しホラーな話が続いてしまった。もちろん、舞手山はそういう
ブラックな面しかない山ではない。舞手山頂にある舞手神社、ここ
では舞手山の守り神である「舞手神」が祀られている。舞手神とは
文献によれば、江戸時代に人柱としてこの山に捧げられた「岳野妙
子」という女性だそうだ。

この神社では年に二回、夏と秋に縁日が行われ、当然その日は大
賑わいだ。また、初詣にも多くの人々がやってくる。この神社も観光
地的一种となっている。

登山道はそれこそ昔は滑落事故が多発したものの、現在ではほと

んどの道の両脇に鉄柵が備え付けられていて、滅多に事故は起きていない。また、登山道をいちいち歩かなくても、車道を走れば舞手山を越えられるし、温泉や神社にも到達する事が出来る。

以上のように沢山の観光地がある為、山には宿泊施設や飲食店、土産物屋の類も一杯建設されている。事故が多発している為、捜索願提出専門の警察出張所や、特設のレスキュー隊まである始末だ。学校の修学旅行や会社の社員旅行としても定番の地となり、最近では某国の大統領が訪れた事でも話題になった。

舞手山の知名度は、守り神の意図を他所にどんどん上がっていった。

「もう無理じゃ〜！ 早く誰かと交代したいのじゃ〜！」

飽和する程の荘厳な雰囲気を含む、早朝の舞手神社。今、この神社に、若い女の大声が響き渡った。

見ると、社務所の前に二人の女性が立っていた。一人は黄土色の着物を着ている。腰の少し上まで伸びた黒くて長い髪、端正な顔立ち、高身長、巨大な胸等、美人だった。もう一人は巫女の格好をしている。腰まで伸ばした黒髪を檀紙で纏め麻紐で縛っていた。顔立ちは整っている。身長は着物の女より低いが、世間一般的に標準の高さ。胸は着物の女と同じ位あった。

着物の女が巫女の服を掴んで、何やら喚き散らしている。一方巫女は、欠伸をしながら着物の女の訴えを退けていた。

「しかし、^{たけの}岳野様。交代するのは構いませんが、元となる魂がないと交代は出来ません。補欠が居ないのに選手のチェンジは不可能です」

岳野と呼ばれた着物の女は、うう、と唸った。

「し、仕方ないであろう！ 最近は観光客も用心深くなったのか、滅多に事故死しなくなったのじゃから……」

「守り神が観光客の事故死減少を残念がるなんて……。事故が無くなるのは、良い傾向じゃありませんか。これで鍾乳洞と沼も、死亡者が無くなれば良いのですが」

「そ、それはそうじゃが……玉枝、妾の気持ちも考えておくれ！ 最近舞手山の知名度は、ぐんぐん上昇していつている。この前なんか、一国の大統領が訪問した程じゃぞ？ それに伴い、この山の管理がどれだけ大変になっている事か……」

玉枝と呼ばれた巫女は、それは同情しますが、と言った。

「同情してるのなら……」

「でも、こればかりはどうしようもありませんよ……。神様は人間を直接殺害出来ないのですから……」

「それはそうじゃが……」

「このままじゃあ無限ループです。この話は止めましょう。私は社務所に帰って寝ます。この話の続きは、次に起きてからにしましょう」

玉枝はそう言うと、欠伸をしながら社務所へと戻っていった。岳野ははあと溜め息を吐いて、自分も寝る為に拝殿へと向かっていった。

岳野は参道を歩いている間、「今日の地形神管轄外領域での死者数」と心の中で念じた。すると岳野の頭の中に、「0」という数字が浮かび上がった。これは念じた通り、今日の死者数を表している。数ヶ月前から数字はずっと「0」のままだった。何とかならないかのお。岳野は誰にともなく願った。

その時だった。

岳野の願いに呼応するかのように、数字が「0」から「1」に変わった。

「?! なんと?!」

数字が増えたという事は、ついさっき誰かが山内の、しかも地形神管轄外領域で死亡したということだ。

「こつしちやおれん……。早く魂を回収せねば……」

魂は大体、死んでから一分で成仏が始まり、更に三分で完全成仏する。その間に魂を捕らえ、「神格化」の契約を結ばせれば晴れてその魂は「神」となり、岳野はその役職から解放されて成仏し転生できる。

早く、魂を探さなければ。岳野は心の中で「最近発生した魂の位置」と念じた。すると岳野の頭の中に舞手山の地図が浮かび上がり、その一箇所が赤く点滅しだした。その点は登山道のすぐ近くにあった。どうやら魂の持ち主は滑落し、転落死したらしい。

岳野は空中に浮かび上がると、魂の場所へと飛んでいった。

舞手神社のプロローグ（後書き）

感想、批評、誤字・脱字報告、お待ちしております。

岡田直己の神様就任

目の前が一瞬、霞んだ。思わず鉄柵に寄りかかる。

そして全体重をそのまま鉄柵に預け、自分は暫し休憩した。だが、数メートル先を歩いている友人三人は、俺の休憩に気付かないままどンドン先へ行こうとしている。

「ちょよ、ちょっと待ってくれ〜」

俺、岡田直己は、弱々しい声でそう呼びかけた。

しかし、三人は気付かない。俺は更に声を大きくした。

「ちょっと、待ってくれー！」

そう叫ぶと、三人組の中でも先頭を歩いている私市きさいち由佳ゆかが振り返り、怒鳴った。

「うるさいわね！ 静かに歩きなさい！」

私市は端正な顔立ちをしていて、いわゆる美人の部類に入る。黒髪を肩まで伸ばしていて、頭には白いカチューシャを着けていた。痩せているが、その為貧乳。美形なのに、元来の気の強さが災いしていて、告白されたことはないらしい。ツンデレではなく、ツンツンだ。登山が趣味で、部活も山岳部に入っている。

私市はそう怒鳴り捨てると、更に先へ進もうとする。これ以上置いていかれたら、たまったもんじやない。

「ちょよ、俺疲れてるんだよー！ 歩くのゆっくりにしてくれー！」

私市は露骨に嫌そうな顔で振り返り、一旦舌打ちした。

「じゃあ、後ちよつと登ったら休憩用の小さな広場があるから。そこで先に待ってるわ」

私市はそう言うと、顔を前に戻して歩き始めた。

三人組の真ん中を歩いている庵原隆いはらが振り返って、言った。

「頑張れよー、岡田！ 先に言ってお前の分まで菓子食つといてやるからな！」

「ちよつとおおおおおお！！」

庵原は手を振ると、歩くのを再開した。庵原は整った顔をしていて、黒い短髪。スポーツをやっている為、スタイルも良い。黙っていればいわゆるイケメンの部類に入るのだが、そのテンションの高さ故に、人気者にはなってもモテた事はないらしい。性格で損をするタイプだ。

次に、三人組の一番後ろを歩いている業天昭男あまてんが振り返り、喘ぎながら言った。

「が、頑張つて下……さ……い……ね」

業天は途切れ途切れにそう言うと、すぐ私市たちの後を追い始めた。

業天は他の三人と同様、整った顔をしている。前髪が長い為下手すると根暗に見えるが、顔自体は文句なしのイケメンだ。ネットサーフィンとテレビ観賞が趣味の、もろインドア派の理系である。俺達が友達にならなかつたら、本当に引きこもってたんじゃないだろうか。

そしてこの美形ぞろいの三人組の中に居る、フツメンの男……それが俺、岡田直己だった。趣味は囲碁とネットサーフィン、後業天に薦められて見始めたオタクアニメ。イケメンではない上に、準オタク……自分で言うのもなんだが、救い様がない。

業天が歩き始めた所で、ようやく心臓の鼓動も落ち着き、俺も歩くのを再開できた。俺は鉄柵から離れると、三人を追って登山道を歩き始めた。

そもそも今日は、私市が趣味の登山に俺達を誘ったのだ。しかも、早朝から。登山口のおっさんだつて熟睡してたぞ。まあお陰で、無料で中に入れたが。

俺原はともかくとして、俺みたいな素人も居るのだから、足手纏いになることぐらい予想できて、対応もできると思うのだが……ああ、本当に私市は性格で損してるよな。ある意味俺原以上に。大体、ツンデレはデレがあつて初めて萌え要素になりうるのだ。デレのない……ツンデレ……など……ただの……迷……わ……。

……駄目だ、思考が途切れ途切れになっている……。空気が薄いせいか、少し歩いただけで息切れを起こし、頭も上手く回らない……。もう一回休もう……。俺は鉄柵に再び寄りかかり、全体重を預けた。

そして大きく息を吐いた、次の瞬間。

ゴロ、と、何とも言えない、鈍い音がした。

気付くと、寄りかかっていたはずの鉄柵が無くなっていた。

次に、足が地面から離れる感覚があつた。俺の体は空中に投げ出

される。何故か俺の体の、側面に重力が掛かった。下を見ると、根元から崩れた先程の鉄柵が、数メートル下で崖から突き出している岩に衝突し、派手に変形していた。

それを視認している間も、どんどん俺の体はその岩に近づいていた。

俺はやっと気付いた。

落ちてるな、これは。

ああ、短い人生だったなあ。まさか鉄柵に寄りかかったら、根元から崩れ落ちるなんて……。予想外の出来事だ。こんな所で人生を終えるとは……。

岩肌が鼻のすぐ先まで近づいた、次の瞬間。

星が舞う程の激痛が脳内を駆け巡り、目の前が一瞬真っ暗になった。

そう、真っ暗になったのは一瞬、一秒も掛からない間だった。すぐに目の前が明るくなり、赤い地面が視認出来た。

助かったのか？ そう思った瞬間、数メートル下でドサツという何かが落ちる音がした。俺はそれが何か見ようと、地面に手をつけて立ち上がった。

すぐに違和感に気付いた。手をついたはずなのに、岩を触ったという感覚が無い。試しに岩を踏んだり、崖を蹴ったりしてみるのが、

感じられるはずの触覚が伝わってこない。右頬を爪^{つね}つてみる。触った感覚も無いし、痛んだ感覚も無い。

なるほどな。

これが、「幽霊」って奴か。

……結局、死んでしまったのか。

俺は岩から身を乗り出し、音のした方向を見た。

すると、……描写するのもためられる程グロい状態の、俺の肢体、いや死体があった。本当、己の体なのに身の毛が弥立つほど惨たらしいので、具体的な表現は避けるが……本来頭があるはずの場所に頭がなく、曲がってはいけない、そもそも曲がるはずのない方向に手足がひん曲がり、腰から上と下とが……うう。更に体を中心にして血溜まりが発生し、それが徐々に広がっている。

幽霊だから当然なのかもしれないが、吐き気は襲ってこなかった。ただ呆然と、俺の死体を見つめていた。

……と、いう事は、この岩肌の赤い奴は俺の血液か。んで、白いが脳味噌で……。たぶん落ちた際に、いったんこの岩で頭を強打し、それから再び下に落ちたのだろう。

そこまで考えた時、上で聞き覚えのある叫び声が聞こえた。

見上げると、三つの影が鉄柵の上から身を乗り出していた。私市、庵原、それに業天だった。私市と庵原は、顔面蒼白で俺の死体を見ている。業天に至っては目を閉じて気絶していた。恐らく、さっきの落下音を聞いてやってきたのだろう。

私市達は震える声で会話した。

「どうしよう！ どうしよう！ 岡田君が……」

「どうしようだったって……ききき救急車だ！ 救急車！ いいいや、あれじゃ手遅れか……じゃじゃあ、警察！ 百十番！」

「でも登山道は圏外だし……あ、さっきの広場に公衆電話があったんじゃない？」

「それだ！ 早く警察を呼んでくれ！」

庵原がそう言うと、私市が小走りで広場へと向かった。庵原はただ顔面蒼白で俺の死体を見つめていた。業天は鉄柵に寄りかかっていた。まさか、もう一度崩れやしないだろうな。

そんなことを考えていると、不意に目の前の景色が下降していった。いや、違う。俺の体が上昇しているのだった。これがいわゆる成仏って奴か。いやそれにしても、結構この世に未練はあるんだが……。まあ、あの世のシステムなんて、さっきまで生きていた奴が知られるものじゃない。

下を覗き込む庵原達を追い越して、俺は上昇し続けた。やがて、舞手山の全貌が見えてきて、麓の景色も見えてきた。不意に悲しさが込み上げてきたが、涙は一滴も出なかった。

そして雲を突き抜け、このまま上昇し続けると思われた、その時だった。

「ちよおおー！ っつと待ったああああー！！！」

若い女の絶叫が響いた。

俺は驚いて、周囲を見回した。すると、山の方、丁度舞手神社の辺りから、何かがかっちに向かってやってきているのが見えた。

俺は眼を凝らして、それを見た。

「戻れええええー！！！！」

それは、黄土色の着物を着た、若い女だった。顔立ちは美しく、私市とは比べ物にならない。俺が今まで見た中で、一番の美人だろう。腰まで伸ばした長くて黒い髪を持ち、身長は俺よりずっと高い。スタイルも抜群で、胸の大きさは目を見張るものがあった。

……そういう女が、その長い髪を振り乱し、鬼の形相で向かってきている。

「ぎゃああああー！」

何だ？！ 何だあれは？！ ……そうか、俗に言う死神という奴か！ 「戻れ」と言ってたから……本来俺は地獄に行くはずなのに、成仏しようとしてるから慌てて来たんだな！ そういうことか！

「く、来るなあああ！ 俺は天国に行くんだああああ！」

「悪いようにはしないいいいい！！！！」

死神はそう叫び、じたばたと抵抗する俺の左腕をぎゅっと掴むと、一気に地面へ下降し始めた。俺の体もつられて下降する。流れに逆らっているせいか、やけに気持ち悪かった。吐けないから、余計に厄介だ。

このまま、地中に潜り込んで地獄へと行ってしまうのか。そう思ったが、その死神は途中で方向転換すると、さっき自分が来た舞手神社へと戻って行った。

俺は死神と一緒に、参道に着地した。着地した途端に、逃げ出そうと暴れだした。

「やめてええええ！ 特に何も悪い事してないのにいいいい！ 何で地獄なんかに行かなきゃならないんだよおおおお！」

しかし死神はしつかりと俺の腕を握ったままである。そして何故か、怪訝そうな表情をしていた。

「地獄？ 何の事か……」

「とぼけんなああああ！ お前死神だろうがああああ！ どうせ俺を地獄へと引きずり込もうとしてんだろおおおお！」

そう言うと、何故か死神は、ニヤリ、と不適に笑った。

「そうじゃ、よく分かったのお。妾は死神じゃ。地獄専門のな」

「やっぱりいいいいいいいい！！！」

「まあ、待て。どのような罪を犯したのか、覚えている分だけ挙げてもらおうかの。内容によれば、地獄行きを免れるかも知れんぞよ」

「ほ、本当か！ ええと、お使いに行つた時に数十円だけお釣りがら金をくすねたり、飲まなきゃならない薬を飲まなかったり、テストで見直ししなかったり、鉛筆の先を齧^{かじ}ったり、ラジオ体操を黙ってやったり、消しゴムを鉛筆でプスプス刺したり……」

「あゝあゝあゝ、いかなの、いかなのお！ お前は地獄の、それも最下層の無間地獄行きじゃな。輪廻の輪からも除外されるであろう」

「まじでえええええ？！ たったこれだけでえええええ？！ 嫌だああ

あああああ！！！！！」

「まあ、落ち着くのじゃ。一つだけ、地獄行きを免れる方法がある」
俺は抵抗するのを止め、土下座した。

「ご教授下さい死神様」

「うむ。それじゃあ、この神格化契や……オホン、書類にサインするのじゃ」

そう言っただけで死神は、懐からボールペンと数ページの書類の束を取り出した。既に一番下の紙までめくられてある。死神が指差した所には、確かに氏名を記入する枠があった。

だが気になったのは、紙の上端にある「靈魂神格化契約書：舞手山管轄地勢神」という文だった。

「なあ、その『靈魂神か』うだうだ言っていると地ご『書きまああああ』あつす！」

俺はその紙とボールペンを奪い取ると、枠の中に「岡田直己」と乱暴な字で書き込んだ。

「はあ、はあ……これで良いのか」

死神は差し出された紙を受け取り、枠を見ると、満足そうに微笑んで言った。

「よし。これでOKじゃ。……ふむ、そろそろ『神格化』が始まる頃じゃな」

何だそれ、と言おうとした、その時。

目の前が、明るくなった。足元で何か光っているようだった。下を見ると、光っているのは地面じゃなく、俺の両足だった。光は脛、腿、腰、腹、胸、首、顎とどんどん上がってきた。

「ななな、何だああああ？！　おい、死神いいいい！　こりゃー
体、どういう事じゃああああ！」

死神は、俺を見つめてにっこりと微笑んだ。その美しさに、思わず怒りを忘れて絶句した。

死神は、言った。

「じきに、分かる」

やがて、視界が真っ白になった。

岡田直己の現状把握

段々と、視界が回復してきた。ちゃんと物がはっきり見えるようになってくる。そして最初に視認したのは、俺の目の前でニヤニヤしながら突っ立っている、あの死神だった。

俺は両手の掌を広げ、見てみる。特に変化は見当たらない。ズボンの裾を上げ、脛を確認する。変化なし。顔をペタペタと触ってみる。変化なし。

……いや、正確には変化はあった。生前のような、五感が全て復活している。試しに参道を踏みつけると、硬い感触が伝わった。

一体、さっきの光は何だったんだ？

「おい、死神。さっきのは一体何だったんだ？」

俺は取り敢えず、目の前の死神に問いかけた。

死神はニヤけながら言った。この女は、邪悪そうな笑みでも美しく見せるのだから質が悪い。

「『神格化』じゃよ」

「神格化あ？」

「ああ、そうじゃ。未成仏の靈魂を、神様にする為のな」

俺は眉をひそめ、「はあ？」と言った。

「どういうことだ？ ……まさかとは思うが、俺は神様になってしまったのか？」

死神は頷いた。

「そうじゃ。お主は今日から立派な、この舞手山の守り神、『舞手神』じゃ」

マウテガミ？

何だそれ、と言いかけた所で、観光案内の文章を思い出した。確か舞手神とは、舞手山の山頂にある舞手神社で祀られている、舞手山の守り神のはずだ。

「……え？ 何？ 神様って実在したの？」

「当たり前じゃ。妾から言わせてみれば、実在しないと信じてる方がおかしい。何故、神話をフィクションだと決め付け、神様など居ないと断定するのか」

……頭が混乱してきた。

「え？ 何で俺なんか神様に？ そもそも、お前は死神じゃないの？ 地獄行きの件は？ 何で死神が俺を神様なんかに？」

次から次へと疑問が湧き出て、頭の中が占有されていく。

「うむ。詳しい事は、妾より妾の友人の方が説明に長けている。こちらに連れて来ようぞ」

そう言つと、死神は参道を社務所の方向に歩き始めた。俺は慌てて後を追ひ、死神に訊く。

「待て。これだけは訊かせてくれ。お前の正体は？」

死神はにっこりと微笑んで、

「岳野妙子。『元』、舞手神じゃ。念の為言っておくが、死神などではない」

と言った。

.....。

「騙したなあああああ！」

「ちよつと、身分を偽っただけじゃ」

「それを騙すって言うんだよおおおおお！！！」

死神、いや岳野が社務所に入って数分後、中から巫女装束の女の人が欠伸をしながら出てきた。岳野と並ぶ位の美人だった。顔立ち

は整っていて、いわゆる「キレイ系」。腰まで伸ばした黒髪を後ろに回し、檀紙で纏めて麻紐で縛っていた。身長は俺と同じ位で、岳野と同程度の大きさの胸を持っていた。正直、目の保養になる。

巫女さんは俺の一メートル前に立つと、じつくりと俺を見つめてきた。と言うより、睨んできた。ついつい、目が合ってしまう。逸らすのも癪なので、睨み返してやった。

睨み合いが続いて丁度一分後、巫女さんがいきなり土下座した。突然の事態に、俺は面食らった。

巫女さんが喋り始めた。

「百二十三代目舞手山管轄地勢神、岡田直己様。お初にお目にかかります、私めは榊原玉枝たかまきたまえと申します。この舞手神社の巫女を務めさせて頂いております。どうぞ宜しくお願い致します」

「あ、ど、どうも」

俺は慌てて頭を下げた。榊原が立ち上がった。凜とした目で見つめてくる。今度は、先程のような睨み付けるといった感じではない。

「先程は失礼ながら、貴方様がきちんと舞手山管轄地勢神の神格化に成功したかどうか、検査させてもらいました。それではさっそく、舞手山管轄地勢神、通称『舞手神』の概要と役割をご説明させていただきます」

「わ、分かった」

「まず『舞手神』というのは、観光案内にも記載されてある通り、この舞手山の守り神です。舞手神様は代々、山内の地形神管轄外領域で事故死した人物の靈魂の間で引き継がれてきました。貴方で丁

度百二十三代目です」

「え？ チケイシンカンカツガイリヨウイキ？」

何だそれは？ 語感からすると、「チケイシン」が管轄していない領域のようだが。

「それは後にご説明致します。さて、舞手神様の役割ですが……二つあり、至って単純です。一つ。この山で災害や事故が起きないよう、山を守護して下さい」

「それは……一体どうやれば良いんだ？」

「簡単です。山中に居ればいいのです。岡田様が山中に居るだけで、この山は守護され、災害が起き難くなります」

「居るだけで良いのか？」

榊原は頷いた。

「ええ。そもそも、土地というのは本来、かなりのエネルギーを溜め込んでいます。あ、どういうエネルギーかは分かっておりませんので、訊かないで下さいね。エネルギーとしか形容できない物なんですから。とにかく、そのエネルギーが飽和すると、土石流や崖崩れなどの『災害』が起きてしまうんです」

俺は内心で身震いした。そのエネルギーとやらは、大変危険な存在らしい。

「その為、エネルギーが飽和しないようにエネルギーを山の外へと

逃がさなければなりません。エネルギーは飽和すれば大災害を引き起こしますが、飽和する前に正当な手順で逃がせば問題ないんです。そして、どのような手順を踏むかというところ、榊原は一旦言葉を区切った。「神様の体を媒体にして、後は勝手に放出されていきます。つまり、神様本人は何もしなくて良いのです」

「……つまり、この山はどんどん水が溜まっていく池みたいな物で、水が溢れると災害が発生する。俺はそれを防ぐ為に水を逃がす、…水門みたいな役か？」

「その通りです！ さすが、岡田様は例えが上手い」

さすがって何だ、さすがって。まだそんなに親しくないだろ。

「それで？ もう一つは何だ？」

「幾ら神様が山内に居ても、たまにエネルギーが漏れてしまう事があります。手で救い上げた水が指の隙間から零れ落ちるような物で、これは不可抗力なんです。特に、就任して最初の頃は、エネルギーが漏れやすい状態になっています。エネルギーが漏れると当然、災害が発生します。その際に、被災者を救出して下さい」

「それはつまり、山岳救助隊みたいなことをしろってか」

俺の頭の中に、オレンジ色の制服が浮かび上がった。

「まあ、簡単に言えばそうですね。しかし、人間の力で十分抗える程度のものなら、わざわざ神様が出場せずとも、レスキュー隊が救助活動を行ってくれますが。問題は、人間の力では到底抗えないよな、大規模なものが発生した場合です」

「でも、俺にそんな大層な役が務まるかどうか……」

「それは大丈夫です。神様補正が付いたはずですから。身体能力が格段に上昇しているはずですよ?」

俺は試しに、その場で跳んでみた。すると、十メートル位上に跳べてしまった。

次に、瓦割りの要領で地面を殴りつけてみた。小規模なクレーターが出来た。

「……こりゃあ、すげえな……」

思わず自分の掌を見つめ、呆然とする。

「他にも、特殊能力が付きました。物質透過能力、不可視化、浮遊飛行能力、位置検索、数値化把握……この山に関する事や、ご自身に関する事はほとんど何でも出来ますよ? もっと具体的に言えば、対象物の位置を搜索したり、山内に居る生命体の数を数値化して脳内で把握したり……」

俺って、最強じゃないか。まあ、神様だから当然なのかもしれないけどな。

「あ、それともう一つ。岡田様は、『風』を操る事が出来ます」

「は? どういう意味?」

「俗な比喻をすればですね、ファンタジーゲームや小説に出てくる、風属性の魔法を使えるようになりました」あまりにも俗っぽかった

ので、少し驚いた。「しかも、あらかじめ設定された術しか使用出来ないのではなく、自由に想像して使用する事が出来ます。例えば、そうですね……よくゲームなんかである、『風の刃』を想像して下さい」

俺は言われた通りに、脳内で風の刃を想像する。透明で三日月形の、テンプレートなカッターの形をした奴。

「後はそれを、飛ばして下さい。やり方も同じです。『飛べ』って念じて下さい」

俺は野球の試合中に投球するような感じで、右腕を前に振った。すると、何かが出たような感覚を覚えた。直後、見えない刃が飛んでいき、榊原の頭を掠めて飛んでいって、遠くの樹林に衝突した。よく見ていると、刃のある空間だけ周囲より歪んでいた。

「どうです？ こんな感じですよ。別に刃だけでなく、他にも風を使用しているなら、どんな事でも出来ますからね。ええと、他にご質問は？」

「うーん……じゃあ、救助している時、俺達神様の姿って視認出来るのか？」

「私めのような神職に就いている方や、靈感が特別に強い方……大抵その人の前世って、神様を経験してらっしゃるんですけどね。とにかく、そういう方々なら視認出来ますよ。また、他の神様も視認出来ますし、前述の『実体化』を使用する事で、一般の方々にも視認させる事が可能です」

どうやら、俺達神様の姿は、一般人には見えならしい。まあ、

見えてるなら、神様の存在が当たり前の社会になっているはずだしな。俺は最初から信じてなかったし。

「ただし、一般の方々の場合、山内から出ると同時に神様と出会った記憶、また神様の力添えにより発生した事象についての記憶は消し去られます。神様が、その人に対して、記憶を忘れさせないようにするのは出来ませぬけれど」

これも、山岳救助には都合の良いシステムだ。これさえあれば、一般人の前でどんなに派手な救助活動をやっても大丈夫。

……あ、そう言えば。

「なあ、チケイシンカンカツガイリヨウイキって何だ？」

「ああ、それですね。それを説明するにはまず、地形神と地勢神について知って貰わなければなりません」

チケイシン？ チセイシン？ 何だそりゃ？

「地勢神とは、山や川、湾や湖等、大陸もしくは海に大きな影響を与える地勢を守護する神様です。地形神とは、池や沼、洞窟や泉等、大陸もしくは海に小さな影響を与える地形を守護する神様です。どちらも、守護対象の規模が違うだけで、基本的に役割は同じです。まあ、地形神よりも地勢神の方が偉いのですが」

「なるほど……じゃあ、チケイシンカンカツガイリヨウイキってのは、地形神が守護している領域以外の領域って事か」

榊原が頷いた。

「そうです。つまり、舞手神様が直接守護なさっている領域ですね。具体的には、登山道とか、樹林とか、車道とか」

ふっん、と俺は言った。

「……じゃあ、神様には何か制限のような物は無いのか？」

「二つあります。まず一つ。山内から出て外に行く事は出来ません」

俺は一気に失望した。せめて、家族に会いに行きたかったのに……。

「ですが、何か外に用があれば、私に何なりとお申し付け下さいませ。岡田様の為なら、どんな事でもご奉仕致します」

榊原はそう言って、頭を深く下げた。何と云うか、この人は本当に、神様というのを妄信している。冗談で下の世話を頼んだら、本当にしてくれそうだから怖い。

「二つ目。動植物を問わず、基本的には生命体に危害を加える事はできません。と言うより、出来ません。地中に生息する微生物の類は、踏んでも死なないようにしておりますし、視認できる程の大きさの生命体は、殺害するとその場でご自身の体感時間がループします。誰かを殺した途端に、殺す一分前にタイムスリップ、のように」

まあ、生命体の殺害なんて自由に行えたら、とっくに世界各地の山は入山禁止になるはずだもんな。

「……まあ、例外はあります。悪事を働いた動物達に対しては、『天罰』という形で危害を加えられますが、危害の程度は悪事の大きさによつて様々です。山内で殺人を犯したならば、その人物もそれなりに罰することができませんが、ゴミをポイ捨てした程度なら、せいぜい服を汚させる位しか許されませんね。あ、別に無理矢理加えなくても良いんですけど」

「他にご質問は？」

そつだなあ。特に無いが……。

「……なあ、岳野。お前は何故、舞手神を辞めよう？」

岳野にそう訊くと、彼女はうーん、と唸った。

「まあ、たとえるなら……歳、かのお。ほら、最近この山の知名度も鰻上りに上がっておるじゃろう？ さすがについていけないっとしてもうてなあ……。まあ、その点お主なら現代っ子じゃから、ちやんと時代の流れについていき、この山を守護できると思……」

岳野は話している途中で、突然何かに気付いたような表情になった。榊原が岳野に訊いた。

「もしや……もう、成仏してしまわれるのですか？」

「……そのようじゃ」

岳野がそう答えると、不意に岳野の体が浮き上がり、上昇し始めた。

榊原は顔を曇らせた。

「寂しいです、岳野様……。もう、会えなくなるなんて……」

榊原がそう言うと、岳野が「阿呆」と言っただけ彼女の頭を叩いた。

「お主も知っているであろう？ 妾の人格は消滅するじやろうが、妾の魂は、新たな人格を持ち、別の次元、別の世界、別の宇宙、別の時代へと転生するのじゃ。また何か縁があれば……あつたならば、邂逅できる」

岳野はそう言って、笑った。榊原も、つられて笑った。一瞬、岳野の表情が曇ったが、本当に一瞬だけだったので、俺しか気付かなかった。

岳野は既に、地面から五メートル程離れた位置に浮いていた。

「……………それじゃあ、……………」また「な」

「……………ええ、『また』」

それを言うと、岳野の上昇速度は上がり、あっという間に見えなくなつた。俺はすぐに顔を戻したが、榊原はその後、いつまでも上空を見つめていた。

岡田直己と池田通子（前書き）

前の話の後半を大幅に改稿。

一応見ておいて下さい。

岡田直己と池田通子

「では、この服装にお着替えなさって下さい」

そう言う榊原が持っているのは、よく神主さんが神事の際に着用している服と帽子。純白無地の服に、漆黒の帽子が映えていた。

「これは、何て言う服なんだ？」

「こちらが肌襦袢はだじゆばんと言いまして、下着でございます。そしてこの白
いのが、その上に着る小袖。こちらは、上に着る狩衣かりぎぬ、そしてこち
らが、下に穿く差袴さしはかま、こちらの黒い帽子が、頭に着ける烏帽子えぼしでこ
ざいます。これらを浄衣じよつゐと言いまして、専ら神事に用いられる服装
でございます。岡田様は神様なので、この浄衣を常時着用なさるの
が宜しいかと」

俺は岳野の服装を思い浮かべる。黄土色の着物だったはずだ。

「……ちよつと待って。岳野さんは普通の着物だったけれど？」

「それはですね、岳野様は浄衣を非常に嫌っておりまして……。そ
れでも最初の数年間は着用して貰いましたが、その後は強制しなく
なりました」

俺はふうんと言って、浄衣とやらを受け取った。

……着方が分からない。

「どつやって着るんだよ、これ？」

「私めがご説明致します。まずですね……」

その後俺は浄衣の着方を説明して貰い、実際に着用した。着替える時に榊原が、「お手伝いさせて頂きます」とか言って、俺の脱着衣を行おうとしたのは困ったが。

「そう言えば、九月上旬だったのに、この格好でも余り寒くないな」

「そうなんですか。まあ、神様ですから、周囲の寒暖には左右されないでしょう」

今俺は不可視状態で浄衣を着、榊原の隣を浮きながらついていつている。歩かなくて良いから、かなり楽だ。頭の中で念じただけで移動できる。

榊原は山を貫通する国道五百八号線の歩道を歩いていた。山の中だというのに、かなり交通量が多い。ちなみに今彼女は、巫女服を脱いでいる。さすがにあの服で山内を移動するには抵抗があるらしい。今時の若者、と言った感じの服を着ていた。どういう種類の服かは分からない。縛っていた髪の毛も、今は普通に垂らしている。

「なあ、奔努池にはまだつかないのか」

「待って下さい。この国道をまっすぐ行った所に樹林への道があり、

そこを進んでいくと池があります」

社務所で浄衣に着替えてから、俺達はこの山に居る神々に、取り敢えず挨拶に行こうという事になった。そして、今に至る。この山には、二柱の地勢神と、五柱の地形神が居るらしい。

地勢神は、北舞川と南舞川、そして地形神は、奔努池と腕布沼と舞手温泉と舞手山火口と形武鍾乳洞に居るとのこと。俺達は取り敢えず、一番近い奔努池へ行く事にした。

榊原の言う通りのルートを進むと、奔努池についた。ただ、十分も掛かったのは予想外だったが。

奔努池は観光案内にある通り、景色がとても美しい所だった。何と言うか、幻想的だ。池はとても広く、水もかなり澄んでいて、数メートル下の底が見える程。ホンドウオという、絶滅危惧種に指定された魚も泳いでいた。

「へえー……。写真では見たけど、実際に来ると……綺麗だなあ。何一つか、神秘的っていうか。こういうのも、神様のお陰？」

「いえ、神様が守護地を浄化する事は不可能ですが……ちゃんと守れている事で、自然と美しくなるのでしょ」

榊原がにつこりと微笑んだ。それを直視し、思わず心臓が高鳴る。何とか鼓動を落ち着かせ、榊原に訊く。

「それで、ここの地形神は？」

すると、榊原は意味ありげにふふふ、と笑った。

「既に、見えておられると思いますか？ 誰だと思えます？」

えっ、と俺は呟いて、池全体を見回した。レジャーシートを引いてその上に座り、お弁当を食べる家族。鬼ごっこをする少女達。季節外れの水鉄砲をしたりする少年達。一人で黙々とリフティングをするサツカー少女。草むらに座り、ゆったりと池を眺める年寄りの夫婦。デート中らしい二人組。そして釣り道具を担いだ、柄の悪そうな男二人組……えっ？ 釣り？

俺はすぐ横に立てられている看板を見る。「釣りは絶対禁止 絶滅危惧種の魚達を獲らないで下さい」とはつきり書いてあった。

池の周囲に居る人々がその二人組に気付き、ヒソヒソと噂し始めた。もちろん、嫌な噂である。二人組は意にも介さずに適当な一角に椅子を置き、それに座って釣りの準備をする。

その時、榊原がずかずかと二人組に近寄り、隣に立つと、宣告した。

「貴方達。ここは神聖なる奔努池です。そしてここには、絶滅危惧種の魚が沢山居ます。釣りは禁止です。看板にも記載しておきました。が」

二人組の片割れが、露骨に嫌そうな顔をして榊原の方を振り返った。もう一人は黙って釣竿を出している。

「うつせえよ。部外者が口出しすんじゃない。どこで何しようが、俺の勝手だろ」

「部外者ではありません。私は、舞手神社の巫女。この山と共に、山の各所を守る義務があります」

男は舌打ちした。

「巫女だかなんだか知らねえけどよ……邪魔すんじゃないよ！」

男はそう怒鳴ると、榊原を突き飛ばした。

「きゃっ！」

榊原は地面に尻餅をついた。男は唾を吐いてから椅子に座りなおし、自分も釣竿を出した。もう一人は既に釣り糸を垂らしていた。……うん、これは天罰下して良いレベルだよな？

「……ちよつとお前ら、今から天」

罰下してやる、と言いかけた時、黙っていた男がおっ、と大きい声を出した。見ると、釣り糸がぐいぐいと池の方に引っ張られている。

やばい。早く止めさせないと。

だが、俺が行動するまでもなかった。

「うわあああああつ?!」

その男は、急に釣竿ごと池の中へ引っ張り込まれた。そのまま水中へドボンと飛び込む。

「ちよつ?! 角原?!」

角原と呼ばれた男は、体勢を整えて水面に一旦顔を出した。だが、途端にまた水中へと沈む。

「どど、どうした、角原?!」

角原は、水面から顔を激しく浮き沈みさせながらもがいていた。しかも、両手で喉を掻きまわっている。

一体何が? と思つてよく見ると、何と釣り糸が角原の喉に巻きついて、角原を池から出させまいとしていた。

「誰がボボボボボ! 助いでボボボボボボボボボボボ!」

角原はその後数回浮き沈みを繰り返すと、急にギャツと叫んだ。今度は、釣り針が角原の顎に突き刺さつていて、流血していた。

俺達が呆気にとられて見ていると、角原の激しい浮き沈みは終わった。角原は手で水を掻きながら岸へと移動し、命からがらといった様相で陸へ上がった。釣竿は池に沈んだままだったが、角原には取りに行く気すら起こらないらしい。

その時、黙つていた榎原が、残った男に宣言した。

「崇られましたね。舞手神様に」

残った男は、顔面蒼白になった。次の瞬間。

水中から釣り糸が高速で伸び、一瞬で男の首に巻き付いた。

「んがっ?!」

雑草を掴み爪を地面に立てながら、必死の形相で池の中へ引きずり込まれていく男の様子は、その辺のホラー映画よりも恐ろしかつ

た。そして男は、角原と同じ目+「釣り針が食い込みまくって顔中傷だらけ」に遭い、岸から陸に上がった。

二人組は、顔面蒼白のままその場に呆然と座り込んでいた。榊原が二人組の方へ歩いていって、目の前に立った。

「助かりましたね。でも、舞手神様って短気ですから……今度同じような事をやると、釣り糸は二度と外れないかもしれませんね？」

とてつもなくにこやかな、それでいて心底から相手を侮蔑するような笑顔で二人組に宣告した。二人組は目を見開き、下顎を激しく痙攣させながら大慌てで逃げていった。

榊原は、はあと溜め息を吐いた。

「まったく、本当に失礼な二人組でしたね。神様による『祟り』の制度が無ければ、今頃この池も荒れ放題だったでしょう」

俺は池の周囲を見回した。皆、複雑な表情で池を見つめたり、ヒソヒソと話をしていたりする。しかし、一人だけ。

リフティングを続けるサッカー少女だけが、至って平然としていた。

うん、あの子が怪しいな。だって、あれ程の怪奇現象を目の当たりにしたら、普通は驚いてリフティングなんか止めるはずだろ？ それなのに、まだリフティングを冷静に続けている。

「……なあ、榊原。この池の神様って、あそこでリフティングしている女の子？」

俺はそのサッカー少女を指差して、榊原に言う。榊原は俺の方を振り向くと、また微笑んだ。

「その通りです。早速挨拶に向かいましたよか」

俺達は、女の子へと近づいていった。女の子はまだリフティングを続けている。後数メートル位の距離になっても、リフティングを止めない。どうやら俺達に気付いていないらしい。

すると、榊原が俺より前に進み出て、女の子に声をかけた。

「池田様。榊原です。少々お話が」

女の子はサッカーボールを右足に載せると、榊原の方を振り向いた。

女の子は黒髪をポニーテールにしている、顔立ちは整っている。いわゆる、「カワイイ系」という奴だ。身長は俺よりも少し低い。スタイルは良い。バストは普通より大きいが、まだ一般の域を出ていない。私市よりは大きいだろうが。

服装は、どこの学校でも着そうな体操服の上に、下は短パン。うん、ブルマじゃないのが残念。頭にはオレンジのハチマキを締めている。そういう趣味の人が見たら、すぐに写真を撮りそうだ。それほどその服装が似合っていた。

情景描写をしていると、女の子が口を開いた。

「あれ？ タマちゃん、どうしたの？ ……それに、後ろに居る男の人は？ ボクの事が見えてるみたいだけど」

「お話とは、そのことなんです。実は先程、岳野様が舞手神を辞任し、成仏なさいました」

ええーっ、と女の子が叫んだ。サッカーボールが足から落ち、テ

ン、テンと草むらを転がる。

「嘘っ?! お別れの挨拶してないよー……。ん? じゃあ、新しい舞手神は? ……もしかして、その男の人?」

「そうでございます。岡田様、ご挨拶を」

俺は榊原と同じ位置まで進み出て、頭を下げた。

「この度舞手神に就任しました、岡田直己と言います。宜しくお願いいたします」

頭を上げると、女の子も慌てて頭を下げた。

「ボクはこの奔努池を守護している地形神の、池田通子みちこと言います! 宜しくお願いします、岡田様」

なかなか律儀な子だ。池田は顔を上げると、嬉しそうに笑った。

「あ、池の神様ですから『水』を自由に操れますよ。また、水中の物も操る事が出来ます。さっきでお分かりだとは思うんですけど」

まあ、さすがは水場の神様と言った所か。

「それにしても、男の人ですか……。…そうだ、岡田様! サッカーって出来ます?」

期待の目で見上げてくる。だが残念ながら、俺は運動が苦手で、サッカーなんてもっての他だ。身体能力は上がってるんだろっけど、

サッカーの技術まで上がっているとは思えない。ちよつと罪悪感に駆られたが、正直に答える事にした。

「いや、悪いけど、サッカーは出来ない。というか運動全般が無理」

そう言つと、やはり池田は残念そうな顔をした。うん、良心の呵責がやバイヨ、コレ。可愛イカラ余計ニ。

「そんなんですか……。残念……」

「まあまあ、池田様。今度、私がお相手しますよ。えーと、マルセイユルーレットでしたっけ？ ネットでやり方を調べてきましたから」

榊原が池田を励ます。途端に、池田は笑顔になった。傍から見ると、実の姉妹みたいだな。いや、それ以前に傍から見ると榊原の独り言に見えるのか。

「そう言えば、池田。さっきの祟り、やり過ぎたんじゃないのか？」

俺はタイミングを見計らい、池田に話しかけた。だって、さっきの祟りは、見ているだけで戦慄したのだ。

池田は俺の方を振り向くと、不満そうな表情で言った。

「だって、あの人達、規定に基づいて判断すると、死んでも文句が言えないような事をしでかしたんですよ？ まず、生命体の殺害未遂。しかも絶滅危惧種。理由も、ただの私利私欲。そして、警告の二度無視（看板、榊原）。更には、神職関係者への障害……情状酌量の余地も無いですし。まあ、さすがに殺たりなんかしませんけどね」

「……まあ、別に良いけどさ」

そこまであの二人組の事を悪く言われると、あいつらに同情が出来ない。確かに、池田の言うとおり、死んでも文句が言えないもんな。

……なんか、神様になってから、思考がバイオレンスになっている？

俺は激しく首を振って、その考えを打ち消した。

「じゃあタマちゃん！ 早速、マルセイユルーレットを……」

「すみませんが、今は岡田様と各地勢神・地形神様への挨拶回りをしておりますので……終わってからで宜しいですか？」

池田は頷くと、また一人でリフティングし始めた。かなり安定したりフティングで、ボールが跳ねる起動もあまりズレない。これだと、体力が尽きない限りいつまでもリフティングを続けられるだろう。

榊原が「では、次は腕布沼に行きましょう」と言っ、池を後にした。俺も榊原の後を追った。

岡田直己と池田通子（後書き）

角原「池コワイ池コワイ池コワイコワイコワイコワイ」
警察「あー、通報された例の不審者見つけましたー」

岡田直己と溜由加

池から離れて国道五百八号線を更に進むと、そこには奔努池へと続く道と同じような、しかしそれよりも小さな道がある。一応、道の手前には「こちら腕布沼」という道標があった。その道を数十分歩くと、腕布沼に到着するのだ。

ただし、その道は奔努池と比べて人気が無かった。整備されおらず、ゴミも散らかり放題、鉄柵も錆びかけている。まあ、当然かもしれない。腕布沼は年に数人、人間を飲み込んでいるという底なし沼なのだ。自殺の名所だという噂もある。そんな陰険な場所に、どの観光客が来るものか。

腕布沼の景観は、奔努池ではなく普通の池と比べても、お世辞にも美しいとは言えるものではなかった。

真っ黒な沼地に、所々に背の高い草が生えている。沼の周りには鉄杭が何本も打たれてあり、その間に黄色と黒の縞々のテープが貼られてあった。「危険」「この沼に近づかないで下さい」という看板まで乱立している。これらのバリケードが無ければ、今頃この沼はゴミの不法投棄場と化していたかもしれない。現に、沼地の付近には、捨てられたであろう家電製品や廃材等の粗大ゴミが数個置いてあった。

俺は榊原に、率直な感想を述べた。

「なんか汚くて、暗くて、陰険な場所だな……」

榊原は悲しそうな表情になった。

「……仕方ありません。ここは、何人もの命を奪ってきた『底なし

沼』。周囲から疎外されない方が、おかしいと言えるでしょう。…
…もつとも、おかしくないからいい、という訳ではないのですが…
…。早く溜たまり様には、腕布沼のイメージアップを図って欲しいもので
す……」

「溜？ 誰？ この沼の神様？」

「ええ、そうです」榊原は答えた。「どこにいらっしやるんですよ
う？ この沼の近くに居るのは間違いないのですが……」

俺はもう一度沼全体を見渡し、「あっ」と呟いた。沼の奥に捨て
られている、朽ちた廃車。その運転席に、誰かが座っていたのだ。

よく見ると、それは女の子だった。どこかの学校の制服を着用し
ている。半袖だから、夏服だろう。黒い髪はとても長くて、窓越し
だと全てを見られない。顔立ちは端正だった。池田と同じ、カワイ
イ系の顔。ただ、その顔はどこか物悲しさを漂わせていた。身長は
池田よりも低い。ハードカバーの本を読んでいた。

「なあ、あの廃車の運転席に座っている子じゃないか？」

「あ、そうです！ 溜様ーっ！ 榊原ですーっ！」

榊原がテープの手前から、そう叫んで両手を振った。榊原の声が
木霊する。女の子はふとこちらに顔を向けると、本を閉じてメー
ーカバーの上に置いた後、運転席から抜け出てきた。そう、車体や
扉を貫通して。

一瞬驚いたが、何の事は無い、物質透過能力を使っただけだろう。
女の子は相変わらず物悲しそうな表情でこちらに飛んでくると、榊
原とテープを挟んで対峙した。さっきは気付かなかったが、制服は
所々が傷付いて破けている。髪は腰の少し上まであった。

「……何か用？ 榊原。……先に言うけど、イメージアップの件は却下。……もう、私じゃどうにもならないから……」

「今回はその件でお話に来たのではありません。実は先程、元舞手神様であられた岳野様が成仏なさいました」

溜は一瞬眉を上げたが、「そう」とだけ言った。それ以後はさつきと同じ物悲しさを漂わせた。

「それで、新しい舞手神様を紹介しておこうと思ひまして。岡田様、ご挨拶を」

榊原は俺の方を向いて、頭を下げた。俺も前に進み出て、溜に向かって頭を下げた。溜が俺を見つめてくる。

「この度舞手神に就任しました、岡田直己と言ひます。宜しくお願ひします」

頭を上げると、溜も同じように頭を下げた。

「腕布沼を守護している地形神の、溜由加ゆかと言ひます。宜しくお願ひします。特殊能力は、泥を操る事です」

そして、ふうつと息を吐いた。

「他に用件はありますか？ ありませんよね。それでは私は」

「お待ち下さい、溜様」

溜の背中に、榊原が声をかけた。

「しつこい事は承知の上でございます。……その、イメージアップの件……考えてはくれませんか？」

イメージアップ。確かに、この沼には必要だろう。このままだと、この沼は自殺の準名所だけでなく、ゴミの不法投棄場と変貌してしまふ。

だが溜は、振り向かずに返事をした。

「……無理。さつきも言った。……私の力じゃ、どうにもならない。沼を守護する事は出来るけど、イメージアップまでは不可能」

言い終わると、溜は廃車へと戻ろうとした。俺はその背中に声をかけた。

「おい、溜」

溜は振り向いた。

「何ですか」

「お前、この沼を守護してるんだろ？」

「……そうですが」

「じゃあ、何故自殺志願者を止めない？ お前にも、特殊能力はあるんだろっ？」

「岡田様」榊原が遮ったが、俺は彼女を無視した。

「何故だ？ 別に、沼に飛び込む前に説得しろという訳じゃない。その能力を使つて、沼から引きずり出して、それからゆっくり」

「分かってません」

震える声で、溜がそう言った。

「貴方は、分かってません。全然分かってません。どれだけ、彼らを止めるのが難しいか。分かってませんよ」

「いや、だけど」

「岡田様」榊原が浄衣の袖を引つ張った。「もうその辺で俺は彼女を無視した。」

「いや、だけど、それでも何とかして助け出すのが、俺達神様の仕事」

「分かってませんっ！！」

溜は振り向くと、鬼のような形相で俺を睨んできた。思わずたじろいだ。

溜はすぐに元の物悲しそうな表情に戻って、言った。

「私だって……最初の頃は、必死に彼らを止めようと思いました。……でも、無駄なんです。助けようとしたら、『助けなくてくれ』って言う……。それでも無理矢理助けたら、私に向かって暴言を吐くわ、怒鳴り散らすわ……。もう、嫌なんです。……何で、助けたのに罵られなきゃならないんですか？ 私だってまだ生きたかった

のに、何で死のうとするんですか？ もう、訳が分かりません……。死にたい人は、勝手に死んで下さいよ……。もう、罵られるのはごめんです」

溜は途中から、泣いていた。と言っても、実体化していないので、涙は出ていない。それでも、辛そうに顔を歪めていた。

そりゃあ、辛いだろ。せつかく助けてやったのに、感謝されるどころか、罵られるんだから。理不尽な仕打ちだよな。

「……確かに、理不尽だとは思っ。……でも、」

でも、それでも。

「無理矢理にでも、助けなきゃいけないと思うんだ……。俺は。生きていれば、必ず『生きていて良かった』と思える機会がある。その時まで、無理矢理にでも生かせるのが、正しいんじゃないか？ ……いや、正しくないかもしれない。でもそれが、俺達の義務なんじゃないか？ たとえその行為が、正しくなくても」

自分の考えを溜に伝える。溜は黙ってうつむいていた。そのせいで、どんな表情をしているかは分からない。俺の考えをまともに受けたのだろうか、それとも奇麗事だと嘲笑しているのだろうか。

場を沈黙が支配する。数分間黙り続けていると、榊原が口を開いた。

「……それでは、岡田様。次に参りましょう」

俺達は腕布沼を離れた。道を歩いている際、ふと後ろを振り返ると、溜が宙を飛んで廃車の中へと戻って行くのが目に入った。

岡田直己と溜由加（後書き）

少々ダークな話になりましたけど……基本的にこの小説は明るい
ですからね？

岡田直己と洲崎姉妹（前書き）

前々回の話のごく一部を改訂しました。
本当にごく一部ですけれど。

岡田直己と洲崎姉妹

「次は、どこに参りましょうか？」

榊原がパンフレットに載っている、舞手山の全体地図を広げて見せながら訊いてきた。

現在俺達は、腕布沼から数十分歩いた所にある舞手大公園に来ている。「大」公園と言うだけあって、普通の公園よりもかなり広い。大規模な遊具が数個設置されていた。俺達は、その公園内にあるベンチに腰掛けていた。

「……ちよつと訊いて良い？」

「何でしょう」

「……周囲の目とか気にしない訳？」

そう、俺は今不可視状態で居るのだから、傍から見れば榊原が独り言を言っているように見えるのだ。実際、ベンチの付近を通りかかった数人が榊原を不審な、そして怪訝な目で見ていた。至極当然の反応かもしれないが。

榊原は、俺の質問に対して首を横に振った。

「いえ、気にしていません。人間の視線など……」

あんたも人間でしょうが。

「私は巫女です。神職に就いています。即ち、神様の視認を許可された人間。一般人ではありません」

「あ、声に出た？」

「いえ、顔に出てらっしやいました……それより、どこに向かいます？」

榊原は再度地図を俺に見せてきた。

俺は地図を見ながら、唸る。残っているのは、形武鍾乳洞、舞手山火口、舞手温泉、北舞川、南舞川の五つ。

ぶつちやけ、どこでも良いのだが……近い順から回っていこう。

「それじゃあ、温泉で」

「かしこまりました」

榊原はそう言うとベンチから立ち上がり、パンフレットを折り畳んでポケットに入れた。

温泉は、公園を出て県道沿いに数十分、歩いた所にあると書かれていた。

俺達は公園を出て、県道沿いを歩く。国道と違って道幅が狭く、心なしか活気も小さくて交通量も少ない。それでも需要はあるようだが。

あ、言い忘れたけど俺は浮いているから。こっちの方が楽だし。疲れないし。

歩いている間、会話が無く、少し気不味くなったので、俺は今疑問に思っている事を口にした。

「そう言えばさ、神社に居る他の神職の人達に挨拶しなくて良かった訳？ 今の所、榊原しか俺の事を知ってないと思うんだけど」

「大丈夫ですよ。人間達への挨拶なんて、一番最後で。それよりも、神様への挨拶回りを優先すべきで……あっ」

「ん？ どうした？」

榊原は黙って、道路の向こう側を指差した。指の先を目で追うと、エイト トウエルブという、有名なコンビニの舞手山店が目に入った。それなりに客が入っていて、繁盛しているようだ。

「コンビニがどうかしたか？」

「店内に、地勢神様が二柱いらっしやいます。先に挨拶を済ませておきましょうか？」

俺は驚いて、コンビニの中を凝視した。しかし、どの人間もいや、神様が二柱居るのか 何と言うか、人間らしくて、神様には見えなかった。

「ああ。挨拶しておこう」

榊原が近くのボタンを押して、道路の信号を青に変えた。そして

横断歩道を渡る。俺も歩道を渡るうとしたのだが、よくよく考えれば空を飛んで移動できるんだ。俺は宙を浮いて道路を飛び越した。

駐車場前で榊原と合流すると、店内に入った。現在店の中には、店員が二名、初老の男が一名、子連れの女が一名、男子学生が一名、スーツを着た若い男が二名、派手なメイクをした若い女が三名、顔が似ている、恐らく姉妹と思われる女二名が一组。

一体、誰が地勢神なんだ？ 店員はありえないだろうが。神様がバイトなんてしないと思うし。

そう思っていると、榊原が店内を進んでいった。そして、先程描写した、姉妹らしき一组に近づいていく。姉妹は雑誌コーナーで「週刊少年スライディング」と「月刊少年ウエンスデー」という漫画雑誌を読んでいた。どちらも人気のある雑誌だ。

榊原は二人の背後に立つと、声を掛けた。

「洲崎銀善様、美瑛様。榊原です」

姉妹の肩が両方、ビクツと跳ねた。そしてゆっくりこちらを振り向く。その後、安堵の息を漏らした。

「何だ、タマちゃんか〜！ びっくりさせないでよ〜」

二人のうちの、身長の高い方……恐らく妹がそう言った。

身長は溜と同じ位。黒髪サイドテールのテール部分を、左に垂らしている。水滴を象ったヘアピンを反対側に着けていた。顔立ちは整っていて、いわゆるカワイイ系。スタイルもそれに準じているのか、こう言っちゃ失礼だが、幼児体型だ。ありふれた私服を着ている。

「こら、美瑛！ 年上には敬語を使いなさいって言っただろっ？」

身長の高い方……恐らく姉。妹が美瑛と言うならこっちは銀善か。とにかく、銀善が少し怒った顔をして美瑛にそう言った。

身長は岳野よりも少し低い、俺よりは十二分に高い。黒髪サイドテールのテール部分を右に垂らし、美瑛と同じく水滴を象ったヘアピンを、左側に着けている。ただし、位置は左右逆だ。

顔立ちも端正で、やはり姉妹なのか、顔の各パーツやそれらの配置が美瑛と結構似ていた。しかし、纏っている雰囲気は美瑛のような「カワイイ系」ではなく、どっちかというところ「キレイ系」だった。スタイルも幼児体型などではなく、胸は……あれ？ 私市よりちよつと大きい位？ いやまあ、これ位が標準だろうけど。服装は普通だが、美瑛の物と似せていた。

銀善の言葉に榊原が苦笑した。

「いえ、構いませんよ、敬語は外してもらって」

「ほら、タマちゃんも……」

ギョ、と音が聞こえる位の目つきで銀善が美瑛を睨む。俺も思わず気圧された。

「……榊原さんも、良いって言うてるし」

銀善ははあ、と溜め息を吐き、榊原に向かって言った。

「榊原さん、美瑛を甘やかさないで下さい」

「いえ、甘やかしているのではございません。私はただの人間ですから、神様から敬語で接せられるなど、恐れ多いと言っただけの事です」

本当に腰が低いな、この巫女さんは。

「銀善様も、出来れば敬語を外して貰えるとありがたいのですが……」

……本当に低いな。

「……はあ、分かった。榊原さんがそう言うなら、私も敬語を外させて貰おう」

「ほら、お姉ちゃん！ 私はちゃんとタマちゃんの事分かってたんだよ！」

銀善が呆れた顔で、手刀を軽く美瑛の頭に振り下ろす。美瑛はそれが当たった所を、両手でさも痛そうにさすった。

その時、銀善が榊原の近くで浮いている、俺に気付いた。

「榊原さん。横に居るのは誰だ？」

指を差して、そう言うてくる。

「今回新しく舞手神様に就任なされました、岡田様です」

「ええっ?!」美瑛が叫んだ。「舞手神様って……岳野さんは？」

「岳野さんは先程、成仏なさいました」

「……それは唐突だなあ。別れの言葉位言わせてもらっても良いだろつに」

銀善が残念そうに言った。そして再び、俺を指差した。

「じゃあ、こちらの……何と言ったか……」

「岡田様です」

「そう、岡田さんが新しい舞手神様になったって事か？」

「その通りです。岡田様、ご挨拶を」

俺は榊原より前に進み出て、頭を下げた。

「どうも、今回新しく舞手神様に就任した、岡田直巳と言います。宜しく願います」

頭を上げると、銀善達もそろって頭を下げた。

「洲崎銀善です。北舞川の地勢神をやらせて貰っています。水を操る事ができます」

「洲崎美瑛です。南舞川の地勢神をやらせて貰っています。お姉ちゃんと同じように、水を操る事ができます」

言い終えた瞬間、美瑛が「ムムツ？」と、唐突に声を上げた。

「どうした？」

「ん〜……誰か川で溺れてるみたい。ちょっと失礼して、助けに行つてきま〜す」

美瑛はそう言うと、宙に浮いて雑誌棚とガラスを通り抜け、飛んでいった。南舞川に向かったのだらう。

「そんな、誰か溺れているとか、分かるものなのか？」

気になったので、銀善に訊いてみた。

「はい。自分の管轄内で誰かが危険な目に遭うと、アラームが頭の中で鳴る仕組みで……ん？」

喋っている途中、銀善も急に会話を切ると、眉を寄せた。

「……すみません。こっちの方でも、誰かが溺れているようです。失礼して、助けに行つてきます」

銀善は美瑛と同じように、雑誌棚とガラスを通り抜け、美瑛とは反対方向に飛んでいった。彼女は彼女で、北舞川に向かったに違いない。

銀善を見送った後、榊原が言った。

「これでもう、このコンビニに用はありません。温泉へ行きましょう。それとも、何か購入していかれますか？」

「あ、いや……温泉に行こう」

榊原は「分かりました」と言うと、コンビニを後にした。俺も後を追った。

岡田直己と温泉川美和子（前書き）

榊原の巫女時の髪型を、本職巫女のそれと同じにしました。

後、「何か髪型がマンネリ化してんなあ」という事で、岡田と岳野と溜以外の全員の神様の髪型を変えました。

訂正ばっかですいません。

岡田直己と温泉川美和子

コンビニから出て、県道沿いを歩き始める。やっぱりというか、話題がない。文字通り黙々と歩き続ける。

今にして思えば、いつも一緒に居たあの三人組……私市に庵原に業天は、業天以外は二人共、勝手に自分から喋ってくれたから、ただ聞いているだけで良かった。でも、榊原は二人に反して、自分からは喋らない。会話が自然と無くなってしまふ。

このままだとどんどん気不味くなるだけなので、俺は話題作りにさつきちよつと気になった事を訊いてみる事にした。

「なあ、榊原」

「何でしょうか、岡田様」

「……お前が俺に対して敬語なのはまだ分かるんだけど、何で俺以外の神様は皆、俺に対して敬語なの？ どっちかと言うと、新任の俺が皆に対して敬語を使うべきだと思っただが……いや、今まで散々タメ口使っておいてなんだけど」

「では、岡田様。例えば……他の所から転勤してきた、新任の社長と、ベテランの平社員。どちらがどちらに対して、敬語を使用するべきでしょう？」

「そりゃあ普通は、平が社長に、だろう。幾ら経験の差があっても、職階の差には勝てまい」

「それと同じ事です。さすがに、社長と平社員の関係にまでは行きませんが、少なくとも上司と部下の関係はあります。地勢神様が上

司、地形神様が部下。部下が上司に敬語を使用するのは、当然の事と言えるでしょう。ちなみに、偉さを不等式で表すと……『地勢神様>>地形神様>>>越えられない壁>>>神社本庁職員>神職関係者>一般人』と言った所でしょうか」

そんな理由があつたのか。ん？ 待てよ。

「……じゃあさっきの、洲崎姉妹は？ あいつら確か地勢神たる？
なのに、俺に対して敬語を使っていたと思うんだけど」

「それはですね、北舞川と南舞川の源流が、ここ舞手山にあるからなんです。言わば、舞手山は両河川の生みの親。ですから、岡田様の方が少しばかり格上なんです」

へえ、そうだったのか。何気に、細かい理由があるもんだな。

その後も他愛ない会話を続けながら数十分歩くと、やっと目的の舞手温泉の建物が見えてきた。だが、見られたのは施設が大きい為であり、実際の距離的にはまだ百メートル以上あった。

更に数分掛けて、やっと駐車場に入る事が出来た。車が所狭しと停まっただけ、ほぼ満車状態だった。場内を横切っている間にも、数台車が入ってきた。

自動ドアをくぐり、中に入る。どこにでもあるような感じの内装だが、いかんせん施設が広すぎる。ゲームセンターや食堂も、一般的な温泉施設の倍くらい規模があった。

俺は榊原についていき、休憩場に入った。畳が数十枚敷き詰められている、巨大な部屋だった。数台設置されているテーブルの周りで、風呂上がりの人々が思い思いに寛いでいる。

榊原は畳の上になると、迷わず一つのテーブルに向かって進んでいった。そのテーブルの隣には、一人が寝られるサイズの布団が一式敷いてあり、その真ん中が細長く膨らんでいた。

大胆な事をするなあ、と思っていると、榊原が布団に近づき、端を少し持ち上げて隙間を作り、中に向かって呼びかけた。

「温泉川様。^{ゆのかわ} すみませんが、起きて下さい。榊原です」

すると、布団の中の細長い膨らみもぞもぞと動き、数秒後に布団がばさつとまくられ、中から人が出てきた。

女の子だった。黒い髪の毛を、いわゆる姫カットにしている。顔立ちは整っていて、可愛かった。胸もそれなりに大きい。溜と良い勝負と言った所か。半目で、眠たそうな表情だった。どこにでもありそうな、水玉のパジャマを着ている。

温泉川はふああああ、と数秒間あくびをした後、眠たそうに口を開いた。

「タマさあくん？ 何か用あ〜？」

そして、またあくびをした。

「実はですね、先程、舞手神様であられた岳野様が、成仏なさいました」

「ええ〜っ?!」

温泉川はガバツと上半身を起こした。目を少し見開いている。

「本当お〜?! 何で別れも告げずに行っちゃうのお〜?!」

「まあ、落ち着いて下さい。今回の用件は、これだけではありません。岳野様の代わりに就任した、新しい舞手神様をご紹介致そうと思ひまして。岡田様、ご挨拶をお願いします」

温泉川は頭を少し動かし、こちらを見つめてきた。俺は深呼吸を心の中で一つすると、頭を下げた。

「今回新しく舞手神に就任した、岡田直己と言います。宜しくお願ひします」

頭を上げると、温泉川も座った状態で頭を下げた。

「舞手温泉を管轄している、温泉川美和子と言います。こちらこそ、宜しくお願ひします。あ、特殊能力は、お湯を操る事ですねえ。ぬるま湯から熱湯まで、色んなお湯を出せますよお」

そしてまた、あくびをした。幸いにも俺にあくびは移らなかつたが、榊原がつられてあくびをした。

「あああ……あ、ひゅいません」

「いや、別に」

榊原は首をパキポキと鳴らすと、言った。

「どうします？ ついでだから、入っていきますか？ 温泉に」

「今日はお湯の出も良いみたいですからねえ。天気も良いですし、絶好の温泉日和じゃないですかあ」

俺は首を振った。

「いや、でも金が……」

「お金なら大丈夫で……ふあああ。大丈夫ですよお？ ねえ、タマさん？」

「はい、その通りです。お父様からも、神様達の接待には金を湯水のように使えと習っていますので」

それ、かなり危ない教育じゃないか？

「……それで、どうされますか、岡田様？ ご入浴されますか？」

「……非常に魅力的な提案なんだけど、先に挨拶回りの方を済ませよう。それをおろそかにしたら悪いだろうし」

「分かりました。……では温泉川様、また」

「はあ〜い」

温泉川はそう返事してあくびをすると、また布団の中に戻っていた。今度は布団を首の所まで掛けている。かなり安らかな寝顔だ。全国のロリコン共にこの顔を見せたら、黄色い声を上げて喜ぶだろ

う。あ、俺はロリコンじゃないからね？

「岡田様？ 行かないのですか？」

休憩上の入り口に立った榊原が、俺を呼んだ。慌てて宙を飛び、榊原の元に急行する。

歩き始めた榊原の隣に浮いて、ついていき始めた。

宴会場を出て、廊下を歩いている時だった。不意に、横から誰かが飛び出してきた、榊原の脚に衝突した。

「きゃっ！」

「わっ！」

榊原は悲鳴を上げて、尻餅をつく。

「う、ごめんなさい……」

飛び出してきたのは、小学一、二年生位の女の子だった。黒髪をツインテールにしている。身長やスタイルも、年齢相応の物だった。顔立ちは端正で、ロリコンではない俺から見ても、普通に「可愛い」と言える。

「いえ、大丈夫ですよ、このくらい……」

榊原はそう言って立ち上がり、女の子に笑いかけた。しかし女の子は、榊原のほうではなく……何故か俺のほうを見つめている。俺は今不可視状態だから、俺の後ろにある、何か別の物を見ているという事になるはずなんだが。

そんなことを考えていると、唐突に女の子が俺の方に顔を向けま
ま、言った。

「お兄ちゃん。どうやって浮いてるの？」

俺と榊原は、お互いに目を見合わせた。そして、榊原が即座に言う。
う。

「岡田様。ちゃんと不可視状態になっておられるのでは？」

「ああ、そのはずだけど……」

榊原はなるほど、と頷くと、女の子に話しかけた。

「失礼ですが、こちらの男の人が見えるのですか？」

「？ 見えるも何も、そこに居るじゃない？」

女の子はそう言って、俺を指差した。おい、人に指差しちゃ失礼

だろう。

「岡田様。動いてみて下さい」

榊原がそう言った。俺は言われた通りに、天井に向かって上昇してみる。すると、女の子の指もそれに合わせて動いた。どうやら、本当に見えているらしい。

俺は下降して、元の位置に戻ると、小声で榊原と話し合った。

「一体、何で俺が見えるんだろう?」

「恐らく、靈感が非常に強いのでしょうねえ。何せ、小学生の頃から一神様が視認出来る程ですから。私だって、中学二年でやっと見えるようになりましたし……」

「ねえねえ、何のお話してるのー?」

榊原は女の子の方を向き、にっこりと微笑むと、言った。

「お名前は何ですか?」

「私ね、素美代^{すみよ}って言うのー!」

「そうですか。素美代さん、実はこの方は、ここ、舞手山を守っている、神様なのですよ」

「この人、神様なの?」

だから、指差しちゃ駄目だろうって。

「その通りです。素美代さんが舞手山に入り、安全に過ごせるのも岡田様のお陰です。ですから素美代さん、舞手山に来た時は、心の中だけで良いですから、岡田様に祈って下さいね」

「イノるって、どうやるの?」

「そうですねえ、と榊原が首を傾げる。

「まあ、『岡田様、いつも山を守ってくれてありがとう』位が妥当でしょう」

「ダトウ?」

「適當、と言う意味です」

「テキトウ?」

「……丁度良い、という意味です。とにかく、心の中でそう言っして下さい。それが『祈る』という行為です」

分かった、と素美代ちゃんが頷いた。そして俺の方を向き、満面の笑みで言う。

「いつも私を守ってくれて、ありがとう! 岡田さま!」

……………。

はっ! い、いや別に、トキメいたりしてないからね? その顔と仕草が可愛い過ぎて、一瞬我を忘れてたりしてないからねえ?!

「岡田様……」

や、止めるお！ 榊原あ！ そんな顔を引きつらせて俺を見るんじゃないあああいつ！

「いえ、大丈夫です。これでも私、趣味はネットサーフィンです……そういう性癖に理解はあるつもりです。……いやでもまさか、岡田様が口」

「止めるおおお！ それ以上言うなああああああ！」

「では言い方を変えさせて頂きまして、幼女趣」

「そういう意味じゃなあああああい！」

「ペドファイ」

「違っつっつてんだろおがああああああつ……！！！」

結局その後、榊原の誤解を解くまで、数十分掛かってしまった。

……いや、解けたと思ってるのは俺だけで、本人はまだ俺の事をそう疑っているのかもしれないが。

……ああ……不幸だ。

岡田直己と温泉川美和子（後書き）

池田（……何か、悪寒が走った）

溜（……うっすら寒気が……）

美瑛（……何か寒いなあ……）

温泉川（……何だか、嫌な予ふああ……んがする……）

素美代（……背中が、ゾクッってなった……）

岡田直己と灰野淳子

「いやでもまさか、岡田様にそういう趣味があったとは……」

「だからロリコンじゃないっての！ そろそろしつこいよマジで！」

「別に私は、『そういう趣味』としか申ししておりませんが……」

「くっ……」

言い返され、言葉に詰まる。榊原がニヤニヤしながらこちらを見た。何か、態度が結構フレンドリーになってきたような気がするな……。まあ、それはそれで良い傾向なんだろうとは思っけど。

「もう一回宣言するけど！ 俺はロ、リ、コ、ンじゃないっ！」

「では、ペドファイリアですか？」

「同義だろそれ！」

畜生……やっぱり誤解は解けていなかったか。

「それより！ ロープウェイ乗り場ってどこ？ もう見えてる？」

「そうですね、丁度今見えました。あそこです」

そう言って榊原は、道路の遠くを指差した。確かにそこには、周囲の旅館や店と比べて小さな建物があり、そこから山頂の方に向かってロープウェイのワイヤーが伸びている。入り口の上には、「ロ

「プウェイ乗り場舞手山下駅」と書かれた看板が掛けられていた。

「舞手山下駅？」

「山下です、岡田様。早速乗りましょう」

榊原はそう言うと、乗り場に無かってどんどん歩いていった。俺も後をついていく。もちろん、浮いた状態で。

数分掛けて、駅に到着した。俺はこの駅に着たことが無かったが、先入観でつきり、簡素な駅なんだろうと思っていた。しかし実際に入ってみると、駅の中は簡素どころかむしろ近未来的で、レストランにコンビニに巨大電光掲示板まであった。さすがは、某国の大統領まで訪れた山だ。スケールが違う。

エスカレーターを上がり、乗車口に着いた。榊原はチケットを購入し、列に並ぶ。俺は不可視状態の為、チケットを買わなくても大丈夫だった。数分後、ゴンドラが到着して、俺達は中に乗った。

ゴングゴング、と音を立ててゴンドラが進んでいく。同時に、外の景色も降下し始めた。こうして見ると、本当に舞手山って広いんだと思う。榊原も、同じように外の景色を眺めていた。

数分後、ゴンドラが火口の駅に到着した。俺と榊原はゴンドラから降りた。やはり、こっちの駅の中も近未来的だった。駅から出ると、目の前には駐車場が広がっていた。車でも来れるらしい。駐車場を過ぎた所には、赤茶色の地面が見える範囲全てに亘って広がっていた。

俺達は駐車場を出て、火口見学道を歩き始めた。舞手山には、火口が十三個ある。その中でも、第四、九、十三火口が巨大で迫力があると言われている。この見学道も、途中で幾つかに分岐していた。第四火口へ繋がる道、第九火口へ繋がる道、第十三火口へ繋がる道、その他の火口に繋がる道、という風に。

俺は分岐点で、榊原に訊いた。

「なあ、どの火口に行くんだ？」

「どれでも構いませんよ？ 火口が幾つあっても、守護されている地勢神様は一柱だけですので」

意外な事実が発覚した。

「え？ そうなの？ てつきり、一つ一つの火口に、それぞれ神様が憑いているもんだと……」

「いえ、火口が幾つあっても、マグマ溜まり……って分かりますかね？ いわゆる、マグマの源泉なんです。それは一つだけなんです、守護されている地形神様も一柱だけなんです。ほら、火口一つ一つに地形神様が一柱一柱憑いていたら、キリがないでしょ？ 火口の中には、小さなものもあるのですから」

「ふうん」

俺達は、火口の中で一番大きいという、第十三火口に向かった。

見学道は幅広く敷かれているものの、それでも道は結構混雑していた。自分の体を人が通り抜けていくのが気持ち悪いので、俺は人混みの上空を飛行していた。

幸いにも、今日は火口の調子が良いみたいで、火山ガスによる見学規制は行われなかった。その為十分程歩くと、第十三火口のすぐ近くまで来れた。火口の周囲に鉄柵が建てられてあり、色んな観光客がその柵にしがみつきながら、火口を興味深げに覗き込んでいる。俺達は鉄柵の周囲に纏わりつく人混みを避け、遠くのベンチで休憩

していた。

おい、そんなに鉄柵により掛かったら、落ちるぞ。俺みたいに。思わずそう呟いた。もちろん、隣に座っている榊原以外の誰にも聞こえていない。榊原は、それを聞いて悲しそうな顔をした。

「……………すみません……………」

「え？」

「……………成仏することができたのに、私達の都合で、勝手にこの山に縛り付けてしまって……………」

……………ああ、そのことか。

きっと榊原は、俺が強制的にこの山の神様にさせられたことを、申し訳なく思ってるんだろうな。

「いや、別に大丈夫だよ。見てのとおり俺は楽観的だし。神様って職業？ も、結構面白そうだしね。……………だからさ、榊原。そんなに責任を感じなくて良いよ。大体、事故で勝手に死んだ俺にも半分責任はあるようなもんだしさ」

「……………はい」

何となく、気不味い雰囲気になってしまった。俺は少しいたたまれなくなって、火口を見学することにした。もちろん、人混みに飛び込んで行かず、宙に浮いて火口を上から見るという形で。

火口は、よく漫画なんかであるように、巨大な穴がぼつかりと空いていて、その中で大量のマグマがぐつぐつと煮えたぎっている……………という訳ではなかった。すり鉢状になっており、中心の一番深い

部分には半径一メートル程の穴が空いている。あれが火口という奴か。そこからは、白煙がもうもうと吹き出していた。見学規制が敷かれていない所を見ると、ただの水蒸気で、心配はないだろうが。

「んで？ 神様はどこに居る訳？」

榊原にそう訊くと、榊原はキョロキョロと人混みを見回した。

「多分、この観光客の中に紛れていると思うのですが……」

「え？ 二の中に？」

俺は驚いて、人混みを見渡した。当然、見つけられる訳もない。

「何でわざわざ？」

俺がそう訊くと、榊原は困ったようなと言うか、恥ずかしそうなと言うか……形容しがたい複雑な表情を見せ、言った。

「その……灰野はいのという女性なのですが、ここの地勢神様は。灰野様は、非常にその、好色家と言いますか……、火口を見学しに着た観光客の中に、自分好みの男の人を見つけては声を掛け、誑かしておりまして……」

俺のちょっと引いている表情を見た榊原は、慌てて取り繕い始めた。

「あ、もちろん、不純なことはしていませんよ？ その、ロープウェイ乗り場にあるレストランと一緒に食事をするだけですから。そんな、岡田様のご想像されているようなことは、決してありません

から」

「……俺は特に何も想像していなかったんだが……」

「あ、そうだったのですか……」

……何か少し、気不味くなった。慌てて話題を逸らす。

「んで？ 結局どこに居る訳よ？」

「ですから、人混みの中でした。まあ待っていれば、多分男の人と一緒に出てくると……あっ」

榊原が言葉を途中で切り、人混みの一カ所を指差した。見ると、なかなかダンディーな男の人と、色気のある美人なお姉さんが腕を組んで人混みから出てきた。

お姉さんは、身長は俺よりも遙かに高く、スリーサイズも一流だった。胸なんか、自分が今まで会った地勢神の中で一番大きいだろう。目分量だが、榊原よりも大きい。うん、自分でもこんなことを考えるのは、変態だと思うよ。でも、仕方ないじゃん。俺、男だし。だし。性染色体とかXYだし。

髪の毛は茶髪で、肩の少し下の方まで延ばしている。両耳に、火を象ったイヤリングを着けていた。顔立ちもかなり整っていて、いわゆる「キレイ系」の顔だった。傍から見れば、かなりの美人である。腕を組んでいる男も、顔がだらしなく緩んでいた。

……うーん。どうやって声を掛けようか。俺の入る余地が無さそうだぞ。

「……榊原、呼びにいつてもらえる？」

「ええ？ 私ですか？ でも、灰野さんがお楽しみであるところを、邪魔するのはちょっと……」

どうやって灰野を呼ぼうか二人して迷っていると、意外にも、灰野の方から声を掛けてきた。

「あら？ タマちゃん？ どうしたの？」

榊原はビクツ、と体を震わせると、すぐに灰野に駆け寄り、遠慮がちに言った。

「あの、灰野様、重要なお話がありまして……お時間、頂けないでしょうか？」

「え？ 別に良いわよ？ ね、ダーリン、先にお店の方に行って待っていてく、れ、る？」

「ああ、勿論さっ！ じゃあ、なるべく早く来てくれよなっ！」

男性はダンディーな顔を更に格好良くして、見学道を歩いていった。灰野はそれを見送ると、榊原の方に振り返った。

「で？ 一体どうしたの？」

「実はですね、灰野様。先程、岳野様が成仏なさいまして」

灰野が、ええっ、と大声を上げた。

「あら、そうなの？ 岳野様が？ あっら……お別れくらい、言

わせてもらっても良いのにねえ」

「そうですねえ……。あ、灰野さん。もう一つ、お話があるので」

「あれ？ ちょっと待って？ それじゃあ、新しい舞手神様はどこらにいらっしやるの〜？」

「そのことなんです。あちらにいらっしやいますのが、新しく舞手神様に就任なされました、岡田様です」

榊原が、手をこっちに向けて言った。こっちに顔を向けた灰野と目が合い、思わず会釈した。灰野もにっこりと微笑むと、俺に会釈した。

「岡田様ー、ご挨拶をお願いしますー」

榊原がこっちに向かって、大きな声で呼びかけてくる。だから、ちよつとは人の目を気にしろよ。俺の周囲にいた四、五人が怪訝な目でお前を見ているぞ。

このままだと榊原が不審者に間違われてしまいそう（容姿が美しい為それはないだろうが）なので、俺は榊原達の元に飛んでいき、榊原の隣に留まると、灰野に向かって頭を下げた。

「どうも、新しく舞手神に就任しました、岡田直己と言います。宜しくお願いします」

灰野も頭を下げた。

「舞手山火口を守護させて頂いています、灰野淳子と申しますの。」

宜しく願いますわ」

そして灰野は顔を上げると、いきなり俺の顎を手でそっと掴んで言った。

「へえ……。結構、顔はイケているんですね……」

そう言って、顎や首を官能的に撫でてくる。

「岡田様、もしよろしかったら……今晚は空いてらっしゃいますか？」

……ゴクツ。

……はっ！

何で生唾を飲んだんだ俺は？！

まだ早いっ！ 童貞卒業はまだ早すぎるぞ！ せめて成人してか

ら……あ、俺、もう永遠の十六歳か。

……。

「……あの、岡田様。私めなら、そういうのには口を出しませんから……」

俺が黙っているのを見て、榊原がそんなことを言ってきた。

暫くの間本気で迷っていると、灰野が急に笑い始めた。

「アハハハハ、アハハ……」

驚いている俺達に、灰野は言った。

「冗談ですわよ？ 私、男の人と一緒に遊ぶ気はあっても、一線を越える気はありませんの」

何だ、冗談かよ……。

「あら、残念がってらっしゃるようですね？」

「っ！ そ、そんなことないよ？」

「うふふ、そういうことにおきましょ」

灰野が妖艶な笑みを浮かべて、そうやってきた。畜生、からかわれてはつかしじゃないか……。

「……絶対いつかからかい返してやる……」

「？ 岡田様？ 何か仰いましたか？」

「あ、いや、何でも」

どうやら、俺の決意がかすかに外へ漏れていたらしい。決意したのは良いけれど、実行できるのはいつだろうか……。

そんな不安の念を抱いていると、灰野が言った。

「すみませんが、岡田様。殿方を待たせておりますので、もう行っても宜しいでしょうか？」

「あ、はい、良いよ」

「では、ご機嫌よう」

灰野は手を振ると、宙に浮いてロープウェイ乗り場の方へと飛んでいった。おい、ちゃんと不可視状態になったんだろっな？

「……………では、私達も別の場所に参りましようか。と言っても、残っているのは後一箇所。形武洞のみですが」

「……………ああ」

俺達はそう言っつて、他の観光客と同じように見学道へと歩き始めた。

「……………本当、あの、気にしませんからね？」

「やらないってば。灰野も冗談だっつて言っつてたじゃん」

「あ、そうでしたね。岡田様はロリ」

「まだ引つ張んのか」

「……………一応、本気だっただけねえ……………」

灰野は宙を飛んでロープウェイ乗り場へ向かいながら、そんなことを呟いていた。

その瞬間、岡田が大きなくしゃみを一回だけしたのは、ここだけの話である。

岡田直己と灰野淳子（後書き）

風邪で寝込んでました。

一日だけでしたけれど。

岡田直己と空閑康子

形武洞への入り口は三つある。形武洞案内所（形武鍾乳洞正面入り口）、形武洞第二案内所（形武鍾乳洞第二入り口）、形武洞第三案内所だ。俺達は初めて来ると言うことで、一応正面入り口から入ることにした。

俺達はロープウェイ山下駅を出ると、車道に出てタクシーを捕まえた。ここから歩きだと、形武洞に着くまでは優に一時間も掛かってしまう。俺は浮いているため全く疲れないからいいのだが、いい加減榊原が疲弊してしまうのが目に見える（それでも何とか言っただが無理矢理歩きそうだが）。それでタクシーに乗ることを提案したのだ。

榊原は車内に乗り込むと、運転手に告げた。

「形武洞までお願いします」

「……」

「……運転手さん？」

「……はい」

運転手がそう返事して、発車した。形武洞という言葉聞いた瞬間、運転手の顔が少し強ばったように感じられた。

車窓の外を、景色が高速で流れていった。一応地元にある山とは言え、あまりこの山に興味がなかった俺にとっては、斬新な景色で見飽きなかったが、さすがに榊原は何十回と見ているようで、あくびを連発していた。

「あ、そうだ」運転手が唐突に呟いた。「お客さん、どこかで見たような顔だなんて思ったら。舞手神社の、巫女さんじゃありませんでしたっけ？ えーと、確か、榊原さん」

「そうですよ。……えーと」榊原は運転手のネームプレートを見て言った。「接待せつたいさん？」

「ええ。珍しいでしょう。娘もね、小学校でよく言われるらしいんですよ、珍しいって」

「そうですか。それで、接待さん。神社に来たことあるんですか？」

「まあ、お客さんを神社に送り届けることは、よくあるんですけどね。正直、私自身が神社に参拝したことはないなあ。ほら、だって、こういうのも何ですけど、私は神様を信じてませんから」

榊原がそれを聞いて、ムツとした表情になった。それを見た接待が、慌てて取り繕った。

「いや、すいません。神社の巫女さんに言うようなことじゃありませんでしたね」

「いや……信仰は自由ですし」

相変わらず不機嫌な表情で榊原がそう言った。少し、車内の雰囲気が悪くなった。

と、接待が急に真剣な顔になって、言った。

「……今日はどうして形武洞なんかへ？ あ、気分を害されないで下さいよ？ ……ただあそこは、危険な所ですから。……実は以前、

私が形武洞まで送ったお客さんが、洞窟の中で崖から滑り落ち、そのまま転落死してしまつて……。それから、妙に神経質になつてしまいましたねえ……」

接待はそれつきり黙つてしまつた。暫くした後、榊原が言った。

「……簡単に言えば、お参りですよ。形武洞を守護なさつておられる神様へのね」

「ああ、そうなんですか」

接待の声には、感情がこもっていなかつた。人一人事故で死なせておいて、何が、守護している、だ、とても思っているのだろうか。ただ、ひたすら悲しい目をしているのは確かだつた。

形武洞観光案内所の前に着いた。榊原は接待に運賃を払うと、タクシーを降りた。俺も後に続いて、タクシーを降りる。そして、案内所へ入っていく榊原についていった。

榊原は受付で入洞券を買うと、形武洞へと続く橋を渡り始めた。切り立った岩肌に大きな穴が開いており、それが形武洞への入り口となつている。そしてその穴に向かって、屋根付きの橋が渡り廊下として伸びていた。

形武洞の中からは川が流れ出しており（形武川と名付けられてい

る）、それが南舞川と合流している。しかし榊原によれば、洞窟内の全地形は全て形武洞管轄地形神の守護対象になるので、川があつても地勢神は居ないらしい。川の水はとても澄んでいた。透明度は、奔土池と良い勝負だ。

俺達は橋を歩いて、鍾乳洞の中へと入っていった。初めは真つ暗で、天井の所々に蛍光灯が設置されているだけだったが、橋を渡りきると目の前がいきなり明るくなった。

「…………おお…………」

そんな声が漏れた。逆に言えば、そんな声しか出なかった。

入り口を入つてすぐの所は、いわゆる大広間のようになっていた。天井からは鍾乳石が吊り下がり、地面からは石筍が生えている。壁は凹凸が激しく、深い陰影を生み出していた。

その光景が、なんとまあ…………照明器具でのライトアップという演出のせいもあるのだろうが、とても幻想的で、美しいのだ。たとえば洞窟なんかに興味のない人でも、この大広間を一目見れば、一気に魅せられてしまうだろう。

俺は文字通り夢見心地で、そのままの状態で榊原に訊いた。

「榊原。…………形武洞つて、こんなに綺麗だったのか？」

榊原は恍惚とした表情を浮かべながら、言った。

「ええ。とても、魅せられますよね。何と言いますかこう、幻想的で、魅惑的で、大胆で勝つ繊細で……………すいません、私の頭ではとても言い表せそうにありません」

なるほど。毎年数人が形武洞の中で行方不明になったり事故に遭ったりしているのに、入場客が減らない訳だ。そりゃ、こんな素晴らしい空間を見せつけられたら……正直な話、事故の話なんて吹っ飛んじまうわな。ただ、洞窟の美しさだけが脳裏に焼き付くのみだ。俺達はしばし、入り口の空間の美しさに目を奪われていたが、駆け寄ってきた係員の「お客様、入洞券を」という言葉で、現実に引き戻された。

榊原が慌てて入洞券を係員に見せ、受付を通り過ぎて中に入った。そして、順路を歩こうとしたところで、俺に話しかけてきた。

「岡田様。どうされます？ 先に、地形神様へご挨拶に伺いますか？ それとも、暫く観光していかれますか？」

「ここの地形神って、どこに居んの？」

えっとですね、と榊原が言い、受付で取ったと思われる、形武洞のパンフレットを広げた。

形武洞の全体地図が見られた。

「私達が今居るのが、正面入り口ですね」

地図の一番下を指で押さえる。

「そして、地形神様がいらっしやるのが……ここから先のエリアです。地図には載っていませんが」

榊原はそう言い、順路の途中を指で押さえた。破天大砲はてんたいほうという場所と、奇跡の大岩という場所の間である。

「地図に載っていないエリア？」

「余りにも道が入り組んでいるため、迷ってしまう可能性が高く、観光が許可されていないエリアです。まあ、それでも、馬鹿な観光客がたまに侵入しますが……。ったく、勝手に侵入したのは向こう側なのに、何で怪我をしたらこっちに突っ掛かってくるんでしょうねえ？ 最近来る観光客のマナーの悪さには、ほとほと呆れますよ。ほら、今朝の、奔土池のあの二人組みとか……。って」

榊原が途中で言葉を切って、目の前に居る観光客を指差す。その客は、煙草の吸い殻を地面に捨て、踏みにじっているところだった。

「ちよつと、その貴方！」

榊原がその観光客に注意をする。幸いにも、今度の客は物分かりがいいようで、素直に榊原のことを聴いてくれた。

「まったく、もう……。言ってるそばから、この有様では……。この山の将来が思いやられますよ……。」

巫女一人に思いやられるほど、この山は脆弱なのか。そう思ったが、口には出さなかった。自分でもナイス判断だと思う。

極太の石柱が乱立する柱雨、皿状の石灰華段が数百段存在する皿地獄、地面から突き出た超巨大石筍である破天大砲等、様々な名所を順路に沿って観光した。

どの名所も綺麗で、思わず感嘆するような内容だったが、順路の左右に乱立された鉄柵や鉄杭、その間のロープ等が、その感嘆を半減させていた。でもこれは仕方のないことなんだと思い直し、順路を進む。

そして、破天大砲を越えた後、本来なら順路に沿って右に曲がる所を、ロープをくぐって左に曲がった。ロープには、「危険ここから先に入らないください」と書いてあったが、榊原は全く躊躇わなかった。

ロープをくぐり、順路からはずれて洞窟内を進んでいく。最初は明かりのない、真つ暗な洞窟が続いたが、榊原がペンライトを持ってきていたおかげで進めた。数百メートル榊原の後に続いて進んでいくと、不意にまた、洞窟の天井に明かりが設置されているようになった。榊原によれば、この明かりがある洞窟を進んでいけば、地形神の居る所に出られるらしい。

順路と違って地面は整備されておらず、石筍や石柱、鍾乳石等が道を塞いでいる所が多々あった。榊原はかなり歩きづらそうだった。何度も言うけれど、俺は浮いて移動して、物質透過能力も使っているから、普通に進むことができる。

「……榊原、疲れないか？　もしよかったら、俺が風の刃でも出して、石筍とか石柱とかを壊してやってもいいけれど……」

能力の練習も兼ねたいし。

「……いえ……結構です。私めのような……一介の巫女が、形武洞を……傷つけるなど……っ」

いや、傷つけるのは俺なんだが。

っていうか、榊原、本当に大丈夫か？ 凄いゼエゼエ言ってるぞ。まあ、あんな巨大な石筍を乗り越えたり、あんな細い穴をくぐり抜けたりしたら、体力はかなり使うと思うが……。

あ、しつこいようだけど、俺は物質透過したからね。

そうやって、（榊原が）苦戦しながら道なき道を進んでいると、不意に、大きくて広い空間に出た。文字どおりの大広間である。天井からは大量に鍾乳石が突きだしているが、石筍はあまり突きだしていない。平らな地面で、比較的歩きやすかった。ただ、あちこちに、石筍の代わりに大岩が設置されていた。

「はあ、はあ……着きました」

榊原がそう言った。どうやらここに、地形神が居るらしい。俺は今までどおり、地形神の居場所を榊原に訊こうと思ったが、せつかなので能力を行使して探すことにした。

「……」

目を閉じて、集中する。掛け声的なものが必要かな、と思ったが、それでもないようだ。俺はそのまま、体中から風を発生させ、大広間に吹き荒れさせた。

「きゃっ！ お、岡田様?! 何を……っ」

……念のため言っておきますけど、襲ってるわけじゃないですからね？ 突然の突風に面食らってるだけですよ？

この風にはいわゆるセンサーのような役割を持たせており、何か物体にぶつかる反応する。ぶつかった距離や、ぶつかった範囲の大きさ等で、どこに何があるかを把握し、脳内で立体地図を形成する……といった一連の作業をやってみた。といっても、地図の形成は自動だが。

鯨がやる、超音波で地形を把握する方法と、ほぼ同じだ。

暫くして、風を止ませた。目を閉じると、黒い視界の中に、緑色で立体地図が構成されていた。当然だが、この地図は風を吹き荒れさせた時点でのものであり、地形の変化や物体の移動を地図に反映させるのは不可能である。

俺は地図の中で、人間の形をした物体を探した。しかし、どこにも居ない。

よく考えれば、神様は通常、不可視状態で物質透過状態である。そう、物質透過状態。俺の風までもをすり抜けたに違いない。

俺は仕方なく、その立体地図を破棄し、目を開けた。畜生、めんどい……あーもう、どこに居るんだよ、ここの地形神はっ！

不意に、脳内にこの空間の立体地図が最構成された。さっきよりも鮮明で、風では調べきれなかった小さな窪みなども露わになっ

ている。そして、立体地図の一箇所が赤く光った。

一瞬戸惑ったが、そう言えば、舞手神はこの山に関するほとんどのことができるんだった。地形神の位置の把握も、できることの中に入っているんだろう。

「現在位置」と念じると、その立体地図の一部が黄色く光った。「方角」と念じれば、地図が回転し、北が上になった。

それらの情報から、地形神の居る場所を割り出し、そちらを向くと。

「岡田様ー。ご瞑想は終えられましたかー？」

一人の、恐らく地形神である女の子と、榊原が、それぞれ鍾乳石に腰掛けていた。

榊原に近づきながら、呟く。

「榊原、行くなら行ってくてくれよ……」

「あ……配慮が至らず、申し訳ありません。ですが、ご瞑想されてらっしゃったようでしたので、その邪魔をするのもいかなものかと……」

「いや、そこまで卑屈に謝らなくても」

苦笑しながら、榊原達の居る所に到着した。二人と同じように、鍾乳石に腰掛ける。そして、女の子のほうを見た。

顔立ちは、もはや見る前から予想はできていたが、かなり整っている。人形みたいという表現がそのまま当てはまるようだ。神様の選考基準に、顔の良さでも含まれているのだろうか。……いや、それはないな。俺みたいなフツメンが神様になれたくらいだし。

身長は、今までにあった神様の中で、一番低い。スタイルもそれに合わせて、こういつちやなんだが、幼児体型だ。髪の毛はうなじが隠れるほどのセミショートで、頭に大きな紫のリボンを着けている。長袖の冬服を着ていた。死んだのが、冬場だったのだろうか。

腰掛けている鍾乳石に、スケッチブックを立てかけている。服の胸ポケットに、油性マジックが二、三本挿されてあった。女の子自身は手に、某配管工兄弟が活躍する横スクロールアクションゲームシリーズの最新作の、攻略本を持ち、熱心に読んでいる。

……あまりにも熱心で、話しかけるタイミングが分からないな。そう考えると、榊原が俺の心中を察してくれたのか、助け船を出してくれた。

「空閑様^{くが}。榊原です。すみませんが、少し顔を上げていただいても……」

「まだ、熱心に読書中。」

「……オホン。空閑様。榊原です。申し訳ありませんが、少しの間だけ、読書を中断していただきたいのですが……」

「読書継続中。熱心すぎて、声が届いてないのか？……よし。」

「っ?!」

空閑は急に本を放り投げ、あたふたと右耳を掌で擦りだした。

「く、空閑様？ どうされました？」

榊原が空閑にそう声を掛けると、空閑はやっと榊原に気づいた。それどころか、榊原を少し睨んだ後、スケッチブックを広げ、そこに油性マジックで何かを書き始めた。

書いた後、榊原にスケッチブックを見せた。

『今、耳に息吹きかけたの、タマちゃんでしょ』

「えっ?! 違いますよっ?!」

うん、それ俺なんだ。空閑の耳の外から中に掛けて、突風をちよちよいとね。

空閑はスケッチブックを一旦戻し、また何か書くと、榊原に見せた。

『じゃあ他に誰がいるっていつの』

「だ、誰って……」

『さつさと歌って、楽になっちまえよお 田舎の母ちゃん泣いてるぞお』

「私のお母様は神社の禰宜（ねい）を務めておりまして、田舎には居ません！ あ、いや、山の中って田舎……？ ……と、とにかく、滅多に泣きませんから！」

『まあまあ 情状酌量だろ？ 捜査協力もだろ？ まあ、再犯だけど、猶予執行がつく可能性はあると思うんだけどねえ』

「刑事事件なんですか？！ 何をやったんですか私めは！ っていうか、酌量されるような情状があったんですか？！ 捜査協力ってなんですか？！ んでもって、再犯なんですかあああああ？！ せめて初犯にしてくださいいいいいいいっ！！」

『冗談だよ』

「ゼエ、ゼエ……悪趣味です……」

息切れか……。駄目だな、榊原。もっと某万屋メンバーを見習え。

「はあ、と榊原がため息を吐く。空閑が嬉しそうに笑った。人と話すのが好きなのだろうか。」

「と、適当に宙をさまよった空閑の視線と、俺の視線とがぶつかった。俺達はお互い、数秒間硬直したが、空閑がいち早く行動に出た。鍾乳石から立ち上がると、一瞬で榊原の後ろに隠れたのだ。」

「空閑は榊原の後ろに隠れたまま、スケッチブックを開いて中に何かを書き、俺に見せた。」

『誰』

「あ、その……岡田直己と言います。今日から、この舞手の守り神に就任しました」

『岳野様は』

「岳野様はですね」榊原が代弁した。「今日の早朝、成仏なされました」

すると、空閑の表情が驚きに染まり、次に目が潤み始めた。

『岳野様 置いてっちゃったの?』

「いや別に、置いていったというわけでは……。そもそも、後を追う必要はありませんし」

『』

「……」

「……」

暫くの沈黙。

「……空閑様。悲しみにお浸りになられているところ申し訳ありませんが、岡田様へのご挨拶をお願いします」

榊原がそういうと、空閑は榊原の後ろから出て、俺をまっすぐと見つめ、スケッチブックを見せてきた。

『鍾乳洞を守らせてもらっている、空閑康子と言います 宜しくお願ひします』

「ああ、こちらこそ。……っていつか、君何で……」

『さっきは隠れたの、ですか？ すいません 人見知りなもので』

「あーいや、それもなんだけど」

『喋らないの、のほうですか？ 小さい頃から、声が出せなくて』

今も小さいだろ。

『今、【今も小さいだろ】って思いませんでした？』

「！ いいい、いや、思ってないよ？」

『 まあ、別にいいです』

よかった。嫌疑は晴らせたみたいだ。実際思ったけれど。

『すいませんが、岡田様、私は本の続きを読みたいので、席を外しても構いませんか?』

「ああ、いいよ」

俺がそう言うと、空閑はさっきと同じ鍾乳石に腰掛け、さっきとは別の攻略本を読み始めた。今度は、某地球侵略宇宙人によるRPG。もう熱中してしまったようで、目の前で手を振っても気づかない。

「それじゃあ、これで全員に挨拶したな。この後どうすんだ?」

榊原は、そうですねえ、と腕を組んだ。

「一旦、神社に戻りましょうか。神職関係者の間で、神様の就任式がありますから」

「就任式?」

「ええ」榊原は頷いた。「簡単なものなんですけどね」

簡単なもの、ねえ。校長先生は、短い話だと前置きして、長い話をいつまでもダラダラとするもんなんだよ。実際、俺の高校の校長がそうだったし。

そんなことを考えていると、榊原が随分と前に進んでしまった。俺も慌てて、後を追った。

岡田直己と空閑康子（後書き）

岡田「やっと終わったよ……挨拶周り……」

岡田直己の就任式（前書き）

榊原「すごい遅れましたねえ」

仕方ないだろ！ この小説は通字中にちょこちょこ書いてるんだから、大型連休の時は必然的に書けなくなるんだよ！

……遅れてすいません。

でも、更新を凍結する気は毛頭ありませんので。

……受験シーズンに入ったらどうなるか分かりませんが。

岡田直己の就任式

「見えてきましたよ」

榊原が、タクシーのフロントウインドウを見ながら言った。俺も同じように、フロントウインドウを見た。車道はこの先で丁字路になっていて、突き当たりのところに、大きくて赤い、立派な鳥居がそびえていた。その横には「舞手神社」と行書体で書かれた、社号標もある。

だが。

「……何か、様子が変わる？」

そう、榊原の言うとおり、神社の様子が変なのだ。鳥居の前には野次馬のように観光客がたかっており、なぜか誰も、中には入っていないこととしない。近づいていくにつれ、鳥居の両柱に太い注連縄しめなわが張っており、そのせいで観光客が中に入れなくなっていると分かった。

一体、何があったんだろう。

「……まあ、それほど心配することではありません。恐らく、元舞手神の岳野様が居なくなったことで、神社が大騒ぎしているのでしょう。岡田様が新しく舞手神に就任したことは、まだ人間には伝えていませんから。その騒ぎのために、観光客が締め出されてしまったものと思われます」

「……急いだほうがいいんじゃない？」

「……そうですね」

鳥居の前の歩道は、人が溢れているため停車してもドアが開けられない。タクシーは、鳥居から十数メートル離れた場所で停車した。榊原は運賃を払い、タクシーから降りた。俺も後に続いて降りる。そして、急ぎ足で鳥居へと向かった。

榊原は人混みを掻き分けながら、俺は人混みの上を飛びながら進んでいった。俺は先に鳥居をくぐり、注連縄の向こう側で榊原を待った。境内では、巫女や神職が忙しげに走り回っていた。

群衆が不満げな顔で、神社に向かって文句を叫んでいる。

「ちよつとー、さつさと入らせなさいよ！」

「こつちはなあ、兵庫から遠路はるばる来たったんや！ お参りくらしいさせるや！」

……一瞬いらつとした俺を、誰が責められようか。

群衆は不思議なことに、不満を言いつつも注連縄をくぐってまで入っては来なかった。くぐることを躊躇させる何かが、注連縄にはあるのだろうか。

数分後、やっと榊原が人混みから胸を出し（冗談で言っているわけじゃない）、一瞬後に体全体を出し、呼吸を整えてから注連縄を難なくくぐった。群衆から驚きの声が上がった。

「ふう……疲れました」

「あのさ、鳥居に張られてる注連縄ってどういふ効果があるの？」

「注連縄は元来、神社に関わらず、あらゆる神聖な場所を結界するために作られたものです。なので、ああいう風に鳥居の間に張れば、神様と神職関係者以外のあらゆる生物を寄せ付けないようにできる

んですよ」

榊原が、説明を終え、参道を数メートルばかり歩いた時だった。

「玉枝ーっ！」

榊原の下の名前を呼ぶ、男の声が聞こえた。

声のした方向、即ち拝殿がある方向を振り向くと、浄衣の上を青緑、下を群青で染めたような服を着た、四十代くらいの年を取った男が居た。男は参道の端を、手を振りながらこっちに向かつて走ってきている。

男は俺達のところまで走ってくると、中腰になって暫し息を整えてから、言った。

「玉枝、一体どこに行つてたんだ！ 随分と探したんだぞ！ あ、いや、そんなことよりも、岳野様は！ どこに行かれたんだ、あの方は？！ もう、神社はお祭り騒ぎだぞ！ 神社なだけに！」

「落ち着いてください、お父様」

……お父様あ？！

「落ち着いてられるか！ 神社本庁からも岳野様の行方の報告要請が来ているんだ！ グズグズしては」

「落、ち、着、い、て、く、だ、さ、い。実はですね、今朝方、岳野様は成仏なさったんです」

榊原がそう言うと、男、いやそう呼ぶのは失礼か……榊原父がえっ、と叫んだ。

「何だと？　じゃあ、後任の方は？　そう言えばさつき、パトカーが数台、神社の前を通り過ぎたが……」

あ、多分、私市達の通報で来たんだらうな、それ。

「もちろん、後任の方はちゃんとおられます。と言うより、既に私の横におられますが」

それを聞いて、榊原父がこちらを振り向き、目を見張った。今まで気づかなかったのか。

「こ、これはこれは……ええと」

「岡田直己です」

「岡田様。一応確認しますが、舞手神様にご就任なされたのですか？」

「そうらしいですね。あなたは？」

「あ、申し遅れました。私、この舞手神社の宮司を務めております、榊原吉晴と言います。どうやら、先程から娘がお世話になっているようです。もしやとは思いますが、娘に何か粗相はありませんでしたか？」

俺は苦笑した。「無いですよ」

「そうですね。それはよかった」吉晴は頷いた。「では、早速なのですが、岡田様の、えーと、第……百二十代？」

「百二十三代です」榊原が吉晴に耳打ちした。

「第百二十三代舞手神様就任式を行いたいのですが……よろしいですか？」

「いいですけど……この人達はとうするんですか？」

そう言って、鳥居を見る。相変わらず鳥居の下では、観光客達が口やかましく不満を叫んでいた。神社を罵倒するような発言をする奴まで居る。

「なあに、地元の警察に通報して、片づけてもらいますよ。就任式はできるだけ静かな中で行いたいですからね」

おいおい、警察なんかに行動してもらってもいいのか？

「さつさと入れろ、馬鹿野郎ーっ！ お客様は神様だろーがーっ！」

うん、別にいいな。

「さつさと通報して下さいよ」

「分かりました」そう言うと吉晴は、ケータイを取り出して、一、一、零とボタンを押した。そしてケータイを耳に当て、会話を始める。暫くの間会話した後、ケータイを耳から離し、閉じた。

「では、岡田様。舞手神様就任式の準備を行いたいのので、一旦社務所で待機してくださいませんか？」

「別に、構いませんよ」

どうもお手数かけます、と吉晴は言って、参道の端を歩き始めた。俺達も吉晴の後に続いた。

吉晴は歩きながら、小型のトランシーバーのようなものを取り出し、スイッチを入れて喋った。

「あー、あー、聞こえるか！」

途端に、境内を忙しく駆け回っていた、巫女や神職の動きがピタリと止まった。そして皆、一斉に手を耳に当てた。よく見ると、その耳にはインカムが付いていた。

「岳野様は成仏なされた模様！ 繰り返す！ 舞手神様であられた岳野様は、既に成仏なされた模様！ よって今から、その後任となつた岡田直己という方の、舞手神様就任式を行う！ 伊勢、平安、明治、熱田、石上、鹿島、香取の七名は、この山の各地勢・地形神様をお迎えしろ！ くれぐれも粗相のないように！ 出雲、諏訪、多賀、春日、伏見、住吉、熊野、榊原の八名は、巫女舞の準備！ 霧島、鹿児島、宮崎、近江、鵜戸の五名は、神楽の楽器の用意だ！ その他は、各自で就任式の準備！ ……早く動けえ！」

吉晴がそう怒鳴った瞬間、止まっていた巫女や神職が、蜘蛛の子を散らしたように一斉に動き始めた。

………どこの軍隊だよ。

舞手神社の規模はそれなりに大きい。鳥居をくぐると参道があり、拝殿に向かってまっすぐ伸びている。鳥居の近くには手水舎、更に参道を行くと、参道の両脇に石灯笼が一組立っている。そこから少し歩いた先には、右側に比較的大きな社務所があり、更に十数メートル行くと左側に絵馬殿がある。絵馬殿の近くには、神楽殿（神事の際、巫女が神楽を舞う舞台）もあった。

神楽殿を通り過ぎると拝殿に着く。拝殿の手前、参道の両脇に狛犬が一組あり、参道の左側には巨大な神木がある。拝殿は結構大きくて、立派な建物だった。山自体がご神体で、本殿がないために、瑞垣もない。

拝殿の横には、小さな鳥居が建っている。その鳥居をくぐると、摂社が二つ（洲崎姉妹の分）と末社が五つ（池田、溜、温泉川、灰野、空閑の分）建っているエリアに入った。各地勢・地形神を奉っている。彼ら、いや彼女ら？なりに、独自の存在感を放っていた。あ、ちなみに俺自ら神社の隅々まで見た訳じゃなくて、脳内で神社の立体地図を見ただけだからね。

俺は社務所に入ると、大広間のような部屋に通された。

「では、神事の準備が終わったらお呼びしますので、それまでお待ちください」

吉晴はそう言って、部屋から出ていった。さて、一人残されたわけだが……やることがないな。……寝よう。

そう思って、その場に寝ころんだ。幸いにも床は畳で、寝やすかった。

今思えば、今朝は登山だつて言うから、早めに……起きた……から……な……。

「……様。岡田様。起きなさってください」

誰かが俺の体を揺すっている。……誰だよ、人が寝てんのに……。重い瞼を、無理矢理にこじ開けた。

途端に、誰かの顔がドアップで目に入ってきた。

「のわっ！」

思わずそう叫んで、飛びのいた。その人物は、無表情に「驚かせてしまつてすみません」と言っている。

吉晴と同じく、四十代くらいの年を取った女だった。服は赤色で、教科書で見た十二単の単の量を少なくしたようなものを着ている。袴は白色、頭には金色の輪のようなものを被っており、輪の前面には特徴的な飾り（いい表現が見つからない）が付いていた。その上には花を付けており、飾りの両端辺りから白い糸の装飾が垂れ下がっている。スタイルはよく、顔も「美人」と十分に言えた。ただ、その面影が誰かに似ていた。

えーっと、誰だっけな……あ。

「……榊原の、お母さん？」

そう訊くと、女は頷いた。

「舞手神社の禰宜を努めさせていただいております、榊原留智亜るちあと申します。岡田様の仰るとおり、榊原玉枝の母親でございます。娘共々、今後ともよろしくお願い致します」

そう言っ頭を下げ、三つ指をついた。

「あ、ああ、どうも」

俺はどもりながらも、挨拶を返して頭を下げた。留智亜は顔を上げると、言った。

「さて、もつと自己紹介したいのは山々なんです……もう、就任式の準備は完了いたしました。先に、そちらの式に出席していただけませんかね？」

「あ、はい」俺は数回頷いた。「もちろん」

留智亜は俺の返事を聞くと、やっぱり無表情なまま立ち上がり、部屋の入り口に近づいて、扉を開けた。そして俺のほうを向いて、「行きますよ。ついてきて下さい」と言った。俺は慌てて、留智亜の元へ行った。

留智亜に続いて、社務所を出た。そして、神楽殿のほうへ案内された。

社務所に入るまでは何もなかった神楽殿だったが、今は舞台の上に数人の巫女と神職が居て、舞台前には椅子が数十脚並べられている。椅子には、吉晴のような神職や、池田や溜達地勢・地形神達が座っていて、舞台が一番見えやすい中央の席が空いていた。

留智亜は俺を、その中央の席に案内した。

椅子に座ってから数秒後、太鼓や笛の音と共に、舞台上に居た八人の巫女が舞い踊り始めた。榊原もその中に居た。全員、右手にきらびやかな扇を持ち、音楽に合わせて優雅に踊っている。

俺は、こういう歌劇や舞台公演というものにはあまり興味が無いのだが、これには思わず見とれてしまった。いや、それともこの感覚はただの神様補正で、見とれるようになっていただけなのか？ まあ、そんなことはどうでもいい。俺はその神楽を、食い入るように見つめた。

十数分後、音楽が終了した。数秒後に、巫女達も踊るのを止めた。神楽が終わったようだった。吉晴が俺のところに来てきて、話しかけてきた。吉晴は浄衣の上を赤、下を紫に染めたような服を着ていた。

「いかがでしたか？ 舞手神楽は」

「ああ、なかなかよかったよ」

吉晴は嬉しそうに笑い、そうですか、と言った。

「では次に、^{よじこ}寿詞を行いたいと思います。岡田様、お手数ですが拝殿のほうに。ご案内致します」

吉晴はそう言って、留智亜と共に拝殿に向かって歩き始めた。別に、拝殿の場所くらい分かるんだけどなあ。後ろから、数列に並んだ巫女や神職達が、そろそろと着いてきた。

俺は拝殿に着くと、賽銭箱の前に立たされた。俺以外の神様達は、俺の両隣に並び、立て膝をついた。そしてそれから、ほんの数分の間に、ついてきた巫女や神職達が目の前にズラリと整列し、地面に

正座した。

……どうすればいいんだ、これは？

困惑していると、吉晴が一步前に進み出て再び正座し、そのままの状態でもう二回お辞儀をした。そして目を瞑り、寿詞を読み上げ始めた。

「舞手の深山に称辞竟へ奉る守護神の御名を白さく……」

途端に、頭の中に「新舞手神就任式寿詞」という行書体の文字と、一つの長い文章が現れた。最初は意味が分からなかったが、やがて吉晴がその文章を、節を付けて読んでいるということが分かった。

「……御名を称辞竟へ奉らくと白す」

寿詞が終わった。吉晴はその場で二回お辞儀をすると、更に二回拍手をして、もう一回お辞儀をした（二拝二拍手一杯、と言うらしい。頭の中に、そう浮かんだ）。

次は一体、何だろうか。そう、思っていると。

「集侍はれる神主・祝部等諸聞食せと宣る。舞手神の……」

何と、口が勝手に動いて、何事かを言い始めた。顎に力を入れて口の動きを止めようとしても、止まらない。まるで、口だけが何者かに乗っ取られたようだった。

数秒後、頭の中に「新舞手神就任式祝詞」という行書体の文字と、一つの長い文章が浮かんだ。なるほど、俺は今これを読んでいるのか。口が独りでに動き、その文章を節を付けて読んでいく。

「……奉れと宣りたまふ命を、諸聞食せと宣る」

数分後、祝詞は終わった。口と喉と肺がひどく疲れていて、思わず数回深呼吸した。

さて、次は何だろうか。無意識的に身構えて待っていると、吉晴が言った。

「では、これにて新舞手神様就任式を終わらせていただきます」

すると、今度は巫女・神職全員が二拝二拍手一拝をした。ただし、最後の一拝の時のお辞儀は、十秒間くらい続いた。

頭を上げると、皆急に立ち上がり、整列して参道を歩いて、拝殿から離れていった。一瞬驚いたが、これは退場しているだけだろう。ただ、吉晴と留智亜だけは、正座したままでその場に残っていた。

留智亜が俺に言った。「では次に、社務所のほうで岡田様の歓迎会を行いたいと思います」

「歓迎会？」俺は怪訝な顔をした。「新歓（新入生歓迎会）みたいなもんか？」

「シンカンが一体何かは存じませんが、要するに宴会です」留智亜は、とても分かりやすいたとえをした。

「……つまり、俺を肴に飲めや歌えやっつてことか」

「……まあ、そうですね」

肯定されたよ。

おい、吉晴。苦笑してんじゃねえ。

「……まあ、別にいいよ。俺もそういう騒ぎは嫌いじゃないし」
自分が着だというのは複雑だが。
首肯すると、「では、社務所まで来て下さいませ。もちろん、他の神様方も」と吉晴が言った。

「ボク、宴会なんかよりサッカーしたい……」

「そんな気分じゃないんだけれど……」

「宴会？ お姉ちゃん、カラオケってあるかな？」

「さあ、どうだろうか……ま、あるんじゃないか？」

「……ふああああ……あ」

「宴会ねえ……また、吉晴さんを誘惑でもしてみましようか……
ウフフフ」

『カラオケか……あのグループの新曲、入ってるかな』

人……いや、神様の反応なんて、三者三様なんだな。

岡田直己の歓迎会（前書き）

一部に「ひぐらしのなく頃に」ネタあり。

美瑛「え？ そんなの、どこにあるの？」

……お前だよ。

美瑛「えっ？」

岡田直己の歓迎会

拝殿から社務所に戻ると、さつき待機していた大広間に通された。そこには既に、縦長のテーブルが数台並べられてあり、さつきまで巫女装束や神職装束を着ていた人達が、私服でテーブルのそばに座っている。と言うか、座布団に正座していた。

テーブルの上には、どこかのレストラン出てくるような豪華な和食が並べられてあった。

俺は少々面喰らいながら吉晴の後をついていき、一番奥のテーブル、つまり上座に座らされた。左隣には榊原、右隣には別の女性が座っていた。さっきの神楽で踊っていた人だった。

その女性は榊原よりも身長が高く、黒髪はセミショートにしており、顔立ちはとても整っている。どこかのミスコンにでも出てきそうな女の人だ。スタイルも抜群にいい。……しかしながら、残念なことに胸は無……ゲフンゲフン。

心の内で咳払いをした瞬間、女性が話しかけてきた。

「お初にお目にかかります。私、出雲清美と申します。この神社で、本職巫女を努めさせてもらってます。今後とも、よろしくお願い致します」

ふっん、出雲と言うのか。

そのまま出雲のほうを見たまましていると、肩が誰かに叩かれた。振り返ると、榊原と目があった。

榊原は言った。「それでは、岡田様。いただきますの挨拶を、よろしく願います」

日直かよ、俺は。

「いえ、舞手神様でございます」

「何で俺の考えてることが分かった。って言うか、冷静にツッコむなよ。……いただきます」

合掌してそう言うと、大広間の全員がいただきますと復唱した。そして、各々が思い思いに食べ始めた。

左に榊原、右に出雲。美人二人に左右を挟まれて、ニヤけない男子が居るのだろうか。……と言うわけで、俺は今、頬の筋肉が盛大に緩んでいた。不可抗力だ、不可抗力。

黙りながら、しかし頬を緩めながら食べていると、右肩が叩かれた。その方向を振り返ると、頬に何か当たる感触があった。

出雲の人差し指だった。

「ふふ、こんな単純な手に引っかかるんですね、岡田様」

……これ、何てハーレム？

そう思っていると、出雲は皿の上の刺身を箸で摘み、持ち上げると、俺の口の前に差し出して、言った。

「はい、岡田様。口を開けなさってください」

……はっ？

「……いや、それお前の」

「私は構いませんから。ささ、お口を」

そう言うのと、更に箸を近づけてきた。俺は口を開け、その刺身を咀嚼した。

「美味しいですか？」 出雲が訊いてくる。

「あ、ああ……当然」

それはよかったです、と出雲は言い、ニツコリ笑った。

……ああ、駄目だ。頬が、頬の筋肉が緩んでしまう。畜生、だらしがないぞ、俺。

必死に自分を戒めていると、今度は左肩が荒々しく叩かれた。振り向くと、既に刺身を箸で摘み、宙に浮かせた状態にいる榊原が目に入った。なぜか、榊原は不機嫌そうな表情をしていた。

「岡田様。口をお開けになってください」

「……え？」

「……ですから、口をお開けになってください」

「……」

こんなキャラだったか？ 榊原って。

「……駄目ですか？」

「え？ あー、いや、食べる。食べる」

口を開けた。すると、榊原が刺身を箸で摘んだまま、口の中に入れてきた。

「……」

「……」

いや、刺身落とせよ！

「……」

榊原は十数秒後に、刺身を舌の上に置いた。

……何でサツと置かないんだろう？

おい、出雲、そのニヤニヤ笑いはなんだ。真相を知っているのなら教えてくれ。

そんなことを思っていると、吉晴の声が聞こえた。

「よーっし、んじゃ、カラオケ大会始めんぞー！」

途端に歓声が上がリ、部屋をそれが埋め尽くした。

「
」

池田は……まあ、イメージどおりというか何というか、明るい曲
だな。

「
……
」

……溜、もうちょい明るい曲を頼むよ。

「
」
「
」

洲崎姉妹はデュエットか。……皆歌上手いな。

「
」
「
」

温泉川、あくびを抑えろよ。

「
」
「
」

灰野、英語の発音上手いな。

……空閑は……駄目だ、机に突っ伏してる。そばには、空になっ
たビールの缶が二、三本……神様って、酔ったり寝たりするんだな
って、ちよつと待て。それ以前に、空閑は明らかな未成年だろ。
いや、神様だからそういうのは関係ないのか？ んん？

まあ、とにかく、起こしてやろうか。このままだと風邪ひくし…

……え？ ……ひくのか？ まあ、ひくと取り敢えず仮定しよう。俺は空閑に近づき、体を揺すった。

「……………」

あ、半分だけ目が開いた。そして、ゆっくりと顔を持ち上げた。このまま起きればいいが、と思っていたら。

「……………」

「のわっ?!」

……さて、俺の台詞一つだけじゃ一体何があったのか分からないだろうから、描写を始めよう。

簡潔に言う。

「いきなり空閑がこっちを向いて、抱きついてきた」だ。

「ちょちょ、空閑?!」

「……………」

寝てるし！ ……ふうん、女の子の体って柔らかいな……………って、ああ！ 俺は一体、何てことを考えちまったんだあ！！
心中で叫びながら自己嫌悪に陥っていると、不意に後ろから、殺気のような、おぞましい気配を感じた。
これ以上死んでもなあ、と思って振り返ると。

「……………おお〜かあ〜だあ〜さあ〜まあ〜……………」

……日本酒の一升瓶を右手に握り、頬を紅潮させ、誰からみても

「酔っている」と言えるような状態の、美瑛が目に入った。

「……なあにをやっているのかな？　かな？」

……はっ？

「……けえいち君？　返事が聞こえないんだよ？　だよ？」

「……お前、『ひぐらしのな』話を逸らさないでくれるかな？　かな？」
「……ごめんなさい」

美瑛は右手を、ブンブンと回し始めた。危ないって、おい。

「……何をやっているのかと言われても、これをやってきたのは空閑からだしなあ……」

「……けえいち君？　嘘はいけないんだよ？　だよ？」

「……俺圭一じゃねえし」

あんな口八丁手八丁じゃねえし、エアガンとか持ったことねえし。

「第一嘘じゃな「嘘だツツツ……！！」……嘘じゃないって」

「けえいち君……レナに嘘をつくのかな……」

「もつてめえ自分のことをレナって言うってんじゃないか」

ひぐらしのファンなのか、お前は。

もしかしてこのまま堂々巡りか？　と不安になっていた、その時。

「みえい」

「ッ?!」

救世主、銀善が現れた!

……ひどく泥酔した状態で。

「みえいも、いっしょに、飲もうよ」

「……魅いちゃん、邪魔しないでくれるかな? かな?」

……美瑛よ、お前には銀善がそう見えるのか。

「だれだよみちゃんて」

「……酔ってるのかな? かな?」

「酔おてなんかあ……ヒック」

「……どっちにしろ、邪魔しないでほしいな」

そういうと美瑛は、銀善のほうを振り向き、一升瓶を両手で持ち

……。

……って、ヤバくない? これ? いや、完全にヤバいだろお!

くそ、こついう時どうすれば……あつ、そつだ!

「美瑛!」

「何かな、けえ……っ?!」

俺は空閑を体に纏わりつけたまま立ち上がり、美瑛を背後から抱きすくめた。

よし、もし美瑛がレナ本人になりきっていて、俺が圭一に見えるなら、これで……！

「……あ、ああ、あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう」

「……………美瑛、それは違うぞ。それを言うなら『はう！』だ」

「あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう」

「……ま、いつか。止められたし」

俺は酔いつぶれて眠ってしまった銀善の上に、顔を真っ赤にしてあうあうと連呼する美瑛を乗せた。

あ、もう起こさないからね。空閑みたいになられても困るし。

そして、未だに抱きついている、空閑を引きはがしにかかった、その時だった。

「康子お〜ちやあ〜ん？ ずるいわよお〜？」

どこからか艶やかな声が出て、途端に空閑が体から剥がれた。そして、今度は別の重みが、空閑よりも遙かに重量のある重みが下半身にのしかかった。

思わずその場に尻餅をつき、重みの正体を見た。

「うふふふふ、岡田様あ〜。今からあ〜、私と楽しいこと、し、ま、せ、ん、か？」

……って言うか、大体の予想はついてたけどね。やっぱり、灰野か。銀善よりも泥酔してるっぽい。

……ちよつと待て。楽しいことって、まさか。

「うふふふふ」

と、灰野はいきなり俺の袴を掴むと、下に引っ張った。

「ちよちよちよ！ ちよつと！ 何やってんの！ そして何やろうとしてんの！」俺は慌てて袴を上を引つ張り返した。

「あらあゝ？ 私から言わせるんですかあゝ？ 岡田様って、Sですなあゝ？」

人を勝手にSにするなよ！

「駄目だ！ 駄目だあ！ この小説は残酷な描写はあっても、そういう描写はないんだぞあ！」

「あら？ では岡田様、一生経験しないと？」

「作者の見ていないところでやるんだよあ！」

「うふふふふ 見せつけてやりましょう」

「語尾に とか付けんなあ！」

ツッコんでいる間にも、灰野は俺の袴を脱がしにかかってくる。ちよ、マジ、誰か助けてくれーっ！

「池田あ！」

「~~~~~」

……駄目だ、熱唱中！

「溜い！」

「……あ……また抜かされたわ。まあ別に、次の周回で抜かすからいいんだけど……」

こいつも駄目だ、ケータイでレースゲームやってる！

「温泉……呼ぶまでもないか」

どうせ寝てるだろうし。

ああ……空閑！……は寝てるね。

銀善……も酔いつぶれてるね。

美瑛……はあうあう言ってるし何よりレナ化してるから起こしたくないねえ！

「ヘルプミイイイイッツツ！！！」

「岡田様あゝ、そんなに恥ずかしがらなくてもあゝ」

「だからこの小説では性的描写は駄目なんだよあ！」

本当、誰か助け……あ、榊原あ！ 出雲お！

「……玉枝ちゃん」

「……何でしょう、出雲さん」

「……不公平だと思うの」

「はっ？」

「……私達、年齢近いじゃない」

「……まあ」

「……つまり、生まれてから今まで食べてきたものは、ほとんど同じってことでしょ？」

「……少し無理がありますが、まあ……そうですかね」

「……」

「……」

「……尚更不公平よ」

「……ですから、何が」

「……」の胸よお」

「ひゃっ?…!」

「何であなたの方が私より断然大きいのよお?!」

「い、出雲さあん?!」

向こうは向こうで何か始まってるとし！ 描写できないようなことをやってるしい！

「岡田様あゝ、私達もおゝ」

「駄目だこいつ早く何とかしないと」

何とか……あ、そうだ！

「さ、酒！ 酒飲も！ 酒飲んでからしよう!」

「ええゝ？ しょうがないわねえゝ?」

頼むから、早めに酔い潰れてくれよ……! !

「……スー……スー……」

「……た、助かった……」

結局、灰野は飲み始めてから一時間でやっと眠った。よし、この小説のR15化を防げたぞ。

「お、岡田様あ……。大丈夫……。ですか……」

熟視している灰野を見つめっていると、榊原が乱れた胸元を直しながら、疲れたような表情をして近寄ってきた。

「……あの後一体、出雲と何が「訊かないください」……OK」

触れないであげておこう。

「……ふああああ……」

唐突にあくびが出た。眠いな……。今何時だよ。

と、頭の中に「AM1:03:49」という数字が浮かび上がった。さいですか、午前一時ですか。

……夜遅っ。

「えっと、榊原？　どこで寝ればいいんだ、俺は？」

「別に、どちらでもかまいませんよ？　まあ、皆様基本的にはこの社務所で寝泊まりされていますが、灰野様はホテル舞手、岳野様は拝殿のほうで寝泊まりされてましたし……。あ、岡田様も、ホテルに寝泊まりしたいとご希望されるのであれば、すぐさまホテル舞手で一番の高級室を用意させますが……」

「この神社はどんだけ権力あるんだよ。」

「いや、ここがいいよ」

「そうですか。では、岡田様のお部屋へご案内致します」

そう言つて、榊原は大広間を出た。俺は後をついていった。

歩きながら、独りごちた。「神様つて、以外と人間的なんだなあ」

「はい？」榊原が反応した。

「いや、ものを食べたり、酒を飲んだり、その結果酔つたり、眠くなつたり、楽しんだり……まるで生きてるみたいだ」

「いえ、死んでいます」

榊原が、きつぱりと言つた。真剣な表情をしていた。声の雰囲気も、ガラリと変わっていた。

「岡田様は、完全に死んでおられるのです。ご自分の死生の区別がつかないということは、とても危険なことです。くれぐれも、『死んでいる』という自覚をなくされないよう、お願いいたします」

「冗談だよ」榊原の豹変に怖気つきながら、言つた。「冗談に決まつてるじゃないか」

「……ならよいのですが」

少し、きまらずい雰囲気になった。

と、いきなり榊原が立ち止まつた。木製の、立派な扉の前に立っていた。

「こちらです、岡田様」

榊原は扉を開け、自分は脇に立ち、俺が先に入るのを待っていた。執事ですか、あんた。

「いえ、巫女です」

「……どうやったかは知らんが、心を読むなよ」

俺は心中で溜め息をつきながら、部屋の中に入った。

部屋は結構広く、二十畳くらいあった。だが、家具は部屋の右上隅に置いてあるベッドしかなかった。おかげで、ただでさえ広い部屋が余計に広く見える。

「何かご要望の家具があれば、お伝えください。すぐさま用意致します」

「あー、そう？ んじゃ取り敢えず、テレビとDVDレコーダー二台、パソコンとPSS3、Wii、DS。ソファとテーブルを一台ずつ。あと囲碁のセット。んー、取り敢えず、今欲しいのはこれくらいかな」

「承知致しました。明日の朝にでも、用意致します」

もう一度、大きなあくびがでた。それが榊原にも伝染した。

「……ああ。そろそろ俺は寝るわ……」

俺はそう言い、ベッドに潜り込んだ。するとベッドの横に立っている、榊原が言った。

「了承致しました。しかし、岡田様、ご就寝なさる前に一つ、申し上げておきたいことがあります……」

「はい？」俺は顔を榊原のほうに向けた。榊原は真剣な顔をしていた。

「……先程、私はこう申し上げました。『生死の自覚がないことはとても危険だ』と」

「ああ」

「そこですすね。お気持ちはお察しするんですが」榊原は一旦言葉を区切った。「ご家族、ご友人との面会、連絡は避けていただきたいのです」

「はあっ？」

俺は飛び起きた。何だと？ それはないんじゃないか？ せつかく、私市達や両親と会えると思ったのに。会って、安心させてやれると思ったのに。

「すみません。お気持ちはお察しします」榊原はもう一度いい、頭を下げた。「しかし、これは神様になられた方の生死を本人に自覚してもらったために行っていることであり、また舞手神様だけでなく他の神様にも同じように、知人との面会や連絡は避けていただいております。そして残念ながら、これは私達舞手神社の意向ではなく、神社本庁の規則に沿ったものでして」

「拒否権はないってことか」俺は溜め息を吐いた。「しかし、いつ

かは俺がここの神様になったことを、俺の家族に言わなきゃならんだろう？ 観光案内の文章とかも、『岳野妙子』のところを『岡田直己』に変えなきゃならんだろうし」

「そのことは、神社本庁の職員が責任を持ってご遺族に許可を取り、各会社・マスメディアに通達します」

「……どうしても、駄目なのか」

榊原は十数秒沈黙してから、言った。

「はい」

俺は先程より長く溜め息を吐いた。

「はぁ……くそっ」

「……すみません。お気持ちお察しします」榊原が頭を下げた。

「ああ……もういいよ、別に。……悪いけど、話が終わったなら、寝るから出ていってくれないか？」

そう言うと、榊原は頷いて、俺の部屋から出ていった。

消灯して、ベッドの上で仰向けになり、思わず舌打ちをした。「チッ」という音が反響して、両方の耳に届いた。

私市由佳の自殺未遂（前書き）

少々ダークな話です。

私市由佳の自殺未遂

「岡田君……」

壇に立てられている、岡田君の写真が入った盾を見て呟いた。

「……何で……死んじゃったのよ……」

思わず、そんな声が出た。

ここは、岡田直己の葬式が行われている斎場。私、私市由佳は、その葬儀に参列しているところだった。

……本来なら私は、この式場に入ることすら、許されないのかもしれない。
だって。

私が、あいつを殺したようなもんだから。

……もちろん、この手であいつを死に追いやったわけじゃない。
でも、私があいつの死の一因になっていることは確かだ。

一週間前の早朝。私はあいつと、クラスメイト二人を誘って、舞

手山という山に登りに行っていた。クラスメイトの内の一人の庵原という奴はともかく、あいつはあまり登山に乗り気ではなかった。……無理に、誘わなかったらよかった。私はこの時点で、あいつに死ぬ原因を作ったのだ。

登山道を歩き始めて約一時間後、あいつがついに疲れ果てて、「休憩しよう」と言い出した。私はそんなあいつに向かって、「この先の休憩場で待っている」と答え、あいつを置いて先に進んでしまった。

そして、数十秒後に。

あいつは、死んだ。

あいつを置いて歩いていると、バキッ、と変な音がした。一秒後、グシャッ、という音もした。振り返ってみると、さっきまでそこに居たはずのあいつが消えていた。そして、あいつのすぐ横に立てられていたはずの、鉄柵まで消えていた。

ひどく嫌な予感がした。道の両脇は崖になっているからだ。私は道を戻って、鉄柵があった箇所から恐る恐る下を覗き込んだ。途端に、柄にもなく大きな悲鳴を上げた。

あいつが、

頭を失い、手足をあらゆる方向へ捻じ曲げ、胴を二分し、血液に全身を浸している。

そんな状態で、崖下に落ちていた。

……それからのことは、覚えていない。気がつくと、どこかの車内の後部座席に腰掛けていた。車内から出て、さっきまで居たのはパトカーの中であり、まだ舞手山の、……あの事故現場に居ることを知った。

私はすぐさま、近くの鉄柵から身を乗り出して、胃の中のものを全て戻した。それから、全てが流れるように過ぎていった。事情聴取、下山、帰宅……不思議なことに私は、その日一度も泣かなかった。ただただ、悲しい気持ちだけが私の心を満たしていた。あまりの悲しさに、涙腺までもが活動を停止したようだった。今日に至るまで、呆然としながら、虚ろになりながら過ごしてきた。

私が、あいつを、急かすような真似しなければ。

私が、あいつを、無理に登山へ誘わなければ。

あいつは、死なずにすんだのに。

今も、生きていたはずなのに。

午後十時に葬式が終わり、斎場から出た。式の途中で、あいつの両親に会ったが、両親は私を一度も責めなかった。「あなたのせいで、息子は死んだ」と怒鳴り散らしてもよかったのに。……いや、むしろそうしてくれたほうが、私にとっては楽だった。もっとはつきりと、自分の罪を確認できるから。

私はフラフラとした足取りのまま、駅に向かい、電車に乗った。ただし、自宅方向ではなく、舞手山のふもとの駅行きの電車だ。

殺人は、死をもって償わなければいけない。

これが、自分なりに出した、償い方だった。

私は目的の駅で降りると、駅から出て、タクシー乗り場でタクシーを一台捕まえた。そして後部座席に乗り込むと、運転手に「舞手温泉まで」と告げた。正直な話、どこでもよかった。飛び降り自殺なんて、ある程度の高さがあれば成功するのだから。

タクシーは発車し、国道を走り始めた。そして数分後、運転手が唐突に話しかけてきた。

「……もしかしてお客さん、自殺しようとしてませんか？」

心臓の鼓動が、余計に早まった。

「……実は私ね、昔形武鍾乳洞までお客さんを乗せたことがあるんですが、そのお客さん、洞窟の中で事故って死んでしまっ……商売柄もあるんでしょうが、それから私は、『この人、死のうとしているなあ』ってのが、何となく分かるようになったんですよ」

まずい。

早く否定しないと。

私は無理矢理笑顔を作りだし、言った。

「まさか。そんなわけ、ないでしょう」

ネームプレートを見る限り接待というらしい運転手は、ふうん、と納得した素振りを見せた。接待さんはそれ以後、何も言わなかった。私からも、何も言わなかった。

更に数十分が過ぎて、ようやく舞手温泉に到着した。タクシーは温泉施設の駐車場入り口手前で停車した。私はお金を払って、タクシーを降りた。てっきり接待さんが何か言ってくるものと思っていたが、意外と何も言わなかった。まあ、そのほうが私にとって好都合なんだけど。

さすがに、観光施設の手前から飛び降り自殺するなんて、嫌がらせのような真似はしない。それにここは温泉の近くで、車の交通量も多かった。私は歩道を数十分間歩いた。途中でわざと脇道や細道に逸れていったせいか、辿り着いた車道ではもう、交通量はまったくなくなっていた。

私は車道に降りると、歩道とは反対側のガードレールに近づき、それを乗り越えた。乗り越えた先は断崖絶壁になっていて、遙か下に土の地面が見えていた。心理的な効果もあって、地面は何千メートルも下にあるかのように見えた。

私は、ガードレールと崖との間の、僅か数十センチのスペースに立っていた。もちろん、自殺するつもりなので、命綱はない。下を見てみたけれど、不思議と恐怖は沸き起こっていなかった。多分、一つの迷いもなく、死ぬことを決意しているせいだろう。

私は靴を脱ぐと、両手を左右に広げ、目を閉じた。

なあ。

死のう。

……最後に、一つだけ。

……岡田君……。

「好きだったよ」

私は重力に従って、体を前傾した。

途端に、足から地面の感触がなくなって、体が浮遊した。頬が、髪が、体のあらゆる箇所が風を切り始めた。ビュウウウウ、という音も聞こえるようになった。数秒後には、体は地面に対して垂直になっっていた。もちろん、頭を下に向けている。

そして、落下し始めてから十数秒後。

頭に激痛が走った。

視界が真っ暗になった。このまま死ぬるか、と思っただけで、そういうわけでもなかった。まだ視覚を除いた五感は機能していたからだ。体が回転してまた落下し始め、今度は右の掌に何かで貫かれるような激痛が走った。そして右手を支点にして、全身をぶらんと中空に吊り下げた。木の枝か何かが手に突き刺さっているに違いなかった。しばらくそのままいたけれど、数秒後に折れるような鈍い音がした後、また落ち始めた。

ドンツ、と全身が堅い岩か何かにぶつかり、背中全体に気絶するほどの痛みが走った。しかし、気絶できなかった。十分に苦悶した。でもこれも、岡田君を殺してしまったことの、罰なのかもしれない。つた。

ぶつかった岩肌は傾いていた。私はごろごろとその坂を転がった。数秒後にまたしても地面の感覚がなくなったが、今度の落下は数メートルで済んだ。

後頭部に鈍痛が走り、思わず濁点付きであっと呻いたところで、ようやくすべての感覚を失えた。

背中全体に、布団か何かの柔らかい感触を味わっていた。

恐る恐る目を開けると、木でできた天井が目に入った。私は両手をついて、上半身を起こした。どうやら私は、どこの旅館にでもあるような大広間の中央に敷かれている、一組の布団の中に寝かされているみたいだった。

ここが天国なんだろうか。それにしても、えらい殺風景な部屋だ。もっと、三途の川やお花畑といったものをイメージしていたんだけど……あ、それとも、地獄なのかな。

私は掛け布団を剥がし、立ち上がった。途端に目眩がして、思わず座ってしまった。暫く深呼吸をしてから、再び立った。死後の世界でも目眩はあるんだなと、不思議に思った。

私は大広間の出入り口に近づいていった。出入り口は、襖が閉まっていた。私はそれを開けようと、恐る恐る手を伸ばした。一体この先に、何が待っているんだろうか。

と、急に襖が自動で開いた。

「きゃっ!」

な、何が出てきたの?! 天使?! 悪魔?!

「あ、私市さん。目が覚めましたか」

襖の向こう側から、巫女姿の女の人歩いてきた。身長は私と同じくらいで、顔立ちは整っていて、スタイルもいい。特に胸。

「だ、誰ですか?」どもりながらも訊いた。

「私、舞手神社の本職巫女を努めております、榊原玉枝と申します」
榊原さんは、そう言っ頭を下げた。

「あ、いえ、こちらこそ。私市由佳です」私も慌てて頭を下げた。
そう言えば、私からはこれが始めての自己紹介なのに、何で榊原さんは私の苗字を知っていたんだろう。

……まあ、それは置いといて。なぜ私は、神社なんか居るのよ？

「榊原さん、なぜ私は神社なんか居るんですか？ ……あ、もしかして、あの世への中継地点か何かですか？」

「いえ、違います」榊原さんは手を振った。そして、驚きの言葉を口にした。

「私市さん。あなたはまだ、生きておられますよ？」

「はっ？」

思わず、変な声が出た。そんな馬鹿な。だって、あんなに高いところから落ちて、体を打ったり、目が外れたりしたのに……生きてるわけ、ないじゃない。

私の気持ちを察したのか、榊原さんが言った。「あなたはつい十分ほど前に、舞手山内の車道から落下し、数十メートル下の地面に着地、死亡の一步手前まで追いつめられました。覚えておられます

ね

もちろんよ。忘れるわけがない。

「ところが、それこそ虫の息ですが、まだ何とか生きておられたのです。舞手神様が私市さんの飛び降りに気づき、現場に駆けつけ怪我を治療して、ここ、舞手神社の社務所にまで運んだのです」

は？ 治療？ ありえないでしょ。右手なんて枝が貫通してたし、目に至っては完全に挟られてたのよ？ それをほんの数分で、しかも眼球をまるごと再生させるなんて……人間業じゃないわよ。

……そう言えばさっき……。

「榊原さん。舞手神様っていうのは……あの、ここで祀られてるっていう？」

「はい、そうです。私市さん、あなたが信じるかどうかは自由ですが、神様というのは、確実に存在しているものなのですよ」「榊原さんは、につこりと微笑んで言った。「あなたも、ご存じの方です。お呼びしてきますね」

榊原さんは言い終えるや否や、大広間を出ていった。私は半ば呆然として、榊原さんの背中を目で追った。

一体、何なのよこれ……。飛び降りたはずなのに生きてるし、しかも神様は存在してるっていうし……。頭が混乱してくる。

暫くの間、頭を抱えて考え込んでいると、不意に、懐かしい声が耳に届いた。

「私市……、久しぶりだな」

この声は。

まさか。

私はゆっくりと、頭を上げた。

斎場に立てられていた、あの写真と全く同じ笑顔を浮かべた、岡田君が立っていた。

「……お……か田……君……？」

……生きてたの？

岡田直己と私市由佳（前書き）

前回の岡田視点です。

岡田直己と私市由佳

「……………」

パチン。カチツ。

「……………」

パチン。カチツ。

「……………」

パチン。

「あ……………」

しまった、石を取られてしまった。それも、五つほど。囲碁の序盤で五目も取られてしまうというのは、結構きつい展開だ。榊原は石を取り終わると、タイマーのスイッチを押した。俺のターンに変わる。俺は碁盤を睨みながら、うーん、と唸った。

俺が死んでから、一週間が経った。この一週間、一体何をしていたのかと訊かれても、どうにも答えようがない。無理に言うなら、「何もしていなかった」「ダラダラしていた」となる。

神様に就任した時に榊原が、「就任直後はエネルギーバランスが不安定なため、事故や災害が起きやすくなる」と言っていたので気を張ったのだが、正直肩透かしに終わった。そして今日も、やるこゝとがなく、こうして榊原と一日中囲碁を打っているというわけである。

ふと時計を見ると、とつくに十時を過ぎていた。この一局が終わったら、もう寝ようかな。どうせ事故や災害なんて起きないだろうし。俺は碁石を適当な場所に置いて、タイマーのボタンを押した。自分でいうのも何だが、俺は結構囲碁に強い。生きていた頃に所属していた囲碁将棋部では、部員十五人中四位という、微妙な強さを持っていた。榊原が俺の手を見て低く唸り、腕を組んで長考し始めた。

下手な考え、休むに似たり。そう言って榊原を挑発しようとした、その時だった。

不意に、ブーーーーーッ、と途轍もなく大きなブザー音が聞こえた。

「な、何だあ?!」思わず大声が出た。

それに驚いて、榊原も叫んだ。「ど、どうされたのですか?!」

「い、いや、聞こえなかったのかよ?! 今、ブーーーーッって、すごい大きなブザーの音が鳴ったじゃないか?!」

途端に、榊原の顔が青くなった。「岡田様。それはですね、災害発生の知らせです。どのような感じの音で、どのくらいの大きさでしたか?」

「どのよ……こう、単純にブーーーーッって鳴って、その音で他の音全部が掻き消されるくらいの大きささ」

まあ、最初からこの部屋は無音状態なのだが。

「……それはまずいですね。アラームは、音の種類で災害の種類、大きさを規模を示していますから。音から判断して、どうやら発生したのは自殺……そして恐らくその自殺者は、即死せずに相当な重傷を負っているでしょう。ただし、このまま放っておけば、死ぬことは間違いありませんが」

一体、あとどれくらいで死ぬのだろう。そんなことを思ったとたん、頭の中に「59」という数字が浮かんだ。一秒ごとに、「58」「57」と数字が減っていく。

そいつが死亡するまでのカウントダウンか。

「助けに行ってくる！」

俺はそう叫ぶと、全身を物質透過状態にして宙を飛び、社務所から抜け出て、夜空に舞い上がった。火口よりも高く飛んで、脳内で「自殺者の位置」と念じる。すると、真っ黒な山の一箇所が赤く光り、空に向かって光の柱が形成された。

なるほど、あそこか。俺はハイスピードで、柱の根本へと向かった。まずい、あと四十秒を切ってしまった。

十数秒後に、目的地に到着した。俺は地面に降り立つと、柱を消し去り、実体化して自殺者に近づいた。

驚いた。

なんと自殺者とは、私市のことだった。

「……き、私市?! 私市?! おいつ！」

俺はそう呼びかけながら、私市に近寄った。体のあちこち、特に右手から大量に出血していて、変な方向に曲がっている関節もあつ

た。顔も傷だらけで、あらゆるところが大きく腫れている。

「畜生、どうすれば……」

呼吸はしていなかった。が、頭の中の数字はまだ減り続けていて、零にはなっていない。いわゆる心停止状態に陥っているらしい。早く何とかしないと。ついに数字は二十を切ってしまった。

俺は心の中で、榊原にテレパシーを送った。

（榊原あ！ 応答しろお！）

どうやって送ったのか、なんて訊かないでほしい。俺だって、できるかどうか分からずにやったんだから。

（お、岡田様？ 何ですかこれ？ テレパシー？）

よし、成功だ。

（負傷者を発見したんだが、死ぬまで残り十数秒だ！ どうすればいいんだ?!）

（落ち着いてください。舞手神様の能力の中に、「負傷者の治療」というものがあります。まず、両腕を伸ばし、掌を負傷者に向けてください。あとはひたすら、「治れ」と念を送り続けるだけです）
榊原は早口でそうまくし立てた。

もう既に、数字は「5」になっていた。

「OK!」

俺はそう叫ぶや否や、両腕を私市に向けた。

「4」。

「治れ！ 治れ！ 治れえええっ！！」

そう絶叫した。声に驚いて、周囲の木から鳥が何羽か飛んでいった。

「3」。

「治れつつつてんだろおがああああっ！！！！」

そう叫んだ途端、私市の体が、白い光に包まれた。そして。

「2」。

「1」。

「1」。

「1」。

カウントダウンが止まった。数秒後に、私市の発光も収まっていた。出血も骨折も綺麗さっぱりなくなっていた。眼球でさえも再生されていた。さっきまでの大怪我が、嘘のようだ。服もすっかり直っていて、その時初めて、私市が学校の制服を着ていることに気づいた。

「よ……よかった」

俺は大きく息を吐いた。途端に全身のバランスが崩れ、地面に大の字に倒れた。

私市は神社に連れていき、大広間に布団を敷いて、そこに寝かせておいた。さすがに、あのままあの場所に放置しておくわけにもいかない。

俺は大広間から出て、榊原のところに行った。榊原は俺の部屋の中に居て、碁盤の前に正座していた。盤上は、俺が社務所を飛び出す前と何の変化もなかった。

「どうされます？ さっきの続きをやりますか？ それとも、もうご就寝なされますか？」

俺は時計を見た。が、まだ十時半を過ぎたばかりだ。あと一局やる余裕はある。

「いや、続きをしようかな」

そして、俺も碁盤の前に正座した。そしてタイマーのポーズを解除しようとしたが、ふと思いついて榊原に言った。

「そう言えば、よくあんな重体の私市を治療できたな？ あの怪我を治療できるんなら、どんな山でも今よりずっと負傷者の数が少なくなると思うんだが……」

そう言つと、榊原がいえ、と言つた。

「あの大怪我を治療できたのは、舞手山の神様だからこそです。舞手山はとても発展していて、従つて起こる災害や事故もレベルの高いものと想定され、それに伴つて舞手神様のできることも高度なものになるのです。まあさすがに、死者を蘇らせるようなことはできませんが」

ふうん、と俺は言つて、ポーズ解除ボタンを押した。

その時だった。

大広間のほうから、ドタ、という音がした。

「？ 何だ？」

「……もしや、私市さんが起きられたのではないでしょうか。様子を見に行つて参ります」

榊原はそう言つとすぐに、部屋を出ていった。俺は再び、タイマ―をポーズさせた。

そして数分後、また榊原が戻つてきた。

「岡田様、私市さんがお目覚めになりました」

「そうか。それはよかった」

「それですね、岡田様。今から私市さんと、会つていただけない

でしょうか？」

「はっ？」俺は眉をひそめた。「知人と会うのは、あんまりいいことじゃないのじゃなかったのか？」

「……実はですね、これは私の個人的な直感なのですが、私市さん、どうやら自殺しようとしたように思っんですよ」

「えっ？」

「ほら先日、岡田様が死亡された時の状況について、詳しくお尋ねしたじゃないですか。あれからすると、私市さんが、岡田様を死亡させてしまった、そう自責して自殺を決意したとしてもおかしくありません」

まさか、と言おうとして、やめた。見た目よりも責任感の強い私市のことだ。その可能性は十分にある。

「そういうわけで、私市さんと会って、彼女を安心させてほしいのです。構いませんか？」

俺は頷いて立ち上がり、榊原に続いて部屋を出た。そして大広間に向かつて、廊下を歩き始めた。

もし、本当に自殺するつもりだったんなら、ちょっと説教しないとな。

え？ 何様のつもりかって？

「神様だよ」

「はっ？」

「あ、いや、別に」

「私市……、久しぶりだな」

俺がそう言うと、私市は顔を上げて、途端に表情を文字どおり硬直させた。私市の両目は、まっすぐに俺を見据えている。そりゃまあ、一週間前に死んだ奴が目の前に現れたら、びっくりするわな。そして私市は、途切れ途切れに言った。

「……お……か田……君……？」

「ああ」

……私市の反応がない。

「……まあ、驚くのも無理ないな」

……まだ反応がない。

「……私市？」

あ、やっと反応した。私市はぶんぶん頭を振ると、言った。

「岡田君！」

そして、俺の体を触ってきた。物質不透可状態なので、私市でも俺に触れる。

両手と腰の辺りを触り、最後に俺の頬を左右に引っ張った。

「……ひよっちよっひよ、ひは痛いっへ……」

私市は手を離した。そして次に、何と俺の襟首を掴んで、自分のところに引き寄せた。

「馬鹿！ 生きてるなら生きてるって、ちゃんと連絡しなさいよ……」

「いやいやいや、正確にはもう、生きてないんだが、俺は……ちよ、ちよ、ギブギブ」

私市が手を離した。

「何よそれ、どういうこと？」

「ふうー……そういうことだよ。榊原から聴かなかったか？ 俺はここ、舞手山の神様になっただって」

「そう言えば、そんなこと言ってたわね」

「神様は、死んで霊体になった人しか就任できないんだ。つまり、今の俺を生きている、と表現するのは語弊がある」

「語弊つて……じゃあどう言えばいいのよ?! こんなに、こんなに、こんなに……元気そう……なのに……」

私市は途中で泣き出した。俺は私市の両肩に手を置いた。

「俺は死んでいる。けれど、今ここに居る。あれだ、あれ、『存在している』とでも言ってくれ」

私市は涙を流しながら、頷いた。俺は更に続けた。

「それよか、私市……自殺したって、本当か？」

途端に私市の肩が、ビクリと大きく震えた。

「……本当か」

私市は顔を上げた。目に涙の跡が残っていた。

「だって、岡田君が死んだのは、私のせいだから……私のせいだから、死んで償おうと……」

「馬鹿っ!」

俺は怒鳴った。

「一人の人が死んだら、一体どれだけの人間が悲しむのか……俺が死んだことで十分に分らなかったのか?! 何でまた、他の人を悲しませるようなことするんだよ!」

私市は俯いた。俺は更に続けた。

「いいか？ 自殺を持って罪を償おうなんて、そいつのエゴだ！ 『逃げ』だ！ 現実逃避だっ！ 罪は生きてこそ償えるものであり、死んで償える罪なんてこの世に存在しないっ！」

俺はそう断言した。随分と偉いことを言ってるが、あくまで私市をきつく説教し、二度と変な気を起こさないように言ってるのである。

「それにな」俺は話を続けた。「俺はお前のことを恨んじやいない。これっぽっちもな。いいか？ 『お前のせいで、俺が死んだ』みたいなふざけた考えは捨てるっ！ ……ったく」

私市は顔を上げ、俺を見つめてきた。

「……許してくれるの？」

「ああ？」

「私を、許してくれるの？ あんたを、死に追いやった私を」

「何言ってるんだ？ 最初っから怒ってなんかない。俺が怒ったのは、おまえが死のうとしたか「岡田君っ！」のわっ！」

いきなり、私市が抱きついてきた。ヤバい、幾ら何でも女の子に抱きつかれると、心拍数が早くなる。それと身長差もあまりないから、顔とかも俺のすぐ横に来るんだよな。

「ありがとう……ありがとう……！」

「……どういたしまして」

そう返事をした。暫くの間、私市は俺に抱きついたらまま泣き続けていたが、やがて泣き疲れて眠ってしまった。

子供みたいだな、と苦笑しながら、俺は私市をベッドの中に寝かせ、自分は大広間を後にした。

岡田直己とバス転落事故（前書き）

さあ、本格的に岡田の周りで災害が起き始めます。
この話は、ほんの序章に過ぎません。

岡田直己とバス転落事故

午後一時十八分舞手山麓駅発舞手山内循環の遠銅バスは、順調に国道五百八号線を走っていた。車内は満席で、年齢も性別も職業もバラバラな人達が座っていた。

教育ママらしい女性とその子供、キャリアウーマンらしき女性、先日奔土池で一騒動を起こした、角原と言う男とその彼女らしいキヤバ嬢（ちなみにこの時、角原はキヤバ嬢に、何やら高級そうな小箱を渡していた）、そして……タクシー運転手の接待、その実の娘の接待素美代。

「ねーねー、お父さん」素美代が接待の服の袖を引っ張った。

「何だ、素美代？」接待は素美代に訊いた。

「今日、どこに行くのー？ 行くところ、聞いてないんだけどー」

接待は意味ありげに笑った。「まあ、大人の事情って奴さ」

彼はこの前ホテル舞手の近くにできたレストランに素美代を連れていこうとしていたのだが、素美代を驚かせたいがために、目的地は秘密にしていた。

「むー」素美代は頬を膨らませた。接待が素美代の頬を突いて溜まった空気を抜き、暫くしてからお互いに笑った。

その時だった。

パン、と言う大きな破裂音がして、バスの車体が数十度前傾した。

「わわっ?!」

「きゃあつ?!」

乗客達が同時に叫んだ。バスは前傾後、突然、大幅な縦揺れを開始した。その一瞬後、バスが急減速を始めて、接待達は前の座席の背凭れに叩き付けられた。

一体、何があつたのか。接待は素美代を抱き抱えると、手をついて頭を上げ、バスのフロントウインドウから前方を眺めた。丁度その時、バキツと鈍い音を立てて、ガードレールがバスのフロントに突き破られるのが見えた。

「頼む岡田、このとおりだ!」

庵原がそう言って、俺の目の前で土下座している。これが本当の神頼み、ってか。

庵原、私市、業天の三人には、特別に俺が舞手神社に存在することを伝えている。俺の死に、少なからず罪悪感を抱いていた三人は大分救われたようだった。まあ俺としても、庵原と業天が私市みたいに自殺されたらたまつたもんじゃない。

「だから無理だつて」

「で、でも、神様なんだろう?! だったら、このくらいできるんじ

やないのか?!」

「……お前は、タクシーの運転手に裁判の弁護士をやらせるつもりか?」

「は?」

「やらせるつもりか?」

「……いや」

「そういうこと。要するに、専門外だ。それほど頭がよくなりたいなら、太宰府天満宮まで行けよ」

「遠いじゃん!」

「楽しんで頭をよくしよう、なんて考えがいけないんじゃないか……」
俺は溜め息を吐いた。

「そうよ。言っておくけど、岡田君、さっきから正論しか言っていないからね?」

私市が後ろから俺を援護した。庵原が、くう、と唸る。

「……ぎ、業天! お前から頼んでくれよ!」庵原が業天のほうを向いて、そう叫んだ。

「……ってことです。要するに、針なんて最初っから入ってなくて、血だと思ったのはタバスコだったんですね」

「なるほど、そうだったのですか。確かにそれは、難しいですね。正解率一パーセントも領けますし……」

業天は神原と一緒に、マニアックな会話を交わしていた。庵原の悲痛の訴えは耳に入っていないらしい。

神原がオタクだと判明したのは、俺が神様に就任してから数日後のことだった。ライトノベルにテレビアニメ、漫画、家庭用ゲームネットサーフィン、某巨大掲示板……本当色々な、それでいて偏ったものに精通していた。神原曰く、「ずっと神社の中に居るので、インターネットくらいしかすることがない」んだそう。

「ま、業天は頭がいいから、神頼みになんか頼らないだろうけどね」

「そうよ。だって、あの業天君よ？ 学年第三位なんだから」

俺と私市が一緒になってそう言うと、庵原は畜生、と叫び、頭を抱えた。

「なぜ、俺は勉強が駄目なんだ……」

知るか。

そして、第一そんなことを言ってる暇があんなら勉強しろ、と庵原に言おうとした瞬間。

脳内でブーーーーッ、とブザーが鳴り響いた。

「っ！ またか！」

「え？ 何が？」私市が訊いてくる。

「今、頭の中でブザーが鳴った。きつとまた、山内で何かあったに違いない」

「アラームが鳴ったのですか」真剣な面持ちで、榊原が訊いてきた。

「ああ、そうだ。ブーーッ、って奴」

「どんな大きさでした？」

「かなり小さかったな。ブザー以外に、普通に周囲の音も聞こえた」

「音の種類から判断すると、それは恐らく交通事故でしょう。大き
さからすると、『事故が発生したが、まだ犠牲者は出ていない状態』
だと思われます」榊原は、顔に幾らか安堵の表情を浮かべた。「急
げば、間に合うかもしれません！」

俺は「事故発生場所の位置」と頭の中で念じた。すると頭の中に、
舞手山全体の立体地図が形成され、その一箇所が赤く光った。国
道五百八号線の、カーブになっているところだった。カーブの外は、
高い崖となっていた。

次に、「事故の概要」と念じた。すると、次のような文章が頭に
浮かんだ。

「国道五百八号線途中の急カーブにおいて、遠銅路線バスの前輪が
両方共パンクを起こした。運転手が急ブレーキを掛けたものの、そ
の際にハンドル操作を誤ってしまい、カーブの方向とは逆方向に数

メートル走行。バス的一部分がガードレールを突き破って道路からはみ出してしまい、現在シーソー状態で何とかバランスを保っているが、いつ落下してもおかしくない状態にある。落下すれば、大惨事は免「ああ、くそっ！」

俺はその文を最後まで読まずに、すぐさま体を物質投下状態にすると、社務所から外に抜け飛び出した。

高速で飛行したため、たった数十秒で問題のカーブに到着できた文章のとおり、一台のオレンジ色の路線バスがガードレールを突き破って、車体の前半部分を空中に浮かせた状態だった。ぐらぐら揺れていると言うわけではないが、確かにあれは、シーソー状態だ。バランスを崩せばたちまち落下、乗員乗客の死亡、よくて重体は免れない。崖の下では、丁度バスが落下するであろう地点を避けて、野次馬が集っていた。

と、いきなり、バスの前の扉が音を立てて開いた。そしてそのまま、開いた入り口に注目していると、いきなりそこから、運転手のような男が出てきて、外に飛び降りた。

野次馬から、歓声のような悲鳴が上がった。

「させるかあ！」

俺はそう叫び、運転手の予想落下地点付近に高速で移動して、地

点の辺りに強力な上昇気流を発生させた。運転手は気流に煽られ、ゆっくりと着地した。運転手は気絶していた。

大分ヤバいことになってるな。早く助けに行かないと。俺は体の状態を、「現時点で問題のバスに乗車している者のみ視認可能」と言う状態にして、バスに近づき、そして抜け入った。

バスの中は、立っている者は居ないが、生憎満席だった。大人の他に、小さな子供も乗っていた。その中に、あのタクシーの運転手と温泉で会った素美代ちゃんがいるのには驚いた。何と二人は、親子のようだった。それと余談だが、随分前に奔土池において池田の奴に天罰を下された角原も、キャバ嬢らしい女と一緒に居た。

俺はバスの一番前に移動した。乗客達は、俺を見るなりざわついた。まあ、いきなり目の前に浄衣を着て宙に浮いた男が現れたら、誰だって驚くだろう。

俺は咳払いをして、言った。「皆さん。私はこの山の守り神の、岡田と言う者です。皆さんをバスの中から脱出させに来ました」既に乗客達は、素美代ちゃん以外全員、怪訝な表情を浮かべていた。

俺が一番後ろの席を指差した。「あ、一番後ろの座席に座っているあなた方、ちょっと頭下げて」

その人達は、戸惑いながらも頭を下げてくれた。俺は局所的な突風を起こし、席の後ろの窓ガラスを割った。割り残しが出ないよう、丁寧に割った。

乗客達は、啞然とした。俺はなおも言った。

「俺があなた達を担いで、あの窓から外に脱出させます。あ、自分で勝手に出ようとはしないでくださいね。このバスはシーソー状態になっていて、バランスが崩れるとあつと言う間に落ちてしまいま

すから」

あ、一気に青ざめた。まあいいか。釘を刺しておいて損はないし。

「それじゃあまず、子供から。えーっと、どのくらい居ます?」

そう訊くと、バスのあちこちから三つほど、手が上がった。男の子が一人、素美代ちゃんも含めた女の子が二人。

「じゃあ、一番前のほうにいる、君から脱出させてあげるから」

そう言っつてその席に移動し、そこに座っている男の子を抱っこしようとした、その時。

「ちょっと! 何で私の子は後回しなのよ?!」

バスの後方から、そんな声がした。

見てみると、バスの後ろの方の席で、縁の太いめがねをかけた、濃い化粧の女性が立ち上がっていた。いかにも「教育ママ」と言った風貌である。

女性はなおも、俺に言い募った。「不公平よ! 窓に近いほうの席の人から、脱出させるべきだわ!」

それだつて結局は不公平じゃねえか。

これはあれだな、モンスターペアレントつて奴だな。てつきり、テレビドラマの奴は誇張が入っているとばかり思っていたけど、まさか本当にあんな感じの人が実在するとは。これはちょっと、一言言っつておこうか。

「……あのね、あん」ふざけないで！ バスの後ろのほうに座ってるなら、いざと言う時に脱出できるじゃない！ 前に座ってる人こそ、優先させるべきよー！」

いきなり、男の子の母親が立ち上がり、教育ママに向かって怒鳴り返した。

「ふざけてるのはそっちのほうでしょ？！ うちの子はね、三日後にピアノの発表会を控えてるのよ！ もし手に怪我でもしたら、どうする気よー！」

「それを言うなら、私の子だって一週間後にリトルリーグの試合があるのよー！」

「一週間後でしょ？！ 私の子は三日後なのよ、三日！ 第一、試合なんて一回くらい出なくても大丈夫でしょうが！」

「それはピアノの発表会にだって言えるでしょう！ また出ればいだけのことじゃないの！」

「あのね、私は子供の将来を考えて発表会に出そうとしてんのよ！ 『また出ればいい』なんて考えは、甘いのよー！」

最早、論争の焦点が完全にずれている。乗客達はうつとうしそんな顔をして、子供達は困惑した表情を浮かべていた。早く止めないと。でも、どうすれば……。

「それにね、私の夫は市の議「いい加減にしやがれっ！」

俺が何とかしようと焦っていると、突然接待が立ち上がって、両

方の母親を一喝した。

「いいか?! 俺達は今、いつ落ちてもおかしくないようなバスの中に居るんだぞ?! 喧嘩している暇なんてない! 第一、俺達はこの人に」そして、俺を指差した。全員の視線が、俺に集中した。「助けてもらおう側なんだぞ! そんな偉そうなことが言える立場じゃないんだ!」

接待はそう言うと、「まったく、もう」と言って、席に座った。母親達も、うう、と唸って、不機嫌そうに席に座った。

接待GJ!

「……それじゃあ、気を取り直して……」

俺はそう言うと、男の子を抱き抱えて車内を移動し、割れた窓から外に出て、車道に降ろした。車道には、遠く離れたところに、騒ぎを聞きつけたマスコミが中継をしていた。

「君。ここに居ると危ないから、あそこにいる大人の人達のところに行ってくれ」

俺がマスコミを指差してそう言うと、男の子はコクリと頷いて、TVクルーの元へと駆けていった。俺はその後も、同じように女の子を二人車外に脱出させ、クルーに保護してもらった。

俺は車内に戻り、言った。「じゃあ次は、女性の方から。えっと、女性の方、手を挙げてください」

そう言うと、バスのあちこちから手が上がった。俺はやはり、前のほうに座っている人から救出していく旨を告げ、さっそくそれに

取りかかった。幸いにも、さっきのような出来事は起こらなかった。そして、乗り口のすぐ後ろにある席に座っている、角原とキャバ嬢のカップルの、キャバ嬢を助けようとして席に近づいた、その瞬間。

突然、角原がキャバ嬢の首を抱えて自分のところに引き寄せた。次に、胸ポケットに挿してあるボールペンを取り出し、芯を出してキャバ嬢の目に突きつけた。

俺はたじろいで言った。「な、何の真似だ！」

「み、見て分かんねえのかよ？」本格的な悪事はこれが初めてなのか、角原は少し声を震わせて言った。「お、俺を先に、そそ、外に出しやがれ！ じゃねえと、こいつの目を潰す！」

どうしようか……こいつの要求を飲むのは癪だが、そうしないとキャバ嬢が……。

ん？ 待てよ？ 俺には普通の人間にはない、特別な能力があるじゃないか。何も、こいつの言うとおりにする必要はない。

よし。

俺は突風を作って、角原のボールペンに命中させた。

「あつ?!」

ボールペンは後方に飛んでいき、空席の背凭れに当たって落ちた。そして角原が動揺している隙に、今度は時速数十キロと言うかなりの突風を作った。そしてそれを、角原の頭に当てた。

角原の頭が音もなく弾き飛ばされて前の手摺りに衝突し、鈍い音と共に角原は気を失った。

「さあ、あなた、こんな男はほつといて行きましょう。もちろん、後でちゃんと助けますがね」

半ば呆然としているキャバ嬢にそう言うと、キャバ嬢は我を取り戻して慌てて頷いた。だが、「ちよっと待って」と言うと、右手を開いて天高く掲げ、既に気絶している角原に強烈なビンタを食らわせた。角原の頭が大きく動き、窓にぶつかって低い音がした。

それからキャバ嬢は、懐から小さな箱を取り出すと、それを座席の上に捨てた。

「もう、あんたとは別れるから」

キャバ嬢は角原にそう宣告した。まあ当然の結末だろう。自分を人質にとつて脱出したような男に、いつまでも惚れているわけがない。

俺はキャバ嬢を抱き抱えて、バスから脱出させた。そして再び、女の人を脱出させるのを再開した。

更に二人ほど脱出させ、キャリアウーマンらしき女性を脱出させようと、抱き抱えてバス後部まで運んでいた時だった。

ポト、と小さい音がした。

「あっ！」

女性はそう言うと、じたばたと暴れ出した。

「ちよ、ちよっと、どうしたんですか！」

俺がそう言った瞬間、女性は俺の手から逃れて、バスの床の上に着地した。

途端に、グラリと車内が傾いた。

「あっ?!」

今のは俺の声だったが、乗客達も思い思いに叫んでいた。車内はどんだん傾いていったが、三十度を超えるか超えないかのところで傾きがストップし、また元に戻り始めた。だが今ので、余計にバランスが崩れたことは明らかだった。

俺は急いで女性を抱き抱え、空中に浮かしてから怒鳴った。

「何してるんですかっ!」

涙目になっていた女性は、ひつと悲鳴を上げた。「す、すみません。財布を……」

「まったく……落としたなら、私が拾ってあげますから! 皆さんも」俺は車内を見渡した。「勝手な行動はもう謹んでくださいね。今ので分かったでしょうけど、バスのバランスはかなり悪化しましたから」

乗客は全員、青ざめた顔を高速で縦に振った。

俺はそのキャリアウーマンを降ろした後、他にも女性を降ろしていった。そしてついに、車内は男性のみとなった。

さあ、ここからが問題だ。現在バスはシーソー状態にあり、下手に救出していくとバランスが崩れて転落する恐れがある。幸いにも支点は車体の中心の下にあるので、単純に両端から一人ずつ救出していけば転落は免れるはずだ。

俺は乗客全員に言った。「皆さん。次からは、両端に位置する人

から順に救出していきたいと思います。お分かりだとは思いますが、シーソー状態にある」

「分かった、分かったから、早く助けに来てくれ！」

乗客の内の一人が、悲痛な声でそう言った。俺は黙ると、さっそく救出し始めた。

最初は一番前の男性、次に一番奥の男性。その順番を繰り返していった。奇しくも、一番最後の救出となる位置の座席には、接待が座っていた。俺は他の客を助けている間、接待のほうをチラリと見た。接待は俺と目を合わせると、黙って頷いた。どうやら、了解してくれているようだった。

最後の二人の内の一人、未だに気絶している角原を抱き抱え、俺は後部へと移動した。気絶してくれているため、他の客よりも運びやすかった。

そして窓から出て、念のためバスから数メートル離れた車道上に角原を寝かせた、その時だった。

アスファルトが、グラリと揺れた。

「地震だっ！」野次馬が口々に、同義の悲鳴を叫んだ。

畜生、何も今来なくても。

震度はたったの「3」だった（「現地震の震度」と念じると、頭の中に「3」と言う数字が浮かび上がった）。だが、揺れの程度は小さくても、それはバスのバランスに相当なダメージを与えるはずだ。不安に思っただけのバスのほうを見ると、既に傾斜は四十五度を超えていて、こっちに車体の裏を見せながらズルズルと落下していくところだった。

「ヤバっ！」

あの中には、まだ接待が。

俺は叫びながら急いで浮き上がり、バスのほうに飛んだ。だが、崖に着く頃には、バスは既に空中に浮いていた。バスは垂直になつたまま、地面へと落下していこうとしていた。

野次馬の悲鳴が大きくなった。

俺は全速力で飛ぶと、バスの落下地点へと先回りして、バスを見上げた。バスは俺めがけて落ちてきていた。俺はまず、バスの周囲に風でバリアを形成した。超突風をバスの周囲に張り巡らせて、強力な風圧であらゆる衝撃を防げるようにしたのだ。

次に両腕をバスに向かって突き上げると、かめはめ波のようなポーズを取り、両掌に力を込めた。

途端に、両掌の間から突風が吹き出した。今まで出てきたものとは、比べ者にならないほどの速さの風だ。バスは突風に煽られて、落下速度の減速を開始した。

「畜生おおおおっつ！」

浮け！ 浮け！ 浮けえええっ！

心中でそう叫びながら、更に手に力を込めた。風はどんどん速くなり、心なしに視認さえできるようになるほどだった。

やがてバスは、空中で静止した。もしバリアがなかったら、今頃バスの車体は自らの重みと風圧に耐えかねて、グシャリと潰れていただろう。

「よ……よーし」

俺は風を出したまま、俺自身の上昇を開始した。もちろん、バス

も一緒に浮かせたままで。バスを風で持ち上げるのはかなり抵抗があったか、できないことはなかった。

……今ふと気づいたんだが、力学の作用・反作用の法則って今どうなってるんだろう。……まあ、神様なんて存在してるくらいだしなあ。そんなこと言ったら、質量保存の法則とか力学的エネルギー保存の法則とかどうなってんだよ、って話になるし。

俺はゆっくりと上昇していき、数十秒後にバスが落下した車道と同じ高さにまで浮かんた。ガードレールから身を乗り出してバスに行く末を見ようとしたり、元乗客達やTVクルー、警察官等が、慌て離れていった。

そのまま車道上空に移動すると、バスを支えている突風の、一部分だけの強さを弱めた。するとバスは、その弱まった方向に向かって傾いた。そのままだと転落してしまうので、俺はもう一方向から突風を出し、傾いていっていたバスの後部を支えた。そしてその、もう一つのほうの突風も徐々に弱めていき、垂直になっていたバスの車体を水平に近づけていった。

そして、完全に水平にしてから、形成していたバリアを解除した。その後、両突風の強さをゆっくりと弱めていって、バスをそつと地面に降ろした。

さあ、問題は中に乗っていた接待の安否だ。もしかしたら、転落したショックでどこかに頭を打ち、死亡してしまっているかもしれない。俺は恐る恐る、後部座席の窓から車内へと入っていった。ざっと車内を見渡したが、動いているものはなかった。

「……っ」

俺は接待が座っていた席まで移動した。もしかしたら、頭から血を垂れ流している接待が居るかもしれない、と覚悟しながら。

そして、意を決して席を見た。

「……はっ？」

間抜けな声が出た。

そこには、死体はおるか、接待自身さえ居なかった。

一体、どこに行ったんだ？ そう思いながら車内を見渡した、その時。

「う……んー……」

接待の声が、車内後部から聞こえた。

急いで一番後ろの席に目を向けると、前の席の背凭れを掴んで、顔をしかめながら起きあがる接待が見えた。

「あ、接待さん！ 大丈夫ですか！」

接待は顔をしかめた。「なぜ、私の名前を？」

そうか、俺が接待に会ったのは不可視状態の時だったからな。知らないのも当然か。

「そんなことより、大丈夫なんですか？」

「ああ……何とか。急にバスが傾きだしたから、急いで一番後ろの窓から外に出ようとしたのですが……失敗して足を滑らせて、一番

後ろから一つ手前の席の背凭れに、頭を強く打ったんです。その後
は……覚えてません。多分、そのまま気絶したんでしょう」「接待は
そう言つて、俺の顔を見た。「で？　ここは天国ですか？　地獄で
すか？」

「はっ？」

「『はっ？』つて、言われても。まず、私は死んだのしょう？」

接待が今の状況を誤解していることが、ようやく分かった。俺は
ニツコリとできる限り微笑んで、言った。

「大丈夫ですよ。助かりました。生きてます」

「はっ？」今度は接待が言った。

「本当ですよ。何なら、窓の外を見てください」

接待は、初めて車窓から外を見た。途端に、目を見開いて驚愕の
表情になり、そのまま硬直した。数分してから硬直が解けると、接
待は何度も首を横に振り、もう一度外を眺めた。その間、一言も発
さなかった。

「そんな……そんな」十数分後、やっと接待が言った。声が震えて
いた。「生きて……るのですか、私は。あんな、死亡間違いなしの
状態で、生き延びたのですか」

「生き延びたんですよ」俺は頷いた。「外に出ましよう」

接待は足が震えていて、フラフラと危なっかしい足つきになって

いた。それでも何とか立ち上がり、窓から這い出た。

途端に、ワツと、車道の向こうのほうで歓声が起こった。そして、ドドドドド、とマスコミと警察がこっちに向かって走ってきた。俺が窓から出る頃には、マスコミは既にバスのところに到着していて、俺に向かってマイクを向けていた。警察がそれを、懸命に押さえ込もうとしていた。接待は、警察に無事保護された。

「すみません、あの、すみません、あの」俺にマイクを向けているリポーターらしい男が、言った。「ええと、あなたは一体、誰なのですか。その、壁をすり抜けたり、手から風を出したり、でもって落ちたバスを浮かせたり」

他にもリポーターは居たが、皆同じような内容のことを言っていた。リポーターの近くに居るカメラマンが、カメラを俺に向けていた。

まずい。死んだはずの俺がテレビに映っているところを、私市達以外の知り合いに見られたら大騒ぎだ。俺は慌てて、全身を不可視状態にした。

「あれ、ちょっと、どこへ行ったんですか」リポーターは口々に喚き始めた。不可視状態になれたらしい。

俺はそのまま上空に浮かぶと、乗客達が全員無事に警察に保護されたのを確認して、舞手神社へと向かった。

「素美代っ！」

接待はバスから数十メートル離れたところにあるベンチで、娘の素美代と妻を発見した。二人のそばには警官が居た。妻は心底安堵した表情をしていたが、素美代は妻の膝を枕にして、眠っていた。

接待はベンチに駆け寄った。「素美代！ どうしたんだ？！」

「大丈夫よ、あなた」彼の妻が言った。「バスが落ちた時に、気絶したの。きつと、もうあなたは助からないと思ったのね。それで凄いショックを受けちゃったみたい」

「じゃ、じゃあ、怪我をしてるとか、そういうわけじゃないんだな？」

妻は微笑んだ。「ええ」

接待は大きく息を吐いた。「よ、よかった……」

そばに立っていた警官が、二人に言った。「すみませんが、事情聴取を行いたいと思いますので、署のほうまで来てくれませんか？」

「分かりました」接待はそう言うと、素美代の肩を掴んで揺すった。「起きなさい」

数回揺らすと、素美代はゆっくりと目蓋を開けた。

「起きたか！ 素美代、お父さんはな、助かったんだぞ！」

「……………」

「大丈夫だ！特に大きな怪我もしていない。これからも、一緒に居られるぞ！」

「……………」

素美代の反応が、一切なかった。子供にあるまじき、完全な無表情だった。妻が心配になって、言った。

「素美代？」

途端に素美代は、はっとしたような表情になって、言った。

「な、何かの、母上？」

大人びた口調だった。心なしか、声も少し低くなっていた。

「はっ？」「接待と妻の声が、ピッタリ重なった。

「あ、いや、その……」素美代は咳払いをした。「こ、この前お侍

さんが出てきた、ドラマの真似」口調と声は、完全に元に戻っていた。

「な、何だ……ドラマか……」接待は思わず、安堵の息を吐いた。「にしても、上手かったなあ、今の。大人の女性、って感じがしたよ」

「まったくだわ」妻も同調した。

「それよりも、ほら！ お父さん、助かったんだぞ！」

接待がそう言うと、接待の顔が喜びで満ち溢れた。

「本当？！ もう駄目だと思ってたけど……」

「ああ、大丈夫だ！ 何と言ったかな……」接待は暫し顎に手を当てて考え、「あ、岡田さんだ！」と言った。

「いやあ、不思議な能力を持っている人でな……落ちたバスを、何と、浮かして、車道まで持ち上げてくれたんだ！ 確か、この山の守り神だって言ってたな……いやあ、神様って本当に居たんだなあ」

興奮して早口で捲くし立てる接待とは対照的に、素美代は黙り込んでしまっていた。

また妻が心配して、言った。「素美代？ どうしたの？」

「あ、いや、別に」素美代は慌てて言った。「そうだ！ ねえ、この山の神様なら、神社に居るんじゃない？ 今度、お礼言いに行こうよ……」

「ああ、そうだな」接待は頷いた。「明日にでも行こう。ええと、舞手神社か……そう言えば、あそこの巫女さん」接待は視線を宙にさまよわせた。「えーと、榊原さんだったかな、彼女を乗せたことがあったなあ。あれはいつだったか……ま、いいか。明日行った時に、色々とお詫びしなきゃならないなあ。ちょっと失礼なことを言っただから……」

素美代はさっきのような、大人びた表情になって、低く呟いた。「にしてもまさか、舞手山にこんなに近い人物へ転成するとは……これも何かの因縁かの」

「え？ 何て？」妻が訊いた。

素美代は慌てて、表情を年齢相応のものに取り繕って言った。「いや、何でも」

岡田直己と接待素美代

「ちょっとくらいは、俺の活躍が載ってもいいと思うんだがなあ」

俺は今朝の朝刊の一面を見ながら、思わずそう呟いた。一面には、【国道五百八号線 舞手山内でバス転落事故 奇跡的にも死亡者はゼロ】と言う見出しと、バスが例の国道から車体を半分ほど中空へ突き出しているのを撮影した写真が掲載されている。

昨日助けたバスの乗客達や、助ける様子を目撃していたマスコミや警察官、野次馬は、山から出た途端に俺の存在を忘れてしまったようだった。俺の活躍はなかったことになっている。バスは崖から転落し車体に大ダメージを負ったが、奇跡的に大破も炎上もせずに着地し、救出が遅れ中に残り残されていた乗客（接待一郎のことらしい）は無事に脱出できた、とその記事には書かれていた。……俺みたいな神様という存在が世間にバレないようにするためのシステムとは言え、「岡田直己」の「岡」の字も新聞に載らないのは、気に食わない。

「まあ、仕方ありませんよ。そういうシステムなんですから」俺の呟きを聴いた、榊原が言った。

「システムなのは分かるけどさ……」

「そのかわりと言ってはなんですが、舞手神様の恩恵を受けた者はたとえ、助けられたということ自体を忘れていても、九死に一生を得たことを舞手神様に感謝するようになっていきます。ですから、ほら、多分今日の参拝客の中にも、この間救出した方達がいらっしやるのではありませんか？」

「え、マジで？」

俺は慌てて社務所を抜け出て、参道上空に浮遊した。舞手神社には、一日で何百人、もしくは何千人と言う数の参拝客が訪れる。参道は人で一杯になっていた。

「やっぱ、この人だからの中から見つけるのは無理だよなあ……」

俺は溜め息を吐いて、社務所に戻ろうとした。が、その時。

「あ！ 岡田様ーっ！」

元気な、女の子の声がした。

参道を見渡すと、こつちを向いて大きく手を振っている素美代と、怪訝な顔をしながら素美代を担いでいる接待が目に入った。

「岡田様ってばーっ！」

……ヤバい！ 素美代は靈感があるから俺が見えるらしいのだが、生憎俺は今、一般人には視認できない状態になっている。このままだと、素美代が変な奴認定されてしまうぞ……実際、他の参拝客が怪訝な顔で素美代を見上げているし。

「ちょ、ちょっと待って！」

俺は素美代にそう言うと、社務所に戻って実体化し、更に浄衣からラフな服装（榊原が買ってきてくれた）に着替えて、社務所の扉を開けた。

と、いきなり腹に衝撃を受けた。

「ぐえっ！」

「岡田様っ！」

素美代が抱きついてきたのだ。俺はそのまま押し倒され、三和土に頭を打った。

「痛えっ！」

人生初の「押し倒され」が幼女だなんて……。

「大丈夫？」素美代は未だに馬乗りになったままである。

「そ、そこどいて！」

「はいっ」「腹の上から重みが無くなった。

「まったく、いきなり抱き……っ……っ」

途中から、声が出なくなった。
なぜならば。

顔面蒼白で俺を見つめている、接待と目が合ったからである。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」ど……………」ど……………」これは俺。

「……………」ど……………」ど……………」これが接待。

「なるほど、ではあなたは、榊原さんの遠い親戚なんですね！」

あの後、すぐに接待を大広間に連れて行って、色々な誤解を解いた。素美代が俺に抱きついてきたのには、「この前迷子になっていた時に助けてあげたら、懐かれた」と言う理由を付けた。

すると、俺の素性について訊かれたので、とっさに「この神社の神主と禰宜と巫女をやっている榊原家の遠い親戚の、岡田満郎」と言うことにしたのである。

「はい、そうです」

「ん？ そう言えば先程、素美代があなたのことを様付けで呼んでいましたが……………」

「っ！ ……ふ、ふざけてね、『岡田様って呼んでくれ』って言うたらね、本当に呼ばれちゃったんですよ！ あっはっはっは……」

「そうなんですか……」

ホッ。何とか誤魔化せた。

と、いきなり大広間の襖が開いて、向こう側から誰かが飛び出てきた。

「岡田様ーっ！」

素美代だった。

「ちょ、素美代さん！」 榊原が、慌てて素美代を注意したが、もう遅い。既に素美代は、俺のところに飛び込んできていた。

しかし、俺とて同じ轍は踏まない。

「ほっ！」

「あっ！」

素早く後ろに退いて素美代のタツクルをかわした。「はっはっはっ、まだまだ行動パターンが安直だな！」 腰に手を当てた。

「うっ、み、見事な身のこなし……あ、そうだ」素美代は立ち上がると、俺に近寄ってズボンの裾を引っ張ってきた。「ねーねー、岡田様」

「ん？」

「ちょっと、榊原さんも交えて、三人だけで話したいことがあるんだけど……いいかなあ？」

「別にいいけど」

「やった！……と言っわけでお父さん、大広間から出てくれる？
手水舎で待ってて！」

難しい単語知ってんなあ、おい。

「ああ、分かった」接待はそう言い、大広間から出ていった。大広間は、俺と榊原と素美代の三人だけになった。

「じゃあ取り敢えず、二人共私の前に座って！」

俺は素美代の前に胡座を掻き、榊原は正座した。すると、素美代も同じように正座した。

そのまま十秒ほど、場を沈黙が支配した。一体何の話なのか、早く聞かせてくれよ。俺がそう心の中で呟いて、俯いた、その時。

「……久しぶりじゃのお。榊原。岡田」

どこかで聴いたような口調が、耳に入った。

思わず顔を上げた。目を見開いているのが自分でも分かる。榊原も、同じような形相で素美代を見つめているに違いなかった。そのままの姿勢で硬直していると、素美代が口を開いた。

「……何じゃ。いきなり固まりよって」

間違いない。あの口調は、素美代から発せられていた。

俺は啞然として、何も言えなかった。そのかわりに、榊原が震える声で言った。

「も……もしか、岳野様……？」

素美代は頷いた。「いかにも、岳野妙子じゃ。もつとも、それは前世の名前じゃがな。現世では、接待素美代と言う名前を授かっている」

「輪廻……転生か……」俺は呻いた。誤解しないでほしい、岳野との再会を残念がっているのではなく、あまりの展開に驚いているのだ。

「そうじゃ」と素美代。「輪廻転生は、生まれる先の次元も、世界も、そして時代も完全にランダムじゃが……まさか、地球の、日本の、しかも自分が成仏した頃の時代に生まれるとはのお……まったくもって予想外じゃ。何億分、いや兆分の一の確率じゃぞ」

「来世を予想してたのか」

「言葉の綾じゃ」素美代は苦笑した。

「しかし、岳野様……いや、接待様」

「様は要らぬ。妾はもう一般人じゃ」

「では、接待さん。いつ、前世の人格がお戻りになったのですか？」

「昨日の、バス転落事故の時のう。ほら、最後にバスのバランスが崩れて、落ちていったじゃろう？ あれで、もう父上は助からないと確信したんじゃない。まあ、実際には助かったがな。ありがとう、岡田。やはり、お主を舞手神にして正解じゃったわ」素美代は俺のほうを向いて、頭を下げた。

「あ、どうも」俺も頭を下げた。

「それで、父上の死亡を確信したら、急に気が遠くなったのお……多分精神的なショックで気を失ったんじゃないだろうな」

「随分と客観的だな」俺は苦笑した。

「まあ、妾の中には岳野妙子と言う前世の人格と、接待素美代と言う現世の人格が混在してる状態じゃからな。簡単な話、二重人格じゃ。客観的になってしまうのも仕方ないであろう。あ、それと、接待素美代の人格の時は、お主にベツタリと甘えておるが……あれは仕様じゃ、体が勝手に動くのじゃ。誤解するでない、決してお主に好意があるわけではないぞ」素美代は一気に言った。

「ツンデレかあ」

「ツンデレでしょうねえ」

俺と榊原の意見が、見事に一致した。

「ツンデレではないぞ！」素美代が顔を真っ赤にして反論した。

「じゃあちよっと、素美代の人格になってくれるか」

「なぜじゃ」

「いいから」

素美代は腑に落ちないようにしているものの、首を縦に振った。そして、うなじをトンと叩いた。

と、途端に。

「岡田様ーっ！」

素美代が俺に抱きついてきた。

「ぐえっ！」俺は押し倒され、畳に頭を打った。

榊原が、俺に抱きついたままの素美代のうなじを軽く叩いた。すると。

「っ！ わ、妾に抱きつくでなあああああいつ！」

素美代は岳野の人格に戻って、俺から飛び退いた。飛び退く直前、俺の腹を右足で思い切り踏んづけた。

「ぐふ」変な声が出た。俺は踏まれたところを押さえながら立ち上がり、「何すんだああっ！」と素美代を怒鳴りつけた。

「何すんだもなにもないじゃる！ まったく、油断も隙も……まさか岡田が幼女趣味じゃったとは」

「違ーよ！ 俺はロリコンじゃねえんだよ！」

「じゃあペドフィリア」

「そのやり取りは既に榊原と数回やってるんだよおおおっ……！」

む、と素美代が唸った。

「って言うか！ そもそもお前から抱きついてきたんだろうが！」

「何を言う！ 抱きついたのは素美代の意志であって、妾の意志ではないのじゃ！」

「知るかよ、んなもん！ って言うか、素美代人格の行動を抑制するとかはできないのか！」

「なぜか岡田に甘える行動だけは思いどおりにならんのじゃあ！」

「なるほど、これは新しいタイプのツンデレですね」と榊原。「二重人格デレとでも言いましょうか。即ち、岳野さんの時がツン、接待さんの時がデレ。そして、人格はうなじを叩くことによって交代するようですね」

「そういうことじゃ！ ……って、結局妾はツンデレと言うことになつておるではないか！ 阿呆っ！」素美代が榊原の頭を叩いた。

「きゃっ……」

「榊原！ 素美代を拘束してくれ！ 俺はその隙にうなじを叩く！」

「分かりましたあ！」 榊原が素美代の体を抱きすくめた。

「わっ！ む、胸が……」

榊原の双丘に顔を埋める素美代。羨ましい……じゃない、早くうなじを叩かなければ！

「よっ！」

俺は素美代のうなじを、軽く叩いた。

すると、素美代がさっきよりも激しく暴れ出した。榊原が手を離すと、素美代は真後ろ、つまり俺のほうを振り返り、俺に抱きついてきた。

「とーっっ！」

「ぶへっ！」 情けない声が出た。俺はそのまま、素美代に押し倒された。

そして何と、素美代が俺に頼ずりをしてきた。

「えへへへ、岡田様あ〜」

甘え過ぎだろうがあああつ！ 大体、何でこんなに甘えるんだ？！

「多分、岡田様が接待さんのお父さんを救ったことで、慕われるようになったんだと思いますよ？」

「表情から俺の心を読むな！ それと冷静に分析するな！ 榊原あ！ 早く素美代をどかせえ！」

「え、でもロリコンの岡田様にとっては、まさに至福の一時なのでは……」

「俺はロリコンじゃねえよ！ まだその疑惑続いたのかよ！ とにかく！ 早くどかせえーっ！っ！っ！」

榊原に向かってそう怒鳴った、その時だった。

「ど、どうしたんですか?!」

大広間の襖を開け、接待が部屋の中に入ってきた。そして。

絶句した。
当然だろう。

我が娘が、若い男の体に頬ずりをしていたのだから。

「……………」

と、接待の体がゆっくりと前傾していき、頭から畳に倒れ込み、ドタツと言う音が鳴った。

「あ、接待さん?! 大丈夫ですか?!」

榊原が必死に接待の体を揺するが、反応はない。

……目を覚ましたら、もう一度誤解を解かなければ。

岡田直己と接待素美代（後書き）

これから少し、更新が遅れるかと思えます。ご了承ください。

岡田直己と地下街火災

「死んでますよ」

榊原が、冷たい声で俺に言った。
俺は蒼白になった顔を、横に振った。現実を受け入れたくなくなっ

ただ。だが榊原は、非情な目で、相変わらず宣告してきた。

「ですから、死んでますよ、それ」

「馬鹿な……馬鹿な」俺はやはり、頭を横に振った。「死んでなどいない。死んでなどいない。生きてる。まだ生きてるんだ……」

「もう、事実を受け入れたらどうですか」榊原が哀れむような目つきで見つめてきた。「だってもう、目も一つ潰されてるんですよ？」

俺は呻いた。「目の一つが……何だっつてんだ……」

榊原の唇が激しく震えた。往生際の悪い俺に、腹を立てたのかもしれない。また、いつまでも現実を受け入れない俺に、失望したのかもしれない。一体どっちなのかは、俺には想像もつかない。

やがて榊原は、ゆっくりと口を開いた。

「ですから、死んでますっつてば。何せ」

「私が殺したんだから」

俺は唸った。「なぜ……なぜ殺した……」

「鬱陶しかつたんで、それ。わざわざ壁を作ったのに、それを切つてまで侵入してきた……まあ、そうですね」榊原は、普段より少し凶悪な顔つきになった。「生かしては、おけないな、と」

俺は握り拳を作った。その拳が激しく震えた。畜生、と絶叫したくもなかった。

「助けなきや……」

数秒経って、言えた言葉がそれだった。

「助けなきや……いけないんだ……」

榊原が呆れたような視線を俺に向けた。「助かりませんよ。もう、助かりません。手遅れです。生き延びる手段など、ないのです」

「その、黒石の集団は」

榊原が囲碁盤上を指差した。指の先には、榊原の地がある。白石で、盤の約四分の一を占めていた。そしてその地に、俺の黒石が侵入していたが……もう、その黒石も全て取られてしまうのだ。榊原に。

ただでさえ地が少ないのに、こんなところで大量の黒石を取られてしまうわけにはいかない。何とか、生き延びさせなければ……でも、もう目は作れないしなあ。くそっ……。俺は俯いて考え込んだ。

「……投了、と言う手もありますよ?」

榊原がそう言った。俺は頭を上げて、榊原の顔を見た。やはり、

小悪魔的な、魔性の表情を浮かべていた。

「畜生……」

何か、何か手はないのか。目は二つ作っていたのを、一つ潰されてしまった。このままでは、終局時に石を取られてしまう。しかし、もう一つ目を作るのは難しい。これはと言う手を思いついても、それらは既に数手前で榊原の白石によって封じられていることに気づくのだ。くそっ、何か手は……。

必死に、黒石を生き延びさせる術を考えていた、その時だった。

ピーーーーーー、と脳内で、ブザーが、それも今までに聞いた中で一番甲高い、不快感さえ誘発させるようなものが鳴った。音はかなり大きく、一瞬、鼓膜が破れるかと思うほどだった。

俺は驚いて、摘んでいた黒石を落としてしまった。

「あ、岡田様、ズルはいけません」と榊原。「ズレちゃったじゃないですか、石が」

俺は榊原に言った。「今、頭の中で変な音がした。ピーーーーー、ってかなり甲高い音が。あれは何だ」

榊原は驚愕で目を見開いた。「それはですね、火災が発生したことを知らせる音です」

「火事だ?! よし、悪いが行ってくる!」

「お気をつけて」榊原は頭を下げた。

俺は「火災発生地点」と念じた。すると、頭の中で舞手山全体の

立体地図が構成されて、その一部分が赤く光った。俺はその場所を確認すると、タイマーを止めてから社務所を抜け出て、その地点へと向かった。

「あ、見えました」

俺のすぐ横を飛んでいる池田が、前方を指差してそう言った。彼女は本来、池の守り神なのだが、こういう火に関する災害が起きた場合は、彼女自身が水を操る能力を持っているので、積極的に鎮火へと向かうのだそうだ。同じように、洲崎姉妹も別方向から発生地へと向かってきているらしい。因みに、池田は俺から誘ったのではなく、途中でたまたま合流しただけである。相変わらず、体操服に短パンと言う出で立ちだった。

池田の指差す先には、大勢の野次馬が居た。消防や救急はまだ到着していないようである。渋滞が何かだろうか。そしてその野次馬は、一つの建物を取り囲むように群がっていた。

建物には、「舞手山麓駅」と書かれていた。

「駅舎が火事なのか？」と俺。「でも、それにしても火がまったく噴き出ていないが……」

「でも、黒煙は駅舎から立ち上ってますしねえ」池田が駅舎を見ながら言った。俺も見たが、背景の夜空のせいで、黒煙が分からない。

「取り敢えず中に入って、煙の出所を調べましょう」

池田はそう言うと、駅舎の中に抜け入っていった。俺も慌てて、池田の後を追った。

駅舎の中には、煙が充満していた。だが、客の避難が素早かったおかげか、煙のせいで通路に行き倒れている人間は居なかった。念のため、駅舎全域をサーチしたが、そういう人間は一人も居ないようだった。

俺達は、駅舎の中を煙が濃くなっていく方向に進んでいった。煙で視界が遮られ、見えにくくなったことも何度かあったが、「煙を透視」と念じることですぐに見えやすくなった。

暫く進み、俺達は煙の出所を特定した。俺達はそこを眺めながら、言った。

「これは……ヤバいんじゃないか？」

「ええ……かなり危険な状態です」

舞手山麓駅には巨大な地下街があり、「Maute City」と呼ばれている。そしてその地下街へ続くエスカレーターの下から煙が立ち上っていたのだ。試しに、エスカレーターの下を覗いてみると、ごうごうと音を立てて燃え盛る、地下街通路が目に入った。まるで、木造の建物が燃えているかのような勢いだ。スプリンクラ―は、壊れてしまったのか、全く作動していない。

俺はすぐに、地下街に要救助者が居ないかどうかサーチした。そして、発見した。地下街最下層の地下六階の一番隅にある部屋に、一人だけだが、逃げ遅れた人間が居たのだ。幸いにも、部屋の中は燃えておらず、その人も怪我などをまだ負っていないらしい。

だが、このままでは、この人はいずれ、酸欠が大火傷かで死亡してしまう。早く助けないと。

俺は池田に言った。「一番下の階に人が居る！ 助けに行くぞ、急げ！」

「はい！」

池田は返事をする、すつと地面に溶け込んでいった。一瞬ぎよつとしたが、体を物質透過状態にして地面をすり抜けただけだと、すぐに分かった。確かに、そっちの方が大分ショートカットになる。俺も体を物質透過状態にすると、地面をすり抜けた。

俺はすり抜けながら、洲崎達にテレパシーを送った。

（銀善！ 美瑛！）

（わっ?!）

（な、何だっ?!）

テレパシーをしたことはないらしく、二人は戸惑っていた。

（俺だ。岡田だ。今、舞手山麓駅からテレパシーを送っている。火事が起こったのは駅の地下街で、最下層の隅の部屋に要救助者を一人だけ発見した。俺と池田が救出に向かうから、お前らは駅に着いたら、地下街の中の火を片っ端から消していけ）

（（分かりました!））二人が同時に送ってきた。俺はそれを聴くと、交信を中断した。

交信が終わると、もう六階に到着して、俺はさらに下へと潜っていこうとしていた。俺は慌てて、地面から顔を出した。

池田が呆れた顔をして言った。「何してるんですか」

「いや、何でもない。早く行くぞ」

俺はそう言うと、先頭に立って廊下を飛び始めた。要救助者の居る部屋まで、丁度三百メートルあった。地下六階の廊下では、まだまだ炎が燃え盛っている。むしろ、地下一階よりも火の勢いが強いような気がした。

僅か数秒で、要救助者の居る部屋に到着できた。部屋に続く扉の前では、巨大な炎が轟音を立てて燃えている。これじゃあ、外に逃げたくても逃げられないわけだ。

「池田！ 扉の前の火を！」俺は池田に命じた。

「分かりました！」

池田は頷くや否や、片手を火に向かって突き出した。すると、その掌から水流が発生して、炎に直撃した。炎は見る見る内に小さくなっていき、十数秒で完全に消えた。

俺は扉をすり抜け、部屋の中に入った。部屋は従業員の控え室として使われていたようだった。片隅には横長テーブル、その上にパソコンが一台と何らかの書類の束が複数置かれている。そして部屋の中心には、椅子が倒れてあり、そのすぐ傍に洋服店の制服を着た、店員らしい女性が横たわっていた。結構若く、黒縁の眼鏡を掛けている。

「大丈夫ですか！」俺は女性に駆け寄り、叫んだ。

「う……う……うっ」幸いにも、女性は呻きながら目を覚ましてくれた。床に手を付き、上半身を起こした。「あなた達は……」

「俺は岡田と言います。こっちの体操服の女の子は」俺は池田に掌を向けた。「池田です。俺達は、あなたを助けにきました」

「助けに……？」女性は目を輝かせた。「鎮火したの？」

「いえ、まだ燃えています」

女性の目から輝きが失われた。「無理よ。あなた達、どうやってここまで来たのか知らないけど……各階の惨状は、目にしたでしょ？ あんな、炎が燃え盛ってる通路を、どうやって進むのよ？ スプリンクラーでさえ、壊れているのよ？」

「とにかく、俺達に任せてください。早く脱出しましょう」俺はそう言って立ち上がった。そして扉に近づこうとしたが、「あ、そうそう」と言っ、一旦女性のほうを振り向いた。

「あなたの名前は？」

「名前……あ、下地と言います」

「下地さん、ですか」俺は頭をゆっくり縦に振った。

俺は扉に近づいて、ノブを回し、引っ張ろうとした。だが、高熱で変形してしまったのか、扉は開かなかった。俺は仕方なく、突風

を扉に浴びせた。扉は甲高い金属音を立てて、遙か彼方に飛んでいった。

啞然として俺を見つめている、下地さんに言った。「行きましょ
う」

「あ、はい、はい」下地さんは立ち上がった。

「念のため、ハンカチで口を押さえといてください」

「わ、分かりました」

俺達は部屋から脱出した。取り敢えず、一番近くの階段に行つて、そこから地上まで上らなければならない。幸い、酸素は薄いながらも僅かに残っているようで、下地さんはふらふらになりながら歩くことができた。

道中の炎は、全て池田が放水して消し去った。また、落盤によつてできた瓦礫は、俺の突風で横に吹き飛ばした。下地さんはそんな俺達を見て、最初は驚愕していたが、徐々に慣れてきたようで、いちいち目を見張ることもなくなった。

数分掛けて、階段に到着した。やはり階段の途中にも、炎や瓦礫はあった。俺と池田は先頭に立って、下地さんを誘導した。

階段を駆け上がり、地下五階まで来た時だった。急に、砂のような粒子状のものが、頭上から降ってきた。

「危ない！」

俺はすぐに危険を察知して、その場から飛び退いた。一瞬後、轟音と共に天井が崩落し、目の前に降ってきた。

「きゃっ?!」

「わっ?!」

十数秒掛け、天井の破片は堆積した。幸いにも、下地さんに怪我はなかったが、行く手を塞がれてしまった。落盤が広範囲に亘って起こっていて、突風でも吹き飛ばせそうにない。この細い階段内で無理矢理吹き飛ばしたりすれば、余計に道を塞ぐだけである。

この階段は、もう使えなくなってしまった。俺は脳内で「地下街の中にある、地上へと続く階段の位置」と念じた。すると、地下街の立体地図が一瞬で構成され、地上へ繋がる階段やエスカレーターが赤く光って表示された。結構な数があったが、再び「現在、岡田直己もしくは池田通子の能力を用いても通行不可能なものを除く」と念じると、赤い光の四分の三はフツと消えてしまった。

「一番近いのは……ここから西に六百メートル! 行くぞ、池田! 下地さん!」

「は、はい!」と下地さん。

「はーいつ」と池田。

俺達は地下五階のフロアに出ると、通路を西に向かって走り始めた。もつとも、下地さんが大分疲れていて速度が出ないために、ほぼ歩いているような状態だった。道中の火を消化しながら暫く走ると、目的のエスカレーターが見えてきた。無論停止しているが、階段としては使えるだろう。

エスカレーターに向かって進行方向を変えた、その時。

またもや、轟音が響いた。

「のわああっ?!」

「きゃああっ?!」

「うわわわっ?!」

ズガラズガラズガラズガラ、ゴリゴリゴリゴリ、ベリベリベリベリ、ヴァチヴァチヴァチヴァチ、その他描写不可能な擬音と共に、天井が崩落した。梁や鉄パイプやその他資材が、俺の体を貫通していった。砂のような粒子がたくさん降ってきて、視界が大分遮られたが、一本の太い梁が下地さん目掛けて落下したところは見えた。

「きゃあっ!」

「下地さん!」

俺は風で粒子を吹き飛ばし、視界をクリアにした。下地さんは、梁の下敷きにはなっていないものの、右臍を梁に挟まれていた。

「だ、大丈夫ですか! 畜生!」

俺は梁の下部に二箇所、強い上昇気流を発生させ、梁を持ち上げようとした。しかし、駄目だった。梁の、丁度脚が挟まっている部分の上には何も載っていないものの、梁の両端には、まるで梁を上から押さえつけるかのように、瓦礫が大量に堆積していた。

「岡田様! ちょっとどいてください!」

苦戦していると、横から池田が叫んできた。俺は言われたとおり

に、その場から退いた。

池田は俺のかわりに下地さんの前に立つと、両手を梁に向けて突き出し、拳を作り、人差し指だけを立てた。すると数秒後、指先から細い水流が発生し、梁に直撃した。

そして何と、その水流は梁を貫通した。俺が唾然としているのを余所に、池田は手を動かして水流を上下させた。数分後池田は、梁の、下地さんの脚が挟まれている部分だけを、取り出すようにカットした。いわゆる、ウォーターカッターと言う奴か。能力を応用すれば、こんなこともできるんだな。

「岡田様！ あの部分だけなら、吹き飛ばせるでしょう？」

「え？ ……あ、ああ、なるほど！」

俺は池田がカットしたところの下部に、上昇気流を発生させた。たちまち、その部分は浮いた。俺は浮かせたそれを、適当にその辺りへ放り投げた。下地さんの脚が、自由となった。

下地さんの脚は、見るからに腫れていた。どうやら、骨折したようだった。一瞬、抱えて運ばなければならぬかと思っただが、よく考えたら、俺には負傷者を治療する能力もあるのだ。

俺は右手を、下地さんの脚に翳した。途端に、脚が数秒間、真っ白な光に包まれた。発光が終わると、脚はすっかり治っていた。下地さんは、目を見開いて驚いていた。だがもう、超常現象には慣れてしまったのか、何かと訊いてくることはなかった。

俺達はその後すぐ、エスカレーターを駆け上り、地下四階に到着した。今までに蓄積された疲労のためか、また酸素が薄くなってきたためか、下地さんの動きがさつきより格段に鈍くなっており、結構な時間が掛かった。

エスカレーターは途中で破壊されて落下しており、三階に続く、

エスカレーターが通っていた穴も大量の瓦礫やら何やらで塞がれていたため、また別の階段を探すことになった。つたく、どんだけ脆いんだよ、ここは！

脳内地図で使える階段を検索してみたが、赤い光はあと二つだけになってしまっていた。俺はその内の、一番近い方の階段を選んだ。

「ここから北に八百メートルか……」

実際は通路が入り組んでいて、八百メートル以上あるようだが。

「よし、十三番階段に行くぞ！」

「はい！」「下地さんと池田は、同時に返事をした。」

俺達はエスカレーターから離れて、その十三番階段に向かって走り始めた。いつ、階段が使用不可能になってもおかしくなかった。文字どおりの、全力疾走をした。まず池田が先頭に立ち、大量に前方へ放水して、その後を俺と下地さんが付いていくという形になった。

そして、百メートルばかり走りきった、その時だった。

急に、轟音が辺りに響き始めた。それは、今までに聞いてきた、天井が崩落する直前のものと一致していた。粒子状の物質が、天井から大量に降ってきた。しかもそれは、辺り一帯の天井から落ちてきていた。

まずい。

「突風う！」

俺は両手を天井に向けて突き出し、そう叫んだ。次の瞬間、今ま

さに、一気呵成に崩れ落ちてこようとしたり、ここから前後に百メートルに亘る、合計二百メートルの天井が空中で停止した。言わずもがな、突風で浮かせたのである。

俺達はそのまま百メートルを駆け抜けた。俺は天井の大規模崩落地帯から抜け出すと、突風を解除した。鼓膜を破るような音と共に、天井が崩落した。

神様になっても、轟音が耳を直撃するのは苦痛になるようだ。俺達は両耳を塞ぎながら、地下三階へと駆け上がった。残念なことに、さっきの天井大規模崩落のためか、二階へと続く階段は大量の瓦礫で埋没していた。

俺は圧力で変形した扉を突風で弾き飛ばし、地下三階へ飛び出しながら、脳内で「現在使用可能な階段の位置」と念じた。途端に、立体地図が現れて、幸いなことに一箇所だけが赤く光った。俺は更に、「地図の視界内表示」と念じた。すると、レーシングゲームのメーターもしくはコースマップのように、小さな立体地図が視界の右上隅に表示された。

階段は、今居る場所から、目の前の廊下を二百メートル直進したところにあるようだった。池田が先頭を切って走り出し、俺と下地さんはその後を付いていった。

だが、階段まで後数十メートルと言うところに来た時だった。突然、下地さんが左方に大きくよろめくと、そのままバタリと倒れてしまった。

「し、下地さん?!」

な、何があつたんだ?!

俺は下地さんに手を向けて、「この人物の今の状態」と念じた。すると、脳内に赤いゴシック体で「酸欠」と言う大きな文字が浮か

び上がった。

「酸欠だと？」

ど、どうすればいい？ ただの外傷なら俺の能力で治せたが、酸欠の場合、周囲で不足している酸素を増やさなければならぬ。そんな能力、俺にはないぞ？

戸惑っている間にも、下地さんの呼吸は乱れ、心拍数も上昇し、脈も不規則になっていく。こうなったら、急いで地上に運ばなければ、と思った、次の瞬間。

「お、岡田様っ！」

池田の、悲痛さを感じさせる叫び声が聞こえた。

池田のほうを見ると、彼女は階段を指差していた。嫌な予感と共に階段へ目を向けると、既に階段は消失していて、瓦礫の山へと変わり果てていた。

「畜生っ！」

そして、急いで階段へ駆け寄ろうとすると、いきなり天井が落盤してきた。

「おわわわわっ?!」

テンプレートな崩落音を響かせながら、瓦礫は目の前に山となつて堆積し、階段への道を完全に塞いだ。突風で浮かせようとしたが、重すぎて持ち上がらない。一個一個なら退かすことができるかもしれないが、そんなことをしている余裕はない。

下地さんのほうを見ると、先ほどよりもかなり苦しそうにしてい

た。両手両足が震え、呼吸も大仰なものになっている。いや、本人にとつては、この呼吸で精一杯なのだ。

「くそっ……他に脱出ルートは?!」

俺は脳内で「地上への脱出ルート」と念じたが、どこも赤く光らなかつた。

脱出への道は、完全に閉ざされてしまっていた。
どうすれば、どうすれば……っ、そうだ!

(銀善! 美瑛い! 聞こえるか!)

(聞こえます)

(聞こえますよ)

(今ここに居る!)

(地下二階です。取り敢えず地下一階と、地下二階の四分の三の火は消せましたが、残り四分の一はなかなかしぶとくて……)

(ちよっとお姉ちゃん! 私にも言わせ)

(そこから、地下三階の、俺達が居る所まで来れるか? 実体化したままで)

(え、ちよっと待ってください……無理です、二階への道はどれも完全に塞がれてい)

俺は交信を切った。池田が期待するような眼差しを向けていたが、

俺は彼女に向かって首を横に振った。

「岡田様……どうします？ どうするんですか?!」池田がパニックに陥りながら訊いてきた。

「るせえ!」

俺だって必死に考えてんだよお!

………っ!

「そつだ! 池田! お前の能力で」

俺は池田に、たった今考えついた、浅はかたでも言われそうな「脱出作戦」を伝えた。それを聴き、池田は一瞬だけ啞然としたが、すぐに顔を引き締めて「やってみます!」と叫んだ。

俺は呼吸困難で苦しんでいる下地さんを連れ、池田から数メートル離れた。池田は廊下の中央に経つと、両手を丁度胸の辺りに出して、掌を向かい合わせにし、目を閉じて、何やら集中し始めた。すると、池田の体の周囲に細かい水滴が現れ、それが掌の向かい合う空間に集まり、球体を形成し始めた。いわゆる、「タメ技」と言う奴である。

「………っはあぁっ!」

球体がサッカーボール大になった瞬間、池田はそう叫び、両掌上に突き出した。途端に、掌から極太、直径一メートル弱の水流が発生して、天井にぶつかった。

すると、ゴリゴリゴリ（実際は描写不可能なほど複雑な雑音だった）と言う音が数秒間して、急に途絶えた。だが、一秒も経たない

内に、また同じ音が発生した。そしてその音も突然途絶え、バキバキバキバキと言う何かを折り進むような音も聞こえてきた。音は、僅か数秒で消えた。

そう、俺は池田に、極太のウォーターカッターで、ここから地上まで一本の穴を開けるように頼んだのだ。正直な話、できるかどうかは俺としても半信半疑だったが、何とかできたようだ。

池田は水流を止め、両腕を下ろした。そして、ゆっくりと前傾していき、ついに地面にうつ伏せてしまった。

「い、池田！」俺は池田に駆け寄り、体を抱きかかえた。「大丈夫か！」

「だ、大丈夫ですよ岡田様……」池田はそう言うと、荒い呼吸を整えてから、ゆっくりと起き上がった。見るからに、疲弊していた。

「い、行きましょう」

「あ、ああ……よし！」俺は下地さんを抱きかかえた。

俺と池田はその場から飛び上がり、穴を潜り始めた。猛スピードで潜ったおかげで、僅か数秒で穴から脱出できた。穴は地下街を出た後もまっすぐに貫通していたので、俺たちは結局、駅舎からも出ることができた。

俺は天高く浮かんだまま、抱きかかえている下地さんを見た。酸素はもう満ち足りていて、呼吸も回復するのにもかかわらず、下地さんの両手足はまだ痙攣し、彼女自身は気を失っていた。

「岡田様！ 早く、救急車を！」

池田のその声で、我に返った。俺はすぐさま周囲を見回し、救急

車を発見すると、まず体を実体化させてから、その方向に飛んでいった。野次馬が俺を次々に指差した。

俺は救急車のところに到着すると、こちらを見て肝を潰し、あるいは腰を抜かしている救急隊員の前に降り立った。そして、下地さんを差し出した。

「酸欠で苦しんでいます。早く手当を」

救急隊員は我を取り戻すと、分かりましたと返事をし、下地さんの体を担架に乗せて車内に運んだ。そして手際よく扉を閉め、さっさと行ってしまった。一分にも経たない内に、全てやってのけた。

俺はその場に出たまま、救急車を見えなくなるまで見送った。そして、建物の陰に隠れて見えなくなったので、俺は後ろを振り返った。と、同時に、幾つもの鉄棒が俺の前に差し出された。

よく見ると、それはマイクだった。マイクは、誰かの手に握られていた。手を辿っていくと、スーツ姿の男女や、カメラを抱えた男が目に入った。

「あなた今、空を飛んできましたね」どうやら、リポーターらしい女性が、興奮冷めやらぬと言った感じで言ってきた。「あなた、一体誰なんですか」

「神主の服装ですね。神社の方ですか」

「ひょっとして、神様とか」

「馬鹿か。神様なんて居るわけないだろ」

他のリポーターも、負けじと叫んだ。カメラのフラッシュを焚く

奴まで現れた。

ヤバイ。正体がバレそうだな。まあ、バレたところで、こいつらは山の外へ出た瞬間に忘れてしまうのだが。俺は慌てて、体を不可視状態にすると、一層騒がしくなったTVクルーをほっといて、空中に浮かび上がった。

そしてそのまま、社務所に帰ろうとすると。

「おーかーだーさーまーっ！」

池田の、俺を呼ぶ声が聞こえた。

その場に留まって、声の聞こえた方向に顔を向けると、池田が俺の元に駆け、いや飛び寄ってきた。

「どうした、池田？」

池田は、ニコニコと微笑みながら言った。「ちょっと、池で休んでいきませんか？ 疲れたでしょう？」

俺は首を傾けて、関節を鳴らした。「まあなあ。休んでいくかあ」

「じゃあ、早速行きましようっ」

池田は歌うようにそう言って、空を飛び始めた。俺も慌てて、後を追った。

数分後、奔土池に到着した。さすがに、こんな夜遅くだと、池には誰も訪れないらしく、ひっそりとしていた。池田は池近くの、背の高い木から突き出ている、太い枝に腰掛けた。一瞬、折れないかどうか心配になったが、よく考えれば俺達神様に、体重なんかあるわけがない。俺も安心して腰掛けられた。両足の下に、奔土池の澄みきった水面が見えていた。

暫くの間そのまましていると、池田が話しかけてきた。「助かってよかったですね……下地さん」

「ああ」俺は頷いた。「そうだな」

「……上の階への入り口が、全て塞がれてしまった時、あつたじゃないですか。正直な話、ボクはもう、駄目だと思ったんですよ。もう、この人は助からないと。……今までに何度か、人を助けられなかったことがありますから……」

俺は黙って、池田の話の聴いていた。池田は続ける。

「……でも岡田様は、見事に助けてくださいました。ウォーターカッターで、一階まで通る穴を作るなんて、ボクは全く思いつきませんでした。……ありがとうございます」

俺は驚いて、言った。「何で、お前まで感謝する」

「岡田様がいなかったら、ボクは多分、いや絶対、下地さんを助けられませんでした。ボクの心にも、傷が残っていたことだろうと思います」池田は深々と頭を下げた。「ありがとうございます。凄い、格好よかったです」

「いや、いや」そんな、感謝されてもな。「池田のほうこそ、活躍していたじゃないか。何せ、道中の火を消したのは、全てお前だもんな。こちらこそ、ありがとう」そう言っつて、頭を下げた。そして頭を上げ、池田の頭に手をやり、撫でた。ごく自然の動作だった。

「っ……」

池田は最初驚いたものの、すぐに黙って、撫でられるがままになった。

そしてそのまま、一、二分くらい、撫でていると。

「あーっ！」

美瑛の声が聞こえた。

慌てて声のした方向を振り向くと、ニヤニヤと笑っている洲崎姉妹が空中に浮かんでいるのが目に入った。

「岡田様、大胆ですーっ！」

「あ、いや、いや?!」

よ、よく考えれば、確かに誤解される状況にあるな、俺は!

「違う、違う、違うぞ美瑛！」

「何が違うんですか？」

「そういうことを真顔で訊くなよ、銀善！」

「岡田さんってロリコンだったんですねー? 私も、危ないかもーっ」

「榊原にも数百回言ったが、俺はロリコンじゃねええええええっ！」

「いや、現に、誑し込んでるじゃないですか」

「銀善も美瑛にノるなああああああああ！！！！」

姉妹は相変わらず、俺をニヤニヤしながら見つめてくる。

何で姉妹揃って物好きなんだよおおおおおおお！！！！

池田はと言つと、顔中をそれと分かるほど真っ赤にしながら、「
うっうっ………」と呻いていた。

「ミツちゃん、もし岡田さんに変なことされたら、遠慮なく相談に
来てね？」

「私が、かわつて」銀善は片目で俺を睨んだ。「復讐してやるから
な？」

「てめええええらああああつ！！！」

「……………うん」

「何願いてんだ池田あああああつ！！！」

もう、ロリコン疑惑は懲り懲りなんだよおおおおおおお
おっっっ！！！！！！

岡田直己と地下街火災（後書き）

神原「……………岡田様……………いつになったら帰ってこられるのでしょうか
……………」

池田通子VS接待素美代（前書き）

事情により、「岡田直己と鍾乳洞落盤」を削除しました。

でも、またいつか、話の一部を大幅に改稿した上で、投稿すると思います。

池田通子VS接待素美代

体を揺さぶられて、昼寝から覚めた。

岡田直己がゆっくりと瞼を開けると、その視界一杯に、池田通子の顔が入ってきた。

「……ふああ……」岡田は口を大きく開けて欠伸をすると、言った。「何か用？」

池田は顔を岡田から離すと、背後からボールを取り出し自分の顔の横に持ってきた。「いきなりですけど、もしお暇なら、一緒にサッカーしませんか？ もちろん、試合じゃなく練習ですけど」

「し……」しない、と即答しようとしたところで、岡田は口を噤んだ。果たしてここで池田の誘いを断ってまで、することが他にあっただろうか。どうせこの後も、暇を持て余し畳の上でゴロゴロと昼寝をするだけである。それならば、多少の運動音痴の恥は忍んで、池田とサッカーをしたほうが有意義じゃないのか。

「え？」

「……いや、しよう。サッカーしよう」岡田は上半身を起こした。

池田がにっこり笑った。「ありがとうございます」

「ただし、初めて会った時も言ったけど、俺は運動音痴だから、それは覚悟しといてくれよ」

分かりました、と池田は言い、右手の人差し指を立て、その上でボールを回転させ始めた。

岡田たちは、舞手神社から奔土池に移動した。サッカー自体なら舞手大公園で行える、いやむしろそちらのほうが行いやすいのだが、池田曰く「奔土池のほうが安心できる」のだそうだ。おそらく、奔土池が自分の守護対象地域であるために、安心感が得られるのだろう。そのことは岡田自身もよく分かっていた。彼の場合、山全体が守護対象であるため、どこに居ても安心感は得られる。

当然だが、観光客に迷惑がかからないよう、サッカー自体は池からだいぶ離れたところで行うことになった。

「それじゃあ、まずはパス練習でもしましょうか」サッカーボールを頭に載せた状態で、池田が言った。

「はいよ」岡田もそれに応じた。彼は今、いつもの浄衣ではなく、ポロシャツにズボンという、至って普通の格好をしていた。さすがに、浄衣でサッカーはやりづらだろう、と判断したためである。

岡田たちは、互いに数メートル距離をとった。次に、池田がボールを地面に落とすと、右足を軽く振り上げてそれを蹴る。ボールは数十秒で岡田の元に辿り着き、岡田はそれをトラップした。数秒後、今度は岡田がボールを蹴り、池田にパスした。その繰り返しだっ

た。

そして、パス練習の開始から数分が経過した時だった。

「おーかーだーさーまあっ！」

聞き覚えのある声がした。

次の瞬間、下半身の後ろ側に衝撃があった。

「うわっ！」岡田は思わず叫ぶと、後ろを振り返って下半身を見る。接待素美代が、彼の腹に手を回すようにして抱きついていていた。

素美代は二重人格で、前世の岳野人格と、現世の素美代人格がある。普段は素美代人格で行動し、何か、素美代では対応できないようなトラブルがあった時のみ、岳野人格に入れ替わっていた。

「困りますよ、素美代さん。勝手に走りだされては……」

榊原玉枝の声がした。顔を上げると、ゆっくりと岡田に近づいてくる、私服姿の榊原が目に入った。

「先ほど、素美代さんとはったり出くわしまして……遊び相手も居ないということで、私と一緒に、山内を適当に探索していたのですが……」榊原は岡田と池田を交互に見つめると、ニヤニヤした。「お邪魔でしたね。すみません、すぐ退散します」

「じゃあ私は、ここに残ってる！」素美代が叫んだ。

池田が瞼を半分だけ閉じて、素美代を睨んだ。「岡田様は今、ボクと遊んでるんだけどなあ」口を尖らせた。

素美代も池田を睨み返した。挑発の笑みを幾分か交えて。

「……ま、まあまあ」険悪な雰囲気になり始めていたので、岡田は慌てて言った。「いいんじゃないか？ 遊び仲間は、増えたほうが…… 大人数のほうが、サッカーの練習も楽しくなるだろうし。何より、運動音痴の俺とやるよりも、よっぽどいいと思うが」

池田は大袈裟に溜め息を吐いた。「まあ、岡田様がそう仰るなら」

素美代がガッツポーズをした。

「じゃあまずは、リフティングの練習でもしましょうか」

「でも、ボールは一つしかないぞ」

「なら、岡田様、スミちゃん、ボク、タマちゃんの順でしましょう」

「別にいいが……俺がトップバッター、いやキッカーか」岡田は僅

かに顔を顰めた。「俺、リフティングとか苦手なんだけどなあ」

「まあまあ、まずはやってみてくださいよ」池田はそう言うと、岡田にボールをパスする。「何かアドバイスできることがあれば、しますから」

岡田はおう、と返事をする、ボールを浮かせ、リフティングを始めた。

わずか三回で、ボールは地面に落ちた。

「ああ、畜生」岡田はテンテンと転がるボールを追い、トラップした。「やっぱ、リフティングは難しいな」

「そうですか……」池田は腕を組み、唸る。「もうちょっと、蹴るときにフォームを改善すれば……」

「フォーム、ねえ……」

「そうです、例えば……右足を後ろに上げてください」

岡田は池田に言われたとおり、右足を後ろに上げようとした。

しかし、彼の左足が、いつの間にかやら解けていた右足の靴紐を踏んでいた。

岡田はうお、と大声を上げる。

バランスを崩した彼の体が、足を支点にして前傾し始めた。

さらに都合の悪いことには、岡田の目の前に、池田が立っていた。

「のわー!」

「きゃあ?!」

岡田は池田を巻き込み、地面に倒れた。顔が地面に激突する前に両手を突きだし、腕立て伏せをするような体勢になる。

そして、その両手の間に、仰向けになった池田の、顔があった。

「……っ!」

池田は顔を赤くすると、何やら決心したような表情になった。直後に、唾を飲み込むと、目を堅く閉じた。

「な、なな、何やってるのー!」 静観していた素美代が、突然叫んだ。

「ああ、いてえ……」 池田の行動の意味がまいち理解できない岡田は、そう呟きながら立ち上がる。「大丈夫か?」 池田に手を差し伸べた。

「え、ええ、はい!」 池田は目を開き、岡田の手を掴むと、慌てて立ち上がった。「ボ、ボクは大丈夫です!」

池田はそう言った後、顔を赤くして両手を両頬に当て、うう、とかああ、とか言いながらその場でぐるぐると回り始めた。

池田は咳払いを一つすると、喋り始めた。「えー、先ほどは、お見苦しいところを……」顔を赤くした。

なぜ顔が赤くなったのか分からず、岡田はやや困惑しながら立っていた。素美代は池田に嫉妬するような様子で、榊原はすべてを見守る保護者のような様子で居る。

池田は再度咳払いをした。「と、とにかく！ リフティング練習再開です！ 次は、……スミちゃんだよね」

先ほどのフォーム改善の件を蒸し返したかった岡田だったが、次にリフティングするときには訊けばいいと思い、結局、何も言わなかった。

「じゃあスミちゃん、お願い」池田はそう言うと、ボールを素美代にパスした。

「はい」素美代は返事をしながら、ボールをトラップする。

池田のような、舞手山の地形・地勢神は、素美代が素美代人格のときには敬語を外し、岳野人格のときには敬語を付けるようにしていた。

「せーの」素美代はそう言うてから、「よっ！」と叫んでボールを宙に浮かせた。

落ちてきたボールを蹴り上げようとした足は、ものの見事に空を切り、ボールは着地した。

「あれ？」素美代は首を傾げながら、ボールを再度自分の元に引き寄せ、宙に浮かせた。

しかし今度も、リフティングすることはできなかった。

「……………」素美代は口を尖らせた。

「ま、まあ、ドンマイですよ、素美代さん」榊原がフォローした。

素美代はその後、俯いたまま数秒間、ぶつぶつと何ごとかを呟くと、勢いよく顔を上げて言った。「岡田様！」

「ん？」

「一緒にリフティング練習しましょう！」

「え？二人で？」岡田はしばらく黙り込んでから、「ああ、交互にボールをパスするように、リフティングする奴か。でも、まずは個人でできるようになるのが先決じゃ」と言った。

「それはそうかもしれませんが、二人でしたほうが楽しいですって！」

「で、でも、池田と榊原が」

「大丈夫です！」接待は胸を張った。「私はまだ、一回しかしてないんですよ？つまり、あと二、三回はしてもいいはずですよ。その分を、岡田様と一緒にしよう、というわけです」

「まあ、それはそうだろうな」岡田は頷いた。「そうだろうなあ。うん。よし、しよつ」

素美代は顔に満面の笑みを浮かべた。「ありがとうございます！」
岡田に抱きついた。

少し離れたところで池田が、「うう……岡田様あ……」と涙目で
唸っており、彼女を榊原が宥めている。

素美代と岡田の練習は、十数分で終了した。そして素美代は、池
田にボールをパスした。

「やっと、ボクの番かあ……」右足でボールを押さえつけながら池
田が言う。「待ちくたびれちゃったよ」ちら、と一瞬だけ岡田を見
た。それからすぐ、ボールに視線を戻した。

一秒後、ボールを浮かせて、リフティングを始めた。
右足、左足、右足、右足、左足。足の甲、腿、臍、爪先、足の甲。
普段、サッカーをしているからなのだろうが、池田のリフティング
はとても上手かった。ボールの軌道が常に定まっており、少しもず
れていない。まるで、ボールが自ら池田の脚に吸い寄せられている
かのようである。

このまま永遠にリフティングし続けるのではないか、と岡田が本
気で考え始めた、その時。

池田の体が、がく、と左に大きく傾いた。

「きゃっ?!」

「ど、どうした?!」岡田は思わず叫んだ。

視線をボールから外し、池田の足下に向ける。彼女の左足がついている地面は、右足の地面より三十センチほど低くなっていた。どうやら池田は、段差を跨いでしまったらしい。

崩した体勢を持ち直そうと、池田が四苦八苦しているところに、ボールが落ちてくる。

「とりゃっ!」池田はそう叫んで、せめて最後の抵抗だとも思ったのか、右足でボールを蹴った。

さっきまでのような上空ではなく、斜め約四十五度に向けて、思い切り蹴られてしまったボールは、奔土池のあるほうに向かって飛んだ。そして数秒後に着地し、そのままの勢いで、池に向かって転がり始めた。

「あ、観光客に……」榊原が呟く。ぶつかると続けようとしたのだろうか。

だが幸いにも、ボールは客の間を縫って池に近づいていき、着水する直前、池の縁で停止した。

「取ってくるよ」岡田はそう言って、走ってボールへと近づいていた。

しばらくしてボールに辿り着き、岡田はそれを持ち上げ、後ろを

向き池田たちめがけて蹴った。

ボールは蹴られてから数秒後に失速し、地面につきかけたが、岡田が能力で作った風に載せられ、ふわふわと漂いながら彼女たちの元に到着した。

それを見届けると、岡田も、池田たちの元に帰ろうとした。だが、上げた右足が、地面に向かって引っ張られた。

「うお！」全身のバランスを崩し、岡田は思わず叫ぶ。慌てて足元を見ると、気づかないうちに解けていた右足の靴紐を、左足が踏んでいた。

ゆっくりと、体が後ろに倒れていく。岡田はまるで、辺り一面がスローモーションになってしまったかのような錯覚に陥っていた。さっき結んだはずなんだけど、結び方が甘かったかな。そこまで考えた直後、全身が冷水に覆われた。

叫び声。

鈍い水音。

小さな水柱。

奔土池でこの三つが発生したことに、池田通子・接待素美代の両名は、ほぼ同じタイミングで気づいた。

そして、さつきまでそこに立っていたはずの、岡田直己の姿が消えていることにも。

「お、岡田様あ！」

「岡田様っ?!」

二人はそう叫ぶと、一目散に奔土池へ走っていった。榊原玉枝も慌てて、彼女たちの跡を追う。

駆けつけてみると、首から下を水中に沈めた状態で、岡田が池の底に尻餅をついていた。

「だ、大丈夫ですか?!」と素美代。

「大丈夫、大じょ……」岡田は大きなくしゃみを一つした。「……大丈夫じゃないかも」

「と、とにかく、引き揚げないと」榊原はそう言つと、岡田に手を差し伸べる。岡田はその手を掴むと、彼女に引っ張ってもらい、立ち上がった。それからすぐさま、陸に上がった。

「ああ、寒っ！」岡田はその場に胡座をかくと、両手を激しく擦り合わせ始めた。「秋だつてのに、池へ落ちるもんじゃないな」よく見ると顔が青ざめており、体のあちこちが小刻みに震えている。

「い、出雲に着替えを持ってこさせます」榊原は携帯電話を取り出すと、幾つかボタンを押して、耳に当てる。「もしもし、出雲さん？ 実は今」

素美代と池田は、寒さに震えている岡田のそばに立ち、「大丈夫ですか?」「怪我などは?」と、言葉をかけている。

しばらくしてから、唐突に素美代が「そうだ!」と言い、岡田を抱きしめた。それは、今までの「抱きつく」というよりは「抱きしめる」に近い行為で、岡田の首に両手を回し、彼の体を自分のほうに寄せている。

「な……!」池田は絶句し、目を睜り、無言で口を開閉させる。

「岡田様!」素美代は満面の笑みを浮かべている。「これで、ちょっとは温かくなりましたか?」

普通ならすぐさまどかしそうなものだが、体温の急な低下で思考が麻痺しているのか、岡田は「ありがとう」とだけ言って、素美代を除けようとしなない。

まずい、抜け駆けされた。池田は小さくそう呟くとすぐさま、反対側から岡田にしがみついて、言う。「ぼぼ、ボクのほうが温かいでしょ?」

「な……!」素美代は池田を睨む。「は、離れてください! 岡田様を温めるのは、一人で十分です!」

「す、スミちゃんこそ、離れたらどう?」

「わ、私が最初に抱きついたんですよ!」

「じゅじゅ、順番の問題じゃないもん! 要は、どっちが岡田様をより温められるかだもん!」

「それなら私だって……」素美代は台詞を途中で切り、黙り込んだ。そして十数秒後、再び口を開いた。「じゃあ、ジャンケンしましょうよ」

「ジャンケン？」

「ええ。勝ったほうが岡田様を温められる……ってことで、どうですか」

池田は「いいよ」と即答した。

「分かりました。……じゃあ一旦、岡田様から離れましょう」

素美代はそう言って岡田から十メートルほど距離をとった。池田も同じように、岡田から離れる。その後二人は、互いに向き合い、右手に力を込めた。

「……いいですか？ 最初はグー、ですよ？」

「……大丈夫だよ」

池田がそう言うと、素美代は「じゃあ、始めます」と言った。

「最初は、グー……ジャンケン、ポン！」

二人が、右手を出した。

素美代は握り拳を作っている。

そして池田は握り拳を作り、その人差し指と中指を伸ばしていた。

「……やったああああ！」素美代は右手を上空に突き出すと、そう絶叫した。

池田は啞然とした顔で己のチヨキを見つめながら、膝頭を地面につけた。

「岡田様あ！」素美代はそう叫ぶと、振り返り、先ほどまで岡田が立っていた場所に顔を向けた。

しかしそこには、榊原が立っているものの、肝心の岡田が居ない。

「……あ、あれ？」素美代は榊原に訊いた。「岡田様は？」

「……岡田様なら、体を温めると言って、数分前に社務所へ帰られましたよ」彼女は真顔だったが、苦笑を堪えきれないようで、頬が少し引き攣っていた。「今頃は、お風呂にでも入浴しているんじゃないですか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6253k/>

岡田直己の神様体験

2011年10月6日16時30分発行